紅蓮の道（あかのさだめ）

井浦美朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅蓮の道（あかのさだめ）

【Ｎコード】
Ｎ１１１９Ｂ

【作者名】
井浦美朗

【あらすじ】
裏の世界に極秘に存在する遠野遺伝子研究所。ここで遺伝子操作によりつくられた人工児第１２号の女児「二葉（ふたば）」の使命は、学園生活の中で新たな実験台を探し出すことだった。研究所を取り巻く大人達の陰謀と葛藤の中、二葉の運命は翻弄されていく。別掲載「紅蓮の影」（ジャンルは学園）は、この小説の最終章にあたります。

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

プロローグ

遠野遺伝子工学研究所。

それは、戦前の人体実験の流れを汲む、世の表舞台に出ることのない極秘の研究所。

遺伝子研究のほか、臓器移植、冷凍睡眠などの研究を行うが、その多くは法や生命倫理に抵触する。

遺伝子操作による人工児の第１２号として誕生した女児には、「二葉（ふたば）」という名がつけられた。研究所の二代目所長、遠野基（とおのもとい）の遺伝子を継ぐ二葉は、多忙で育児能力のない基の代わりに、忠実な研究員夫婦のもとに預けられた。研究員夫婦は表の世界にもどり、二葉を穏やかな環境のもとで大切に育てた。

二葉が１２歳のとき、突然、基の妹「美鈴」が迎えに来た。

育ての父母と別れ、二葉は研究所に連れ戻された。

だが、そこに待っていたのは、二葉の親友「セシリア」の変わり果てた姿だった。可愛くて優しくて賢いセシリアは、美鈴に拉致され、冷凍睡眠カプセルの中に眠らされていたのである。

二葉に与えられた使命は、新たな人体実験の材料となる優秀な若者を探すため、全国の学校を渡り歩くこと。

もし他人にこの研究所のことを話したり逆らえば、セシリアは殺され、二葉自身も実験材料として刻まれるという。

基は、二葉の耳たぶに発信機と盗聴器つきの赤いピアスを埋め込んだ。それは、二葉が研究所の実験のためにつくられた「道具」である証。

その紅蓮（あか）の色こそが、二葉の道（さだめ）―

第1話その1

小高い丘の上に、その学校はあった。私立星条女学院中等部。付属の幼稚舎、そして高等部が隣接する。紺のセーラー服に赤いシフォンネクタイ。校章と各自のイニシャルがデザインされたブローチが、ネクタイ留めとして胸元を飾る。

中学1年の3学期。二葉はここに転入した。

美鈴の使命を理解しながら、未だそれを一度も実行できていない。それは、二葉がすぐに学校に馴染んでしまうからだ。なるべく多くの実験台を手にするため、1学期か2学期ごとに転校を繰り返す予定だった。だが、何も理由がなく転校を繰り返すのには無理がある。そのため、一番良い理由づくりに「不登校」になるよう命ぜられていた。何となく休みがちになり、やがて登校しなくなり、周りが二葉の存在を忘れた頃、二葉が探し当てた実験台のターゲットを美鈴が拉致するという算段だった。ところが、二葉は気をつけていても、どうしても友人ができ、親しくなってしまい、「不登校」とは無縁の状態になってしまうのである。業を煮やした美鈴は、盤若の面のような形相で二葉を脅した。

「今度失敗したら、優秀だろうとなかろうと、あんたが一番親しくなった子をさらって実験台にしてやる。・・・セシリアのようにね。」

二葉は唇を噛み締め、自分の使命を今一度、心に刻み付けた。

セシリアを目覚めさせるために、美鈴は20人の生け贄を要求している。研究所が欲しているのは、18歳までの若い遺伝子と肉体だった。よって、二葉が高校生で通じる20歳までに毎学期転校を繰り返して一人ずつターゲットを見つけるとしても、もう、失敗できないところに来ていた。

（優秀で、性格の悪いやつを見つければいいんだ。それなら、できる。）

両拳を胸の前で握りしめ、二葉は覚悟を決めた。
1年椿組、というクラスに入った。女子校は初めてだが、なんとなく喉の奥がむずがゆい。会話から、生活そのものに至るまで、何かフワフワしている。
だが、その中で一人、異質な少女がいた。
ショートカットで一重の鋭い目。中性的な魅力があり、わかりやすいくらいクラスの中で憧れの的になっている。だが、周りは皆、とりまくだけ。容易に近づけないオーラのためか。
真淵南織（まぶちなお）。
特別な友人はおらず、どちらかというと一匹狼。
南織はオーケストラ部に所属し、ステンドグラスから神秘的な光が注ぐ吹き抜けのラウンジで、毎昼、ヴァイオリンを奏でる。練習というが、その音色といい、観客の多さといい、どう見てもリサイタルのようだった。自然の光が、こんなにも人の横顔を美しく浮かび上がらせるのだということを、皆が認識せずにはいられない。
二葉は、唇を噛みながら南織を遠くから観察していた。
実験材料として、ふさわしい人物だ。
見ているだけで、幸せになる。勇気が湧いてくる。
（だめよ。彼女は、今の世に必要な人よ。第2のセシリアにはできない。）
二葉は視線を落とし、南織のヴァイオリンの音色に背を向けた。
（別のを探そう。優秀でも、性格が悪くて、周りに害をもたらす、そんな人を。）

第1話その2

学校から最寄の駅まではスクールバスによる送迎があり、ほとんどの生徒が利用している。二葉も南織もその一人だった。偶然、二人は席が隣になった。先に窓際に座っていた二葉のところに、南織がやってきたのだ。

「隣、いい？」

透明な、氷のように透き通る声。二葉が南織の声を聞くのは、これが初めてだった。

「どうぞ。」

ちょっと腰を窓際へずらし、二葉は手のひらを差し伸べた。

少し経っただろうか。

二葉は、南織がずっとうつむいているのに気付いた。南織の表情は苦痛に歪んでいる。

「・・・どうしたの？」

南織の乱れた前髪の隙間から、蒼く汗ばんだ額がのぞく。

「具合悪いの？」

「・・・・ちがう。」

二葉はどうしたらよいかわからず、ただ南織の様子を見守るしかなかった。

バスは間もなく駅のロータリーに到着した。他の生徒がどんどん先へ降りていく。二葉は南織の鞄とバイオリンを背負い、南織の身体を支えるようにしてバスのタラップをゆっくりと下った。

「とにかく、座ろうか。」

二葉は、バスの停留所のベンチに南織を座らせ、自分も脇に腰掛けた。

「お家、どこ？私、送っていこうか？」

すると、南織は激しく首をふった。短い髪が乱れる。

「じゃあ、何か飲み物買ってこようか。暖かいのがいい？それとも、

炭酸系？水？」
「・・・炭酸。甘くないの。」
「わかった。」
二葉は近くの自動販売機に走り、財布を取り出した。財布自体は養母が買ってくれたものだが、中身は現在マンションで同居している美鈴から渡されたものだ。５００円。通学に必要な電車の定期以外は、これがすべてだ。
一瞬、躊躇した。
別に、買いたいものがあるわけではない。
これは、美鈴が研究所へもどり、独りになったときの食事代なのだ。しかも、何日続くかわからない。
だが、今、南織を放ってなどおけない。二葉は自分の使命など完全に忘れて、財布から５００円玉を取り出した。
冷たい飲み物で、南織は少し楽になったようだ。
「ありがとう。もう、平気。」
南織は顔を少し傾け、疲れた頬で微笑んでみせた。
「あと少し休めば、帰れそうだから。もう、行っていいよ。」
そう言われると、帰るしかない。心配ではあるが、二葉は南織を置いて背を向けた。

第1話その3

南織は次の日、何事もなかったかのように涼しい顔をしていた。二葉を見ても、話しかける素振りもみせない。二葉も極力まわりとの会話を避けているから、それはそれで都合がいいのだが、少し、寂しい気もする。

（バカね。私、友達作るために学校にいるんじゃないのよ。）

英語の授業で、綺麗な発音で教科書を読む南織。優秀で、ヴァイオリンの天才。

しかも美少女。美鈴が泣いて喜びそうな逸材。

いつの間にか、頬杖をついて見とれている。

憧れ、なのだろう。二葉にないものを、沢山持っている。

南織は、いつも一人だった。女子は、とかく群れたがる。なのに、南織は誰に媚びることもへつらうこともなく、常にキッと前を見据えている。

昼休み、トイレの個室に入っていた二葉は、外の洗面台で髪をとかしながら噂話に花を咲かせている同級生の会話を何となしに聞いていた。が、その中に「真淵さん」という名が出たとたん、息をひそめて耳を澄ませた。

「週刊誌に載ってたのよ。門田真治（もんでんしんじ）の隠し子だって。」

「あの、渋い二枚目俳優の？」

「そう。独身だって話だったのにね。」

「真淵さんが門田真治の隠し子ねぇ・・・。でも、週刊誌なんてあてになるの？」

「写真が載ってたのよ。顔がモザイクだったけど、制服で写ってるのよ。髪の長さとか、顔の輪郭とか、絶対真淵さんしかありえないもん。」

「へぇ・・。でもさ、」

声はそこで聞こえなくなった。

個室から出た二葉は、南織が孤独でいる理由が何となくわかるような気がした。
週刊誌の話はトイレの中だけに留まるわけもなく、次の日には学校中に広まっていた。友達のいない二葉も、一人で校内を歩けば、あちらこちらで南織の噂を耳にする。ついには、好奇心旺盛で浅はかなクラスメイトが、南織にきいた。
「門田真治の娘って、本当？」
周りが固唾を呑んで見守る中、南織は立ち上がって言い放った。
「私には、父親なんていないわ。父と呼べる人は、この世に一人もいないのよ。」
そのセリフは、二葉の心を疼かせた。二葉も、同じ事を考えていたからだ。育ての父母と別れ、遠野基という男が遺伝子上の父だと教えられた。しかし、父親だとは思えない。養父はあくまで他人で、「父」ではない。だから、自分には父親などいないのだと思っていた。それを、南織も感じていたなんて。
南織は、噂などどこ吹く風といったように、気にする様子も見せなかった。誰が何と言おうと、まっすぐ、前を見据えていた。うつむくことなどなかった。その毅然とした横顔は、一層凛々しくて、美しかった。
二葉にとって、この出来事が南織に勝手な親近感を抱かせるようになったのは事実だった。
南織と会話をする機会がまったくなくても、もう、二葉にとって南織は他人ではない。
だが、南織が「父なんていない」と言った本当の理由など、今の二葉には知る由もなかった。

第1話その４

ターゲットを見つけられなければ、一番親しくなった子が研究所の実験材料となってしまう。だから、南織と関わってはならない。南織の存在を、美鈴に知られてはならない。

だが、ターゲットが見つかる気配はまったくなかった。他人と関わらない限り、好きとか嫌いとか憎いとか、そんな感情が湧くわけがない。賢いか否かは判断できても、傍で見ている以上、性格まで判断するのは難しい。みんなから嫌われている子や、いじめられている子がいるのは何となくわかるが、そういうことに関わっている加害者も被害者も、美鈴を納得させられる「優秀な遺伝子」を持っていそうにない。しかし、無理にでも見つけなければならない。セシリアを救うために。そして、南織を実験台に捕られないために。

そんな中、二葉は再び南織と関わることになった。

２月中旬に行われる合唱祭の指揮者とピアノ奏者に選ばれたのだ。

「はい。」

南織が二葉に、楽譜を差し出した。

「え・・・。」

「弾けないと、練習にならないでしょう？伴奏者さん。」

憧れの南織の近くにいられるのは嬉しい。しかし、こういう役割は番狂わせだ。南織の存在を美鈴から隠し、ターゲットを一日も早く見つけ出して、なるべく目立たないように不登校にならねばならないのに。

困惑顔の二葉に、南織は冷たく言い放った。

「先生が個人カード見て決めたことよ。観念して。」

「待って。私、・・・今の家にピアノはないの。」

「学校にはピアノ練習室というのがあるの。そこを予約すればいいのよ。」

次の言葉が思いつかないうちに、南織は踵を返して去っていった。

（半月後の本番に影響が出ないうちに不登校になろう。）
その理由は？
例えば南織と喧嘩すること。学校中に広まれば、二葉は全校を敵に回したも同じだ。
だが、その前に拉致すべき生徒を見つけねばならない。それが一番の問題だ。南織を憎むことが出来れば、簡単なのだが。
ピアノ練習室は、中学棟に隣接する高校棟にあった。音大を受験する高校生のためのものらしいが、1月下旬のこの時期に受験生は登校していないため、練習室はすぐに予約できた。
（練習しないほうが真淵さんを簡単に怒らせられるのに・・・何やってんだろ。）
二葉は3歳から美鈴に引取られるまで、ずっとピアノを習っていた。音楽高校のピアノ教師の家で厳しく指導され、どんな曲でも、大抵は弾くことができる。今回の曲はフランスの作曲家による賛美歌。和声とオルガンの掛け合いが美しい。音楽がもともと好きな二葉は、思わず真剣に練習していた。本番には、パイプオルガンが用意されるという。
美鈴が迎えに来たあの日から、もう、二度とピアノには触ることができないと思っていた。　だから、こんな時間を得られたことは二葉にとって久々の幸せだった。
このまま、使命など忘れてしまいたい。
このまま、時間が止まってくれたら・・・。
それが叶わない願いとわかっていながら、二葉はピアノの音色に身を委ねていた。

第1話その5

南織と初めての音あわせ。二葉はわざと下手に、つっかえながら弾いた。
「・・・もう、いいよ。」
途中で、南織は指揮棒を降ろしてしまった。こうなることを望んでやったことなのに、二葉の心はちくりと痛んだ。
南織は二葉に背を向け、言った。
「そんなに、嫌なんだ？」
「ううん、そうじゃないの。私・・・、もともと下手で。」
「じゃあ、上手くなるまで練習しなさいよ。言い訳なんて、聞きたくない。」
冷たい、きつい物言いに、二葉は思わず言葉を返した。
「真淵さんのような天才に、凡人のことなんかわかるわけないわ。世の中には、いくら努力したってできないこともあるのよ。誰でも、あなたのようにはいかないわ。」
肩越しに振り返った南織の目が、不快感を表していた。
「天才って言葉嫌い。私の努力を、全部否定する言葉よ。指から血が出るまでヴァイオリンの猛特訓をしても、『天才だから上手』でおしまいなんて。」
二葉は、肩を落とした。後悔した。
「もう、いいわ。私が先生に言って、代わりの人を探してもらう。自分の責任を果たさないで平気でいられるような人は、私も困るし。」
練習室を出て行こうとした南織を、二葉は引き止めた。
「待って！」
南織は、かまわずドアを閉めた。が、二葉はめげずに追いかけた。
「待って！明日、もう一度ひかせて！絶対、ちゃんと弾くから！」
奈織は、振り向いてくれない。しかし、少しの間のあと、背を向

けたまま小さく言った。
「・・・もう一度だけよ。」
二葉は肩で息をしながら、だまって大きく頷いた。
嬉しかった。
南織に嫌われたくない。憎みあうための喧嘩なんて、できない。せっかく不登校になるきっかけをつくったというのに、それを自らぶち壊した。でも、こうせずにはいられなかった。
二葉は、楽譜を胸にぎゅっと抱きしめた。
しかし、現実は二葉の夢心地を許さなかった。その日二葉が家に帰ると、美鈴が嬉しそうに笑っていたのである。
「よかったわ、こんなに早く獲物が見つかるなんて。」
二葉は、ハッと息を呑んだ。
今日の会話！
南織が天才だと、口をすべらせていた。盗聴器の存在など、完全に忘れていた。
目が見開いたまま、二葉は硬直して動けない。
使命を忘れて軽はずみな行動をしたために、巻き込みたくない人を巻き込んでしまった。
「彼女は、駄目です！」
二葉は思わず、美鈴の足にしがみついて懇願した。
「他の人をみつけますから！彼女は、やめてください！」

第1話その6

美鈴の細い足は、二葉を身体ごと振り払った。そのつま先が無防備なみぞおちに食い込み、
二葉は一瞬、呼吸を失った。
「バカなことを。いい加減自覚しなさい、人工児が！」
吐き捨てるような言葉を受け、二葉はフローリングの上に倒れたまま、段々冷静になっていった。そしてそれは、冷静から冷ややかなまでの覚悟に変わっていった。
選択権などないのだ。
何か、思い違いをしていたのだ。
その晩、美鈴が用意した食事には強力な睡眠薬が仕込まれていた。
二葉は深い眠りにつき、次の日、学校を休んだ。
南織との約束を反故にしたのである。
美鈴は、これが二葉と南織との関係を悪化させる最良の方法と踏んでいた。

合唱祭の伴奏者は、別の生徒に変更された。
三日後に目覚めたとき、二葉はもう、学校へ行って南織と会わせる顔がないと思った。あの冷ややかな眼差しで軽蔑されたら、立ち直れそうになかった。理由はどうあれ、南織を裏切ったのだ。
―　言い訳なんか聞きたくない　―
そう言ったのは、南織だ。もう、二度目はありえない。しかし、南織に嫌われたことなど、本当はどうでもいいことだ。問題は、南織が研究所の実験台として拉致されてしまうこと。
（どうしよう・・・。どうしたらいい・・・？）
二葉は冷たいフローリングの上で膝を抱えながら、一日中考え込んでいた。
ここは、何もない部屋だ。

本棚や机といった家具もなく、病人用のような簡素なベッドがポツンと置いてあるだけだ。　制服以外の私服も、靴も、パジャマもない。
下着が上下３枚ずつ、あとは検査時用の白衣のみ。
教科書以外の本もないし、趣味を楽しむような道具も一切ない。
そんなものは、研究所の
「道具」には必要がないからだ。
一つの窓には、備え付けの鍵だけでなく、美鈴がつけた鍵が更に二つもついている。それは、外部からの侵入に備えたものではなく、二葉の脱走を阻止するためのものだ。部屋の扉には中から開けられない鍵がついている。普段、この鍵が閉められることはない。だが、これ見よがしに付けられた重々しい錠が、二葉が「囚われの身」であることを毎日実感させるのだ。
（こんな部屋にいながら、私は、何もわかっていなかったのだ。）
甘かったのだ。セシリアの冷たい顔を再び目覚めさせるということが、どんなに大変なことなのか、気付いていなかった。だから、学校で「憧れ」だの、「時間が止まればいい」だの、悠長なことをやっていられたのだ。初めてのターゲットが南織になってしまうという現実をつきつけられるまで、気付かなかったなんて！
盗聴器と発信機で監視された１３歳の二葉にできることなど、無に等しい。
しかし、南織をどうしても助けたい。その強い気持ちが先行する。
まだ、美鈴は家にいる。
南織を拉致すれば、美鈴は研究所に１ヶ月はいりびたるはず。だから、南織はまだ無事なはずである。しかし、美鈴にさからえばセシリアは容赦なく殺されてしまう。セシリアは、二葉を思いのままに操るための人質なのだ。
（探そう。真淵さん以上のターゲットを。そして、先に差し出してしまえばいいんだ。）
そして二葉は、二週間ぶりに制服に腕を通した。

第1話その7

二葉は美鈴に見つからないよう、家を出た。

こんなことをして、ただで済むとは思っていない。失敗すれば、自分もセシリアも無事ではいられないだろう。何としても今日中にターゲットを探し、無理にでも家に引きずり込み、有無を言わさず美鈴に差し出すのだ。そうすれば、同じ学校から二人も犠牲者を出すという危険を冒すわけのない美鈴は、南織をあきらめざるを得なくなるという算段だ。

二葉は、教室に一番登校した。

誰もいない冬の朝の教室は、温度がなく、冷たい。その空気の感触が、二葉の気持ちを一層ひきしめた。

そこへ、教室の引き戸が音をたてて開かれた。

振り向くと、南織が立っている。二葉は、まっすぐに南織を見た。謝ろうと、ずっと心の準備をしてきた。南織との接触は避けたかったが、これだけは人としてのけじめとして、やっておかねばならないと思うからだ。

「この間は、ごめんなさい。」

だが、南織は二葉を一瞥しただけで踵を返した。身体全体が、二葉を拒絶しているようだった。

二葉は、唇を噛んだ。こうなることを、望んでいたはずだ。こうなって当たり前だ。覚悟していたはずだ。それなのに、やはりつらい。好きな相手に嫌われるというのは、固く眉根を寄せずにはいられない切なさがある。

（これでいいんだ。私が真淵さんを想う気持ちは、別の形で表さなくちゃ。そっちのほうが重大なのだから。）

二葉は、その日一日、教室の片隅でずっと息をひそめて観察を続けた。もう、この際誰でもいい気がしてきた。南織でなければ、誰だっていい。どうせ誰かが生け贄になるのなら、南織を生かして、

別の誰かがなればいい。その積み重ねがやがてセシリアを目覚めさせることに繋がるのなら、それでいいではないか。
ところが、その昼休み。二葉は担任に呼び出された。
「今、君の叔母さんから電話があった。お父さんが倒れたそうだ。すぐに帰りなさい。」
「・・・！」
美鈴が、二葉の目論見を見抜いたのだ。「父」が倒れたなど、嘘にきまっている。だが、そんな裏事情を担任に話すわけにはいかない。二葉は、強制的に学校から出されてしまった。
エントランスホールから外へ出ると、あちらこちらからコーラスが響いてきた。
（そうだ、明日が合唱祭なんだ・・・。）
たくさんのハーモニーが重なり合う。その中を、二葉は肩を落として通り過ぎていかねばならなかった。
白い豪奢な門の外には、美鈴が車を横付けにして待っていた。
美鈴は、凍りついた二葉の身体を車の中に強引に押し込み、すぐに発進させた。
何も言わない美鈴の横顔が怖くて、二葉は身体を震わせた。
もう、おしまいだ。
何もかも、おしまいだ。
マンションに連れられ、二葉は自室に押し込められた。
「お前は道具なのよ。せっかくお兄様の遺伝子を継いだのに、ＩＱ１３０程度の凡人にしかならなかった。だから、こんな使い道しかないのよ。よく覚えておきなさい。生かされているだけ、幸せだと思いなさい！」
美鈴は、黒くて太い棒を取り出した。それが何をするものなのか、二葉の本能が察知し、思わず腰が引けた。
「・・・っ！」
振り下ろされた棒が、二葉の背中に食い込んだ。その次の瞬間、二葉は意識を失った。棒から流れる電流によるショックによるもの

だ。

その日、初めて二葉の部屋の扉の鍵が閉められた。

次に二葉が目覚めたとき。

それが、罪を負う始まりの朝になる。

第1話その8

合唱祭で学校中が慌ただしく動く日を、美鈴は待っていた。
学校が所有する７００人集客可能なホールは、保護者や生徒たちで賑わっている。美鈴はその中に紛れていた。南織は１年椿組の指揮者。すぐに見つけられる。
１年生の出番は午前の早い時間だ。中等部は全学年で５４０名。保護者席を確保するために、生徒は自分達の出番が来るまでは教室で待機し、出番が終われば教室へ戻る。正午過ぎの結果発表後は流れ解散となるため、誰がいつ帰ったかが最もわかりにくい日といえる。
美鈴は前方の席で、椿組の発表をサングラス越しに観察していた。そして、すらりと伸びた手足の美少女が颯爽と現れたのを確認し、心の中でほくそ笑んだ。二葉が「天才」と言っていたが、見てくれも申し分ない。
結果発表が終わり、ホールのホワイエに出来た人だかりをよけながら、美鈴は南織の姿をしっかりと捉えた。南織は一人だ。保護者は来ていないらしく、まっすぐ出口へと向かっている。
美鈴はそっと後ろから近づき、人ごみに紛れて、南織の鞄に盗聴器を取り付けた。
南織はスクールバスを待たず、校門から少し歩いて幹線道路に出ると、路線バスに乗り込んだ。
（一体、どこへ・・・？）
真昼間のバスには人がほとんど乗っていなかった。南織が最後部の隅に座ったため、美鈴はさりげなく前方の座席へまわる。
人の入れ替わりがあまりないまま、バスは２０分ほど走って、終点に着いた。
（ここは・・。）
そこは、市立総合病院だった。あまり評判は良くないが、この辺

りには大病院が他にないため、患者はひっきりなしにやってくる。
美鈴とて、医者だった身だ。しかも、つい1年前まで。兄の基も、父が体調を崩す5年前までは医師だったし、その後父が死ぬまでの2年間は、父の研究所を手伝いながら医大での研究も続けて論文を発表し、世間の注目を浴びていた。
懐かしい匂いがする。
慣れた空気が、美鈴に安堵感をもたらす。
しかし、ここで気を抜くわけにはいかない。
美鈴は、南織に感づかれないように後を追った。
南織は総合受付で手続きを済ませ、ロビーを抜け、1階の奥へと歩いていく。外来棟での受付をしたのだから、南織本人が病気ということだ。
だが、南織のたどり着いた先は、思いがけない科だった。
産婦人科。
（・・・！？）
美鈴は、南織が待合室のソファに腰掛けたのを確認すると、脇のトイレに隠れた。
個室に入り、鞄から白衣を取り出す。白衣は商売道具としていつも持ち歩いているが、病院でなら、内部まで入り込むのに都合がいい。個別の部屋へはセキュリティカードが必要だろうが、それ以外で歩き回るなら、白衣で堂々としていれば誰も怪しまないものだ。
それにしても、南織のような少女が、一体なぜこんなところへ来たのだろう。
美鈴は待合室から少し離れたところで南織を観察し、盗聴器からの音を拾うべくイヤホンを耳にあてた。
やがて、南織が入った第2診察室からの声が届いてきた。
美鈴は、その内容に愕然とした。
（まさか・・・！）
診察室から出てきた南織の表情から、動揺は見られない。
南織はおそらく、すべてを覚悟していたのだろう。

そこへほどなく若い女の看護師が現れ、南織を連れてエレベーターに乗り込んだ。
美鈴は慌てて後を追う。
二人の会話が、電波の雑音に紛れてイヤホンから聞こえてくる。
「今、先生がご家族と連絡をとっていますからね。しばらく、ラウンジでお茶でも飲んでいましょう。」
病院の最上階のラウンジ・・・というより、患者の談話コーナーのような場所に座った看護師と南織の姿を、美鈴は壁に隠れて確認した。看護師は紙コップに入った温かい飲み物を自販機で買って南織に差し出し、ここで待っているよう諭して、去っていった。
一人うつむいている南織は、紙コップに唇を少し付けたまま、動かなくなった。
三十分。
一時間。
まだ、南織の下へは誰もやってこない。
父親は俳優だと言っていた。そうそう、来られるものでもないのだろう。
夕方になり、談話コーナーにオレンジ色の日が差し込んだ。
南織の白い頬が、赤く染まる。
と、そのときだった。
南織がいきなり立ち上がり、ふらふらと歩き出したのである。
（えっ、ちょっと。）
美鈴が後を追うと、南織は屋上へ向かう階段を昇り始めている。
その様子が、何だか死への階段を上りつめていくように見える。美鈴は固唾を呑んで、だまってその後を追った。
アルミ製の扉のシリンダー錠は、内側から簡単に開けることが出来る。
扉を開けた瞬間に、南織の短い髪がブワッと風に煽られた。
だが、その足は怯むことなく、まっすぐ、突き進んでいく。
やがて、屋上の手すりのところまでやってきた。

少しもためらうそぶりがない。
南織は、靴のまま鉄の柵に足をかけた。
「待ちなさい！」
美鈴は、思わず叫んだ。だが、南織は聞こえないように、そのまま身を空中へと乗り出す。
「待って！」
美鈴は南織の細い体に、背中から抱きついた。
「駄目よ、それは駄目！」
だが、そのセリフは南織の命を尊重したわけではない。生きた実験台が欲しい美鈴の気持ちから出た言葉だ。
南織は身体を思い切り揺さぶった。
「放して！」
「いいえ、放さないわ！」
美鈴は全力をかけて、南織を鉄柵から引き離した。そして、言った。
「私は医者よ。あなたの力に、なれるかもしれない。」
南織は泣き笑いの表情を浮かべた。
「医者なんて、あてにならないわ。私の意志だけではどうにもできないって言ったわ！あなただって、どうせ同じよ。」
「それはどうかしら？私は、法律とか倫理とかより、一人の患者の気持ちの方を優先させる質だけど。」
「・・・・・。」
南織は、奥歯を噛み締めて何かを耐えているように見えた。
美鈴は、優しく言った。
「あなた、妊娠しているでしょう？」
「・・・・。」
「その相手って、もしかして、あなたのお父さん？」
「！」
南織の驚きが、ダイレクトに伝わってくる。やはり、そうだったのか。さっき、診察室での医師との会話を聞いていて、南織が家族に知られたくない、父親の顔なんか見たくもないと叫んでいたのを聞

いて、何となくそんな気がしていたのだ。母親は離婚していないといいうし、二人きりの生活で性的虐待を受けていたのでは、さぞ辛かったことだろう。
なのに、学校では優等生で、毅然としていて、そんなそぶりを微塵も感じさせなかった。
大した少女だ。だが、やはり、１３歳の女の子だ。苦しみ、傷つき、今、その命を絶とうとしている。
美鈴は言った。
「私と一緒にいらっしゃい。あなたのお父様がここへ来ないうちに。」
「でも、中絶したって、どうせまた父の餌食になるのよ。父から離れられたとしても、絶対マスコミの目に曝されて、私の秘密がばれてしまう。そんなの嫌・・！」
初めて、南織の瞳から涙が溢れた。
美鈴は、南織を抱きしめた。
「大丈夫、私に任せて。あなたを、父親から解放してあげる。自ら死ぬことなんかないわ。あなたはこんなに素敵に生まれたのだもの。それに相応しい未来を、私ならあげることができる・・・。」
美鈴は胸元に仕込んでおいたクロロホルムを南織にかがせた。
目尻から頬を伝った泪が乾かぬうちに、南織は深い眠りについた。
美鈴は南織を抱きかかえ、非常階段から外へ出た。
そこには、あらかじめ連絡をしておいた研究所の手先が車を付けて待っていた。
「すぐに研究所へ。上等な獲物が手に入ったのよ。お兄様、きっと喜ぶわ。」
南織のしなやかな身体を自分の膝の上に横たえ、美鈴は静かに瞼を閉じた。

第1話その9

二葉が目覚めたのは、それから3日後のことだった。
しかも、それは美鈴と暮らしているマンションではなく、研究所の実験室だった。
二葉が真っ先に目にしたのは、セシリアの隣に置かれた、二つ目の冷凍催眠カプセルだった。
「・・・！」
二葉の悲鳴は、声にならなかった。美鈴は、そんな二葉に言った。
「あなたの使命よ。次も、しっかりおやりなさい。」
二つのカプセルの間で泣き崩れる二葉を置き去りにし、美鈴は部屋を出た。
外には、兄、基(もとい)が立っていた。
「今回の子は、自ら死を望んでいた。それに、あのまま生きていてもつらいことになったはずだ。そういう子を救ったのだと、二葉に言ってやったらどうだ？」
美鈴は、首を振った。
「いいえ。それは偶然だっただけのこと。私たちの研究所は、自殺志願者の駆け込み寺ではないわ。二葉には、今回のことで、覚悟を決めてもらわねば。二葉の行動が、人一人の命を研究所に捧げさせたのだということを実感してもらうのよ。」
「二葉には、『人を救うことにもなる』と思わせたほうが効果的じゃないのか？」
「そんな偽善では、すぐにボロがでるわ。二葉は、まだまだ甘ちゃんよ。もっと冷酷に、冷徹になってもらわないと、到底使命など果たせない。」
「・・・そこまでする必要があるのか。」
「あるわ。自分が研究所の道具で、何をしなければならないのか、そして、それが出来ないなら、道具は捨てられる運命にあるのだと

いうことを、もっと思い知らせてやらないと。」
「まあ、今回はとりあえず成功したんだ。それは、認めてやれ。」
「成功？違うわ。あの子は逆らっていた。今回のことは・・・私にとっては運がよかったということ。あの少女にとってはこれが・・・運命だっただけ。二葉は仲介役以下よ。」
「それで十分じゃないか。二葉が直接手を下す必要はないのだから。」
美鈴は、基を冷たく諌めた。
「・・・お兄様。二葉は研究所のために作られた道具なのよ？しかも、ＩＱ１３０しかない、出来損ないなのよ？私たちに危険が及ぶ時には真っ先に犠牲になってもらうだけの価値しかないの。そのことを、いい加減に自覚なさって。ご自分の遺伝子を継いでいるからといって、下手な感傷を持たないでちょうだい。」
「二葉はまだ１３歳だ。そこまで追い詰めるのは、酷だろう？」
「酷？道具に同情は無用よ。二葉は人間ではない、道具なんだから。」
美鈴は、くいっと顎を上げ、遥か遠くを見つめた。
「・・・運命に感謝するわ。望んで手に入るものではない、貴重な症例を手に入れることができたんだもの。あの少女の体内には実の父親との間の子がいて、その遺伝子分析ができたのだもの。あとは、きれいになったあの子が５０年後に目覚めるのを待つのよ。」

基の部屋のテレビには、南織の父で俳優の、門田真治が映っていた。
娘が突然行方不明になってしまい、その消息を知りたいと、涙を流して訴えていた。
それを見た美鈴は、鼻先で嘲った。
「くだらない男。自分の娘に乱暴して妊娠させたって事、マスコミにリークしてやりたいくらいよ。」
「・・・美鈴にも、正義があるんだな。」

「違うわ。ただムカつくの。・・・それだけよ。」
美鈴はそのまま、基の顔を見ることなく、部屋から立ち去った。

南織は3年後、カプセルの中で朽ち果てる。

第2話その1

中学2年の1学期が始まるまでの1ヶ月、二葉は研究所で過ごすことになった。
冷たい灰色の壁の内側では、外の季節など全く感じることはできない。それに、南織を犠牲にしてしまって以来、二葉の心は死んだ様に反応しなくなっていた。美鈴がどんなに暴行し、痛めつけても、表情一つ変えることはなかった。そして夜中になると、思い出したようにすすり泣くのである。
そんな状態が2週間も続いたある日。
二葉の瞳は、突然、金色の光をとらえた。
その美しい光の正体をつかもうと、二葉の心が少し反応した。
「・・可哀想に・・。」
光の中から、柔らかな花びらのような声がする。
2週間、何も映らなかった二葉の目に、一人の女性が映し出された。
それは、この世のものとは思えない、美しく気高い、大人の女性だった。
その女性は何故か二葉に慈愛の眼差しを向け、優しく身体を抱きしめたのである。
二葉には、理由(わけ)がわからなかった。
一体、この女性は何者なんだろう・・・。
いい香りがする。
薔薇の香り。
甘くて清清しい、朝露を含んだ花びらの香り。
「優三(ゆうみ)。」
部屋の扉が開き、今度は男の声がした。
だが、男の姿は二葉の瞳に映らなかった。声の方を向いても、暗闇しか見えない。

しかし、金色の光に包まれた女性は声の主に向かって返事をした。
「・・・あなた。」
「優三。こんなところで何をしているんだ？勝手に歩き回るなと言ってあっただろう。」
「勝手ではないわ。遠野所長に頼まれたのよ。二葉に会ってくれって。可哀想に、２週間もろくに眠らず、食べず、呆けているのですって。」
「その子はこの研究所の実験材料だ。もともと、心など必要がない道具だ。放っておけばいい。」
「このままでは、死んでしまうわ。」
「死ぬもんか。何のためにこの研究所に多額の投資をしていると思っている？死に損ないくらい生かせられねば、採算があわん。」
「肉体は、どうにかなるわよ。でも、心は違う。」
優三は二葉を抱きしめたまま、放そうとはしなかった。
「お願いです。私に二葉の世話をさせて。」
「お前は私の妻だ。その勤めだけ果たせばいい。余計なことはするな。」
「だから頼んでいるんです。・・・二葉を救えるのは私しかいない。」
「くだらない同情か？それとも、同じ人工児としての仲間意識か？」
夫の厭らしい物言いに、優三は美しい眉を吊り上げた。
「その両方です。あなたのような純粋な『人間』にはわからない領域よ。」
そう言いきった優三に舌打ちをして、男は踵を返した。
男の名は真崎潤一。
運輸からホテルまで手広く事業を展開する真崎グループ総帥の次男である。
真崎グループは戦時中に軍事産業でのし上がった、日本屈指のグループ企業である。遠野遺伝子工学研究所は、このグループからの出資で代々成り立ってきた。戦時中は細菌兵器や薬物などの研究に

取り組み、現在は臓器売買やクローン研究の他、政財界や著名人の『お忍び』の手術、倫理規定や法に抵触する手術などを行っている。その仲介役をかっているのが真崎潤一だった。研究所は、もはや潤一のものと言っても過言ではなかった。潤一の命令は絶対であり、所長である遠野基（とおのもとい）は権限の無い単なる研究員のまとめ役だった。研究所内で行われていることが外へ漏れないよう、研究所は住所を持っていない。研究員は入所したら死ぬまで門の外へ出ることはできない。研究所の既定を破ったり逆らったりすれば、身体を刻まれてアルコール漬けのサンプルになるか、人体実験に利用されるか、どちらにせよ生きてはいられない。これらの後始末をするのも、真崎潤一の仕事だった。

潤一の父は、研究所の初代所長である基の父に、遺伝子操作による人工児の試作を依頼した。その第3号が潤一の妻、優三（ゆうみ）である。

優三は世界中の精子・卵子バンクから最も優秀な遺伝子を選りすぐり、更に遺伝子操作を施して誕生した逸材であり、研究の最たる成功例だった。たぐい稀な美貌、王族や貴族を思わせる気品、姿、どれをとっても申し分なかった。誕生時にその資質を確信した潤一の父は、優三を、子のない資産家夫婦の養子にとらせるべく引き取った。大金持ちの一人娘として教育された優三は、出生の確かな令嬢として、大学卒業後すぐに潤一と結婚したのである。

潤一にとって優三は体面を保つのに都合のいい妻であるに過ぎなかった。

優三を連れて歩けば、どこへ行っても注目される。その妻をどれだけ大事にしているか演じれば、潤一を悪く言う者など決して出てこない。たまに悪口を言う者がいても、逆にその者が「やっかみを言っている」と批難されるだけだ。事実、潤一と優三は上流社会一の美男美女夫婦として有名になっている。二人の間に子どもはいない。真崎家の跡継ぎは長男であり、潤一が跡取りの心配をする必要はない。優三はあくまで潤一が生きている間の「飾り物」であり、優秀な子孫繁栄などには関係がない。だから、優三の知能指数は1

２０。著名人達と知的な会話がこなせる程度で十分なのである。賢すぎれば潤一に逆らう虞がでてくるからだ。
優三が潤一の存在を知ったのは、やはり１２歳の時だった。
突然家に現れた６歳年上の青年。上質なスーツを着たノーブルな雰囲気の奥に潜む陰湿な影を、優三は見逃さなかった。だから、一目で嫌いになった。しかし養父母から告げられたのは、この男が自分の許婚者であるという衝撃の事実であった。
養父母のいないところで、潤一は優三の出生の秘密をすべて打ち明けた。
「だから、君は僕のために作られた人形なんだ。そのことを一生、忘れるな。」
資産家の養父母は優三が研究所の人工児だということを知らない。潤一の父は「名だたる方の隠し子」として、優三の養子縁組を取り持った。養父の会社はいくら資産を持っているとはいえ、真崎グループとの取引なしではやっていけない。当然、縁組を喜んで引き受けざるをえなかった。しかも、当時６歳だった潤一の将来の花嫁として育てろというのだから、真崎家との血縁関係を結ぶことができるという利点がある。だが、研究所の存在を知られてはならないという前提がある以上、優三の出生の秘密が養父母に明かされることはなかった。
優三の幸せな日は終わった。
自分が養女であるという事実は知っていたが、養父母はこの上なく自分を愛しんで育ててくれたから、寂しいとか、本当の両親が知りたいとか思ったことは殆どなかった。
潤一と会ったその日に、デートと称して連れて行かれたのは見知らぬ土地の奥深くに存在する、灰色の建物の中だった。そのおぞましい雰囲気に、優三は身の毛がよだつ思いがした。
そこで優三の耳には、紅蓮色のピアスがつけられた。
右耳には盗聴器。
左耳には発信機。

身体に埋め込まれ、取ることはできない。
潤一は、その二つで優三を監視すると言い放った。
「バカな真似はするなよ。どういうことか、わかるよな？それくらいわからないような愚かな女なら、用はない。道具として役に立たないのなら、捨てるまでだ。」
優三は、自分の人生が、自分のためのものではないことを知った。
養父母に、もう、頼ることもできない。
この日、自分は死んだと思った。

第2話その2

２ヶ月に一度、優三は研究所に連れてこられる。研究所の作品としての成長記録をとるためだ。１２歳のあの日から、一度も欠かされたことはない。

そんな中、二葉の存在を知った。

１２歳という優三と同じ年齢で運命を決定付けられた少女が存在する。

優三が潤一の言いなりになっているのは、養父母の平穏な暮らしのためだ。だが、二葉の養父母はもともと研究員だったことから、二葉が研究所に引き取られた直後に殺されてしまっている。そんな二葉を言いなりにさせているのが、冷凍睡眠の実験台となったセシリアという親友だという。研究所の汚いやり方は、２５年前から、何も変わっていないのだ。

ただ、ほんの少しだけ救いなのは、現所長、遠野基が二葉の父であるということである。だから二葉を、そうそう無碍に扱えないらしい。それゆえに基は、心を凍結させてしまった二葉を案じ、優三に相談したのである。

優三は基に、「必ず正気に戻してみせる」と約束した。

「私たちの屋敷に連れて行くのはまずいでしょうから、私が研究所に残ります。」

「それはありがたいが・・・オーナーはお許しにならないでしょう。」

「医師である所長にも、美鈴さんにも治せないのは、医療だけの問題ではないからです。二葉には、愛情とか優しさとか、そういうものが絶対に必要です。それをあげられるのは、私だけです。そうでしょう？」

基はオールバックにした頭を抱え、眼鏡の奥の眉間に深い苦痛の色を浮かべた。実際、基には手の施しようがないほど、二葉は重症

だった。美鈴など、半径１０m以内に近づくだけで、二葉は痙攣を起こして気絶してしまう。
　だが、優三の腕の中で安らかに眠ってしまった二葉を見た基は、もはや優三に頼るしかないと確信した。精神異常をきたした二葉では、実験材料としての元をとることができないどころか、生かしておくための余計な世話が必要になってしまう。基はその苦しい事情を潤一に訴えた。
　足を組んでタバコの煙をくゆらせながら、潤一は言った。
「殺せばいい。そんな、役立たずは。」
「・・・しかし、二葉には大金をかけています。そう簡単には・・・。」
「違うだろう？所長。君が二葉に執着するのは、君の遺伝子を継いでいる娘だからだろう？」
基は少し唇を震わせ、しかし、首を横に振った。
「いいえ。・・・二葉は、この研究所の物です。それだけです。」
「素直じゃないな。君が『自分の娘を助けたい』と懇願すれば、私の気持ちも動くかもしれないのに。」
基は宙を睨みつけ、黙った。
　すると、潤一は言った。
「じゃあ、取引をしようか。私の妻を3日間だけ貸してやる。その代わりに・・・。」
潤一はにやりとほくそ笑み、一枚の紙切れを基に差し出した。
　その紙に目を通したとたん、基の顔色が変わった。
「これは・・・！」
「これだけの臓器が必要なんだ。3日後までに。そうすれば莫大な謝礼を払ってもらえるんだよ。それで手をうとう。」
「こんな量は、無理です。」
「美鈴に頼んで、数人用立てればいい。足りなければ研究員を犠牲にしろ。それができないなら、優三は渡せない。」
「・・・・それは・・・。」

「優三の代わりが誰にも勤められないのなら、仕方ないだろう？二葉を諦めるか、他人を犠牲にするか、どちらかだ。」
「美鈴が・・二葉のために動くとは思えません。」
「動くよ、美鈴は。二葉のためにではなく、オーナーである私のために。」
基自身に二葉を治す自信があるなら、いくらオーナーの頼みとはいえ、こんな申し出は断る。しかし、もう2週間、手は尽くしたのだ。基だって、二葉に愛情や優しさをたっぷり注ぐ必要があることぐらいわかっている。だが、基の優しさには、二葉は少しも反応しないのだ。時間をかければ変わるかと思ったが、駄目だった。基の愛情が本物でないことを、二葉は本能で感じ取っているのかもしれない。二葉が自分の娘だという事実を理解できない現実。優しくしたくても、心がそれを受け入れてくれない。二葉は、そんな基の感情をすべて知っているのだろう。
基の手の甲にへばりついた青い血管が、びくびくと震えている。
二葉を捨てるか。
真崎潤一にとって、二葉はガラクタ同然なのか。基を意のままに操るための道具と思っているのか。
「さあ、どうする？私も忙しいんだ。早く返事をしてくれないか。」
大嫌いだ。
人の心をもてあそぶこの男が、基は昔から嫌いだった。
潤一は43歳。基より二つ年下だ。だが、立場はいつも基より上だった。
基は薄い紫色の唇を噛み締め、やがて、うなだれた。
「・・・わかりました。お望みの臓器を、用意します。ですから奥様を・・貸してください。」
潤一は唇の片端を持ち上げ、不敵な笑みを浮かべた。
「いいだろう。私は一度屋敷へ戻る。3日後、品物と優三を引き取りに来る。もしそのときまでに必要な分の臓器が準備できていなかった場合は、二葉を殺す。・・・じゃあ。」

研究所の出口では、美鈴が潤一を見送りに立った。
潤一は美鈴に、基に命じた内容をそのまま伝えた。それにはさすがの美鈴も、驚きを隠せなかった。
「3日後までにその数は・・・！それに研究員は私たちの大切な財産です。優秀な選りすぐりの逸材です。」
「殺さずに手に入れられる臓器もあるじゃないか。ある程度年をくっていてもかまわない。頼むよ。」
美鈴は、返事ができなかった。3日後、二葉が殺されても美鈴は困らない。だが、基は違う。こんな無茶な申し出を呑むほど、二葉が大切なのだ。
（それも仕方ない・・・。二葉の母親は、兄の思い人だった女の卵子なのだから。）
潤一は美鈴の肩を軽くたたき、
「頼りにしている。」
と言い残して、去っていった。
美鈴は暫らくその場に立ちつくし、自分がこれからやらねばならないことを頭の中でシミュレーションしていた。
それは、過酷な3日間の訪れを覚悟するに十分な儀式だった。

第2話その3

二葉は、夢を見ている。その夢の中にはセシリアがいて、そして南織が笑っている。だが、二葉が声をかけた瞬間、二人はたちまち凍りついて動かなくなるのだ。そして二葉が指を触れた瞬間、粉々に砕け散り、その欠片が二葉の喉をつきさす。苦しみの叫びをあげるのに、それは「音」にならない。それが永遠に続く夢だ。

しかし、今日は少し違った。

叫び続けていると、遠くに金色の光が見えたのだ。

細い小さな光だが、それは二葉の喉に突き刺さった氷の欠片を溶かしてくれた。

目覚めると、そこには美しい顔があった。そして、優しい腕に包まれていることを知った。

「さあ、これをお飲みなさい。」

二葉の口にカップがあてがわれた。だが、長い間何も受け付けていなかった二葉の身体は、それを拒絶した。温かいミルクは二葉の喉を通ることなく、すべて口の端から漏れてしまった。すると優三はミルクを自分の口に含み、二葉に口移しで飲ませたのだった。効率が悪い上、二葉は咳き込んで半分は出してしまうが、それでも優三は根気強くそれを続けた。

優三にとって、二葉は25年前の自分自身だった。

どうにもならない運命をつきつけられ、翻弄されている。

優三には救いがなかったものの、潤一と結婚するまでは優しい養父母が傍にいた。だが、二葉にはそれさえない。だから、優三が肉親代わりに傍で支えたいと思った。

なぜ優三が研究所に残ることを潤一が許可したのか、優三は知らない。二葉と二人きりの静かな部屋の中で、外の様子はまったく計り知れない。だが、優三は二葉を正気に戻すことで頭が一杯だった

ため、気にする余裕もなかった。
その頃美鈴は、研究所の外へ出る準備をしていた。
「まず樹海をまわって、あとはホームレスをあたるわ。お兄様は手術室で待機していてちょうだい。」
基は、美鈴に言った。
「すまない。・・・美鈴にまで、無理を強いる。」
「研究所のためでしょう？別に二葉がどうなったっていいのよ。ただ私は、オーナーの命令に従うだけ。」
「気を・・・つけろ。」
「ええ。どんなに焦っても、尻尾をつかまれるような失敗はしないわ。」
基も、美鈴も、この研究所の所長の子として生まれたその日から、すべての道を決定づけられた。横暴なオーナーに、逆らおうと思ったこともある。だが、いつもオーナーは自分達の弱みにつけこみ、取引をもちかけ、高みの見物をしているのだ。
もし、これで二葉が正気に戻らなかったら。
３日後、臓器が必要量そろわなかったら。
考えても仕方のないことだ。
今は、信じるしかない。
３日後に、すべてが、無事に解決することを。

第2話その4

夢と現実の狭間で苦しみ、呻く二葉を、優三は寝ずに看病した。暴れる二葉を抱きしめて、なだめ、押さえつけ、涙をぬぐってやった。

この先も、二葉は様々な悪夢を見続ける。親友を人質にとられている限り、逃れられない運命に翻弄されるのだ。

（もしかしたら、この子はこのまま精神を患っていたほうが幸せなのではないか？）

潤一は二葉を殺せと言うだろうが、基がそれを受け入れるとは思えない。基なら、潤一や美鈴の目を盗んで二葉を生かしておくことぐらい出来そうな気がする。二葉はこのまま、自分に課せられた使命も、親友のこともすべて忘れて、夢の中で一生を終えたほうがいいのではないだろうか。

と、そのとき突然、ドアをノックする音がした。

扉が開き、基が現れた。

「優三。・・・二葉は、どうだ。」

二人は、互いに敬語を使わない。

「今、疲れきって眠ってる。きっと今もまた、悪い夢を見ているのよ。」

濡れた頬を、優三の膝の上に預けて眠る二葉の脇に、基は腰をおろした。

「優三、寝ていないんだろう？少し、代わろうか。」

「いいえ、大丈夫。・・所長こそ、寝てないでしょう？目が真っ赤よ。」

「ああ、でも・・・。」

基は、潤一の出した条件を優三に告げるべきではないと思っていた。優三がそれを知っても苦しむだけで、何も解決はしない。

「所長、私・・・このまま二葉が正常に戻らないほうがいい気がす

るの。」
「え？」
「正常に戻って、また、実験台を探す役目に従事するのでしょう？そのためだけに、生きるのでしょう？そんなの、酷よ。私みたいに一生を道具として生きていかねばならない二葉を、見たくない。」
「だが、二葉は楽にはならない。精神の異常は、本人が一番苦しいんだ。傍から見れば何もわけがわかってない様に見えるかもしれないが、本人はすべてわかっていて、悲しくて苦しいんだ。この子の運命は、この先、変えられるかもしれない。だが、今このまま心を放っておけば、手遅れになる。優三、頼む。このままのほうが幸せだなんて、言わないでくれ。」
「人間として生きられないのに？発信機と盗聴器に一生監視されて、自分自身の人生を歩むことが許されないのに？」
基は、深いため息をついた。
「優三。オーナーは3日間という期限をつけている。あと24時間しかないんだ。」
「・・・そんなの無理よ。」
「良くなっているのは明らかだ。優三の力を、もう少し貸してくれ。」
「駄目だったら、どうするの？」
「わからない。・・・それは、24時間後になってみなければ。」
「いっそ、すべて忘れてしまえばいいのかもしれない。過去も、現在も、すべて。」
「・・・。」
それは、優三にとってみれば何気ない一言だった。
しかし基には、重要な一言になった。

第2話その5

約束の時間になった。
潤一は多くの新鮮な臓器と優三を、勝ち誇った表情で引き取りに来た。
別れ際、基は優三に言った。
「ありがとう、優三。二葉のことは、あとは私が何とかする。」
「何とかなりますか？あの子は少し、平静になっただけよ。」
「わかってる。・・・二日後、御宅へ伺う。その時に、また。」
潤一は一刻も早く臓器を捌かねばならないため、すぐに優三を助手席に押し込み、車で走り去っていった。
部屋に戻った基を、美鈴が追ってきた。
「少し休みましょう。私達も研究員達も、この3日、殆ど眠っていないのだから。」
「・・・そうだな。」
「二葉は、どうなさるの？結局、3日ではどうにもならなかったのでしょ？」
「優三はよくやってくれたよ。・・・あとは、私の力次第だ。」
「お兄様の力？でも、お兄様の力が限界だったから、優三を頼ったのでしょ？」
「だから、別の手立てを考えた。あさって、オーナーの許可を得てくる。そしたら、美鈴にも助けてもらう。ゆっくり休んで、体力を回復させておいてくれ。」

真崎潤一の邸宅は、杉並区の閑静な住宅街にある。２００坪ほどの土地に芝生を敷き詰め、手入れの行き届いたイギリス風の小庭園を見ながらレンガ敷きのアプローチを抜けると、玄関に着く。基がこの家を訪れる日には、お手伝いや運転手すべてに休暇が与えられる。遠野研究所と、真崎グループとの繋がりを隠すためだ。基は地

味なスーツに安っぽいブリーフケースを抱え、セールスマンを装って中に入る。長居は、しない。
潤一は応接室で基と向かい合った。
「話というのは、何だ？」
高飛車な物言いに、基はいったん言葉を呑み込み、そして言った。
「二葉の記憶を消す手術をさせてください。」
「・・・何？」
「二葉をより確かな刺客とするために、あの子の今までの記憶をすべて、消去したいのです。その方が刷り込みも楽です。・・・実験の一つとして、許可をしてください。」
潤一はニヤリと笑った。
「・・・なるほど。そうしなければ、回復の見込みがないということか。」
「・・・お願いします。」
「君の手によって生まれた人工児は二葉を含めて5人いる。なのに二葉以外は皆死んでしまった。それはなぜだ？君が二葉ほど、他の子を大事にしなかったからだろう？・・君にとって二葉は研究所の実験台じゃない。君の遺伝子を継いだ、君の娘なんだよ。」
潤一は軽侮のまなざしを基に向けた。
「所詮、君は研究者じゃない。自分の娘を優先させる、ただの雑魚だというわけだ。」
基は奥歯を噛み締めて、屈辱に耐えた。潤一は、こういう人間だ。いや、これが人間か？
「土下座しろよ。」
「・・・！？」
「助けたいんだろ？娘を。素直にそう言えばいい。廃人同様では使い物にならないから、殺さざるを得ない。でも、それは忍びない。だから記憶を消す手術をして、生き延びさせたい。そう言えばいい。私の足元に頭を下げればいい。二葉は私の物だ。本来どうしようと、私の自由なんだ。それを、君の思い通りにしたいのなら、土下座く

らい当たり前だろう？」
それを、応接室の外で立ち聞きしていた優三は堪らず、部屋に飛び込んだ。
「やめて！」
優三は基の前に立ちはだかった。薄い紫のフレアスカートの襞が、膝を付きかけた基の目の前に翻る。
「どうして、そんなことをさせるの？二葉の手術だって、一歩間違えば大変なことになるのよ？その危険を承知してまでやらなければならない所長の決意が、あなたにはわからないの？研究所は、あなたの物よ。研究結果も、あなたのものにすればいい。でも、所属している人間は、あなたの所有物にはできないわ！人間は、物ではないからよ！」
「やめてください、奥様。」
基は優三の腕をつかみ、自分の後ろへ追いやった。
優三の言葉に激怒の表情を浮かべる潤一の足元に、基はすぐさま頭をつけた。
「お願いです。・・・私の娘を、助けてください。」
潤一は優三の鋭い視線を跳ね飛ばすように右手を振り翳した。
「私を誰だと思っているんだ！思い上がるのもいい加減にしろ！」
潤一は基の後ろにいる優三の腕をつかむと、その細い身体を絨毯の上にたたきつけた。
「優三！お前は何様のつもりだ？私のために作られた人形の分際で、一体誰に口をきいてるんだ！？」
基は額を床に押し付けたまま、動けずにいた。優三の思いやりが潤一の怒りを招いてしまったのだ。潤一は背中越しに基に言い放った。
「二葉を殺せ。これは命令だ。」
バタン、と音をたてて閉められた扉が、基を暗闇へと閉じ込めた。
額から汗が滲んでいる。
優三は身体を強く打ち、起き上がれずにいる。だが、倒れたまま

優三は泣いていた。
「ごめんなさい・・・。私が出てこなければよかったのに・・・。私・・バカで・・ごめんなさい・・・。」
基はゆっくりと立ち上がると、優三の身体を起こしてやった。
「大丈夫か。」
優三は泣いている表情も、憂いを帯びて美しい。
「私のことより、二葉が・・・。」
「優三は、もう、二葉に関わってはいけない。自分の役割を果たすことだけを考えるんだ。おとなしい、美しい真崎潤一の妻でいれば、何不自由のない優雅な暮らしができるんだから。」
優三は、首を振った。だが、それ以上の本音は口にできなかった。盗聴器で監視されていることを意識し、これ以上潤一の機嫌を損ねたら、それこそ基の身に何が起こるかわからないと思ったからだ。
基は、そのまま一言も言葉を発することなく、真崎邸を後にした。
二葉を殺せというオーナーの命令を、背負って。

第2話その6

守るべきものなど無いほうが、どれだけ楽か。
心の強さなどいらない。義理とか情けとか、そんなものを感じることなどできなくていい。どんなに虚しくたってかまわない。
独りで、自分のことだけを考えて生きていけたら　―
真崎邸からの帰り道。基は高速道を走りながら、そんなことばかり考えていた。
もし、基が潤一に逆らえば、研究所は後ろ盾をなくし、つぶれる。研究所員達は路頭に迷う前に、潤一の手下に口封じで殺されてしまうだろう。それは基も、美鈴も同じだ。あの男にとって、自分以外は人間ではないのかもしれない。ただの道具で、役に立たなくなれば捨てる。優三が研究所にやってくるたび、基は優三の美貌を保つための施術を行っている。潤一は、優三の顔には絶対に手を出さない。それが、外部への重要な武器になるからだ。身体は服で誤魔化せても、顔は、そうはいかない。化粧で誤魔化せば厚化粧になり、不評を招く。基はそんな潤一のやり方を、３０年以上も見てきた。
だからといって、二葉を殺せるか。
（やはり、自分の遺伝子など使うんじゃなかった。）
基が二葉を大事に扱うのは、もう一つ理由がある。
二葉の母親にあたる女が、基の恋人だったということだ。
それは、人体実験にするべく連れてこられた「紀子（のりこ）」だった。父親が博打で莫大な借金をつくり、その返済の執拗な取立てから逃げてきたという。樹海で首をつって間もないところを基が見つけ、研究所に連れてきた。街中で拉致するのは危険が伴うが、樹海で死に急いでいる人間を連れてくるのは楽だったため、実験台や臓器入手の常套手段となっていた。
紀子は若く、もとの身体は丈夫だったため、基は代理母として使おうと考えた。とりあえず死ぬことを忘れさせ、健康体で生きても

らわねばならない。「ここなら、借金取りは絶対に来ないから。」と、なだめ、落ち着かせ、看病したのは基だった。そんな中、二人の距離は急速に縮まり、やがて愛し合うようになっていた。

基にとっての遺伝子操作と人工授精は、二葉が二人目だった。一人目は奇形児だったため、闇に葬られた。もう、失敗はしたくないと考えていた。そのためにも、今回は自分の遺伝子を使おうと決めていた。そうすれば、嫌でも真剣になるはずだ。自分の遺伝子が変異して奇形になる様子など二度と見たくない。そして更に、基の対となる遺伝子として紀子を選んだ。

紀子は基の頼みなら何でも受け入れた。そして出産後、基の父により殺された。

わかっていたことだった。

実験台は、用が済めば処分されることを。

さすがにショックの色を隠せなかった基に、父は言い放った。

「実験台は研究所の商品だ。その商品はすべて、オーナーのものだ。それに手を出すことは許されない。これに懲りたら、二度と実験台に情をかけるな。」

そうだ。

二葉も、研究所の商品だ。

それに情をかけてはいけないのだ。

(研究所の商品だ。だから大事に守っていこうというのでは駄目なのか?)

黒い革張りのハンドルを握りなおし、基はアクセルを更に踏み込んだ。

あの時、優三が潤一にたてつかなければ、二葉は救われたのかもしれない。だが、優三を責めることなどできない。優三の二葉を思う気持ちが強かったからこそ出た行動だったのだ。それを、怨むことはできない。

研究所に戻った基は、すぐに美鈴を呼んだ。

「確認しておきたいことがある。」

基の額に、青い血管が浮き上がっている。こういうときの基は、色々な意味で限界に達している。
「二葉の盗聴器と発信機の受信ができるのは、美鈴だけか。」
「・・・ええ。」
「それは、確かか？絶対か？」
下から見上げる射るような目つきに、美鈴は一瞬たじろいだ。だが、
「絶対よ。他の誰にも、受信はできない。」
「オーナーも、できないな？」
「・・・それは、絶対とは言い切れないけれど・・・。９割がた、できないと言っていいわ。」
それを聞いたとたん、基の身体は動いた。
「すぐに二葉を手術室へ連れて行ってくれ。あとは、美鈴。お前だけ、一緒に来い。他の研究員達には、絶対に気取られるな。」
「え・・・？一体、どういうこと？」
「わけは後だ。とにかく、急げ。」
基は二葉の記憶を消すため、脳の手術をした。
生まれてから、今までのすべてを忘れてもらう。
目覚めても、すぐに学校へ行けるような状態にはならないだろう。最低１年は、社会生活に対応するための訓練が必要になる。しかも、真崎潤一の目を盗んで。
手術後。基は、その決意を美鈴に告げた。
「私の自室に、二葉を住まわせる。部屋からは一歩も出さない。適当な臓器を研究員とオーナーに見せて、二葉を殺したことにしておいてくれ。」
冷たくなった額を抱えながら、基はうなだれていた。だが、美鈴は首を振った。
「隠しきれるとは思えないわ。・・・一生、隠し通すつもり？」
「正常に戻ったら、オーナーにすべてを話す。使命を果たせる状態になった二葉を、オーナーも殺せとは言わないだろう。」

「どうかしら？お兄様が命令に逆らったという事実に対する報復の方が恐ろしいわ。」
「万が一のときは、私が・・・すべての責任をとる。だから美鈴。協力してくれ。」
美鈴は、銀縁の眼鏡をはずし、こめかみを指で押さえた。
「自信がないわ。」
「頼む、美鈴。私の一生の願いだ。お前がオーナーの命令に絶対逆らわないことを承知で、頼んでいる。・・・頼む。」
深く、深く頭を垂れる兄を、美鈴はこれ以上拒絶することができなかった。
長い戦いになる。
美鈴も、相当の覚悟を強いられる。
それは、基と美鈴が「研究所」という組織に対して持った、初めての秘密だった。

第3話

季節はめぐり、1年の月日が経った。
研究所を覆い隠す常緑樹の緑が、空の色に映えるようになった3月の終わり。真崎潤一と優三の乗った高級外車が、研究所の入り口に横付けされた。それを出迎えたのは、基と美鈴、そして、二葉の三人だった。
薄紫の柔らかなブラウスを纏った優三は、二葉の手を握り締めた。
「さあ、一緒に行きましょう。私達の家へ。」
「・・・はい。」
潤一はそんな二人を一瞥してから、基に黒皮のアタッシュケースを渡した。
「必要な物はすべてこの中に入っている。抜かりなく頼むよ。私の命令に背いたんだ。その償いは、きっちりと」
「わかっています。」
潤一の言葉を遮るように、基は言い切った。
「わかっていますよ、オーナー。二葉の件を許してくださって、感謝しています。ですから使命は完璧に、こなします。」
潤一は軽く唇の端を持ち上げると、すぐ運転席に戻った。
二葉は優三に手を引かれながら、基の方を振り返った。
基は二葉の不安げな視線に気付くと、少しだけ微笑んでやった。
二葉を乗せ、高級な車は排気ガスの臭いを撒き散らし、走り去っていった。
「お兄様。」
美鈴は基の背に、声をかけた。
「急いで準備しないと、時間が・・・。」
「わかっている。」
基は強く眉根を寄せ、薄くて色の褪せた唇を噛み締めた。
二葉の存在が真崎潤一にばれたのは、4ヶ月前だった。潤一は初

めから承知していたかの様に、基に交換条件を突きつけてきた。
そうだ。
このまま二葉を殺したところで、見せしめ以上の得は無い。潤一にとって、命は取引のカードにすぎない。基はそれを見抜いていたからこそ、賭けに出たのだ。
交換条件は、基が1年、ロシアの研究機関でスパイ活動をすること。潤一は十分な根回しをするが、基の安全が保障されるわけではない。文字通り、命がけだ。そしてその間、二葉は「身寄りを突然事故で亡くした不幸な記憶喪失の娘」として、真崎家に引き取られる。「病院でたまたま出会った可哀想な娘を真崎夫婦は放っておけなかった」という筋書きを、マスコミに売り込みたいらしい。
（くだらない事を、よく次から次へと考えつく。）
二葉を手放すこと自体に不安はなかった。マスコミに二葉が曝される以上、少なくとも外に出るような傷を負わされることはないだろうし、優三もいる。だが基には、その前にやっておくべき事があった。それは、二葉の顔を整形手術で変えておくこと。二葉は「遠野二葉」としてではなく、あくまでも「身寄りのない記憶喪失の娘」として真崎家にひきとられるのだ。1年経てば、二葉は研究所に連れ戻される。そして再び、「遠野二葉」として学校を転々とする。そのときに、遠野研究所と真崎グループとの繋がりが少しでも疑われるようなことが、絶対にあってはならない。だから、別人に仕立てておく必要があるのだ。
手術の自信はある。
一度顔を変え、また元の顔に戻す自信も、ある。しかし、染み一つない二葉の顔にメスを入れることには躊躇いがあった。だが、やるしかない。真崎潤一に逆らうにも、限界はある。
基は、二葉をどんな顔に変えたか覚えていない。目を開いても、閉じても、瞼の裏には以前の可憐な顔しか浮かばない。遺伝子操作という人の手を加えて出来た顔であっても、生まれ持った顔には変わりがない。それを、人の勝手な都合で変えていいはずがない。

基は、その日のうちに研究所を後にした。
ロシアの研究所で研究員として働き、その中で情報を盗む。万が一ばれた場合には、自決するよう、潤一から言い含められている。
そんな危険な任務に赴く兄を、美鈴は黙って送り出した。
二度と、会えないかもしれない。
そんな覚悟は、今に始まったことではない。
この研究所に関わっている以上、次の瞬間にも自分の命が絶たれるかもしれないと、いつも覚悟している。それは基だって同じはずだ。
二葉の事がなければ、この仕事を断ることが出来ただろうか？
そうは、思わない。
だが潤一が、基が絶対に断らないタイミングを見計らったのは、確かだ。
これから1年、美鈴は一人でこの研究所の留守を守っていかねばならない。それは、予想以上に心細いことだった。オーナーとはいえ、真崎潤一は頼ってもいい存在ではない。
美鈴がずっと、心待ちにしていること。
それは、自分の命が尽きる日だった。

第4話その1

私立五筒学園中学校。

2年生の三橋祥子は、隣の席の転入生の存在を、どう受け入れればいいか悩んでいた。英語の授業中だが、文法のややこしい説明はどうしても脳に浸透していかない。だから、気持ちは別の方へ別の方へと流れていく。

転入生の名前は前田結衣。黒い髪を肩で切りそろえた、色白で痩せた女の子だ。どこか浮世離れした結衣は、流行のタレントや音楽をまったく知らないというし、ファッションや恋愛の話にもまったく興味を示さない。一緒に帰ろうと声をかけても、拒否される。一緒に遊ぼうと言っても、断られる。友達を作るのが嫌なのかと思えば、祥子や周りの男子とも、普通に会話は、する。

「前田。さっきの時間のノート、貸してくんねぇ？」

そんな、いい加減な男子の申し出にも、

「いいよ。でも、帰りまでには返してね。」

と笑って応える。祥子は、そんな結衣に忠告する。

「貸すことないよ！ああいうの、癖になるんだから。」

「別に減るもんじゃなし、かまわないよ。彼だって、そのうちわかるよ。ノートは授業中に写すのと、後で人に借りて写すのでは、理解度が全然違うってことにね。」

祥子はこういうとき、結衣がすごく大人だと感じる。もしかしたら、自分達があまりに幼いから、必要以上は相手にしたくないのか・・・とも思う。

だが、結衣の正体は意外に早く判明した。

その日の帰り、祥子は校門前の高級車に目を奪われた。しかも、白い手袋をした運転手らしき男が、ずっと車の前に立っている。もちろん、それは他の生徒の注目の的でもあった。

一体誰を待っているのだろう？と、祥子は植え込みの影で息を潜

めて様子を伺っていた。
5分後。
そこに現れたのは、結衣だった。
結衣の姿を捉えた運転手は深く頭を下げ、後部座席のドアを丁重に開けた。結衣は、優雅に白い座席に腰を下ろし、両足を揃えて車に乗り込んだ。
（・・・ええっ。）
祥子は開いた口がふさがらなかった。
結衣は、一体どこのお嬢様なのだろう？この学校にも良家の子女は大勢いるが、あんな高級車で仰々しく送り迎えされるほどの生徒は、未だかつて聞いたことがない。
「おお、今日も姫君にはお迎えがあったのか。」
突然、後ろから聞き慣れた声がした。
誰かと思って振り向けば、同じクラスの篠崎遼一（しのざきりょういち）だ。
「何？篠崎君、知ってたわけ？前田さんのこと。」
「新学期早々、噂だったんだぜ。今更知った三橋は、トロ過ぎ。」
「だって、誰も教えてくれなかったよ？前田さん自身も何も言わないし。」
「言いたくないんだろ？・・・何か、複雑らしいし。」
「複雑？」
篠崎は、スクールバッグを右肩に担ぎなおし、歩き出した。祥子は、その後を追う。
「ねえ、どういうこと？」
「おやじ向け週刊誌にちらっと載ってたんだよ。真崎グループって、あるじゃん。その一族の誰だかが、事故で記憶喪失になった女の子を一時的に引き取ってるんだってさ。」
「それが、前田さんなの？」
「多分な。おととい、記者とカメラマンっぽいの見たし。」
祥子は、篠崎の制服の袖を引っ張って、止めた。
「それ、絶対本当なの？」

篠崎は、左目をちょっと歪めた。
「そんなの、言い切れねぇよ。本当だからって、どうってこともないし。」
「他の人は？そのこと、気付いてるの？」
「さあな。あとは自分で本人に聞いてみれば？」
「聞けるわけないじゃん！だから篠崎君を頼ってるのに。記憶喪失なんて・・本当だったら、やっぱ、気ィ遣わないと・・。」
「そういう柄かよ？三橋が。」
「！何ですって？」
祥子が自分の黒皮鞄を振り上げると、篠崎は軽々と身をかわし、笑った。
「ほら！三橋はそのまんまでいればいいんだよ。その方が、前田だって気楽だろ？」
篠崎の言葉に、祥子は思わず口を噤んだ。
「あんま、変な気を遣わないほうがいいってことだよ。」
篠崎の言うとおりだろう。
結衣が自分から何も語らない限り、聞いてはいけないと思う。
（そうだ。今までどおりで・・いいんだよね。）
だが、半信半疑とはいえ、ある事実を知ってしまった以上、今まで通りとはいかない。やっぱり、意識してしまう。
あんな高級車で送り迎えされるぐらいなのだから、家はどんな感じなのだろう？広い芝生の庭があるのだろうか。そして、ステンドグラスをはめ込んだ洒落た白亜の邸宅が佇んでいるのだろうか・・・。いずれにしろ、祥子の知らぬ世界だ。
次の日の帰り、祥子はさりげなく結衣の後を追って教室を出た。
結衣は一人、校門へ続く緩やかな坂を下っていく。黒い鉄製の豪奢な門の両脇には、コンクリ塀に沿ってケヤキが等間隔に植えられている。その緑の葉の陰に、黒塗りの高級車が見えた。運転手が深く頭を下げ、扉を開ける。と、そのときだった。
結衣が、不意に振り向いたのである。

注意しているつもりながら、隠れる場所を失っていた祥子は、思わず身をすくめた。
だが、結衣は初めから祥子の存在に気付いていたかのように、軽く手を挙げ、それから車に乗り込んだ。
去っていく車の後ろを見届けながら、祥子は結衣が別の世界の人間なのだと思い知らされた気がした。
ただ、お金持ちの家に引き取られているだけかもしれない。
もともとは、記憶を失っただけの、貧しい家の娘なのかもしれない。
だが、今は明らかに、祥子や他のクラスメートとは違う境遇にある。
それが現実だ。
祥子は、結衣が羨ましいと思った。そして同時に、言いようのない寂しさが心の隅を蝕んでいくのを、感じていた。

第４話その２

５月の第２土曜。その日は恒例の授業参観日だ。
中学校でありながら、殆どの生徒の親が参観に訪れる。教室はいつになく窮屈になり、沢山の眼に誰もが萎縮してしまう。
休み時間のトイレも保護者の化粧直しに占領されてしまい、祥子は教室棟から離れた人気のないトイレの使用を余儀なくされていた。思った以上に時間がかかり、帰りは廊下を走る。
（もう休み時間終わっちゃうよ。私のせいじゃないんだから、遅刻になんかしないでよね！）
と、そのとき。
「ぎゃっ！」
祥子は急ぐあまり、廊下を曲がり損ねて、白い壁に顔面を思い切りぶつけてしまった。
（・・ったぁ・・・。）
涙目になって体制を立て直そうとしていると、突然、後ろから声がした。
「あなた、大丈夫？」
絹のような、柔らかくて甘い優しい声。
驚いて振り向くと、そこには白いスーツを着た女性が手を差し伸べていた。
祥子は、その女性のあまりの美しさに、口を開けたまま暫らく動けなかった。
こんな美しい人を、初めて見た。神々しくて、女神のようで、この世のものとは思えない。全身から薔薇の香りが漂うようだ。
差し伸べられた手なんて、恐れ多くて掴めない。祥子は自力で立ち上がり、頭を下げた。
駄目だ。声が出ない。
するとその女性は、祥子に尋ねた。

「あの、2年A組の教室がどこかご存知？」
「え・・・？」
「私、方向音痴で迷ってしまって・・・。」
祥子はそこでやっと、我に帰った。
「私、2年A組ですから、ご案内します。」
「まあ、助かったわ。ありがとう。」
そのとき、始業を告げる鐘が鳴り響いた。しかし、この女性を連れて廊下を走るわけにはいかない。それに、保護者を案内してきたことを教師が見れば、遅刻にはしないはずだ。
後ろの女性の存在を意識して、背中が熱くなってくる。一体この女性は、誰の保護者なのだろう。
もう授業が始まった廊下は、静まり返っている。
やっと教室に着き、後ろの引き戸をそっと開けた。だが、どんなに「そっと」でも、音はする。授業中静まり返った中では、なおさらだ。
祥子は、クラス中の冷ややかな視線を一気に浴びた。
が。
次の瞬間、その視線は途端に和らいだ。
祥子の後ろをついてきた女性が、教室の中に入ったからである。
黒板の前の女教師も、祥子の存在など目に入っていないようで、美しい女性に向かって「どうぞ遠慮なさらずに、もっと中央へどうぞ。」などと優しい声をかけている。
祥子はこそこそっと自分の席に着き、改めて女性の方を振り返った。
栗色の巻き髪が肩で揺れ、白い肌は柔らかく、唇からは花びらが零れ落ちそうだ。周りのお母さん達の、なんと化粧の濃いことか。その化粧の濃さが、更に老けて見えさせるということを、知らないのだろうか。
授業中、祥子は落ち着かなかった。ずっと、あの女性を見ていたい。さっき会話を交わしたことさえ、夢の中のことのようだ。

やっと授業が終わると、帰りのホームルームが始まる。午後は保護者会となるため、授業は午前中で終わりだ。保護者はホームルームを見届け、いったん、解散する。
祥子の関心時は、さっきの女性が誰の保護者か、ということだった。女性がホームルームが終わる前に帰ってしまわないことを懸命に祈る。
ホームルームが終わるや否や、祥子の身体は弾かれたように立ち上がった。
急いで振り返ると、祥子はドキッとした。なんと、さっきの女性がこちらへ向かって歩いてくるではないか！
女性は祥子を見ると、優しく微笑んだ。
「さっきは、どうもありがとう。お陰で助かりましたわ。」
「・・・いえ、そんな・・。」
そして、次の瞬間だった。
「結衣ちゃん、もう、帰れるの？」
（え・・・。）
隣の席の結衣だったのだ。
この美しい女性の身内は。
身内・・？
いや、そうではない　―
結衣は立ち上がり、頷いた。
「ええ、おば様。」
「じゃあ、帰りましょう。表に浅井を待たせているの。」
結衣は祥子に、「じゃあね。」と言って、教室から出て行った。
祥子は思わず後を追い、女性の後姿を見送ってしまっていた。歩く姿も可憐で上品で・・・もう、表現しきれない。
「これで、『絶対』って言い切れるよ。」
祥子の背後から、篠崎も廊下を覗き込んで、そう言った。
「どういうこと？」
「さっきの女性、上流社会じゃ有名だぜ。真崎グループ会長の次男、

真崎潤一氏の妻。真崎優三。」
「・・知っているの？」
「サラリーマン向け週刊誌。目立つからな、よく見るよ。旦那の真崎潤一も、これまたいい男なんだよ。美男美女夫婦って、有名なんだってよ。」
祥子は、ほうっとため息をついた。
「本当、綺麗だよね・・・。女神様みたいだった。」
「ああ。その辺の女優なんかより、ずうっと綺麗だもんな。今日も、他のおばさんたちが気の毒なくらいだったよ。」
祥子は、クスっと噴出した。
「わかる。まわりの人、化粧お化けに見えたもん。」
「違いねぇ！俺、今日家に帰ったら、お袋の顔まともに見れねぇよ。悲しすぎて。」
「それは言いすぎよ。あの女性は別格！・・・この世の人じゃないみたいだった。神様の悪戯じゃつくれないよ。・・・誰かが意図的につくったみたい。でも、全然わざとらしくなくて、自然なんだよねぇ。」
うっとりとした目つきの祥子に、篠崎は言った。
「三橋、案外鋭いかも。あの美しい顔（かんばせ）は、整形って噂もあるんだぜ。」
それを聞くや否や、祥子は頬をふくらませた。
「ええー、それは嫌だな。どんなに『つくったみたいに綺麗』だったとしても、それは生まれつきだから、価値があるんだもん。つくりものだったら、全然うらやましくないよ。大体、篠崎君の情報源は怪しげな週刊誌ばっかりじゃない？私、絶対信じるからね。あの顔は本物だ、って！」
「べーっ」、と舌を出し、祥子は鞄を持って昇降口へと走り出した。
篠崎と楽しく会話をしていたはずなのに、ただの一言が、祥子の気持ちを沈ませた。
―　あの美しい顔（かんばせ）は、整形って噂も　―

（嫌！そんなの、絶対いや！）
生まれて初めてだった。人を、こんなにも美しいと思ったのは。そして、心から震えるほど感動して、憧れた。なのに、それが偽物だったなんて、考えたくもない。
（本物だもん。あんなに綺麗なの、人の手じゃつくれるわけないもん。生まれつきだもん。誰かがやっかみ半分で、変な噂流してるだけに違いないもん・・・。）
真崎優三。
初めて聞く名前だった。
週刊誌などで有名になっているなんて、全然知らなかった。
気になって、初めて本屋で週刊誌の表紙に目をやった。だが、表紙だけでは真崎の「真」の字も見当たらない。しかし、どう見ても健全とはいえないネタが掲載されていそうな週刊誌を手に取り、中を見る度胸は、祥子には生まれてこなかった。
（こんな際どいの、篠崎君はよく見れるよ・・。やっぱ、男の子だからなのかな。）
祥子は軽くため息をつき、そのまま肩を落として家路についた。
胸の奥がもやもやして、嫌悪感に襲われる。
どうして、憧れの対象が整形品では駄目なのか。
その理由を認識するには、祥子はまだ幼すぎた。

第４話その３

月曜日の朝。祥子は結衣と目が合いそうになると、思わず下を向いてしまった。
（バカ・・・。変に思われたらどうするの。）
だが、真崎優三が整形かもしれないという話を気にしている後ろめたさが、祥子に下を向かせる。
「おぅ。」
気楽な顔で教室に入ってきた篠崎を、祥子は思わず睨み付けた。
「？・・何だよ、朝っぱらから。」
（篠崎君が悪いんだからねっ。あんな変なこと言うから・・！）
祥子は下唇を噛みながらも、フイッと横を向いた。
「・・・別に。」
「変なヤツ。」
篠崎は何も感じていないらしく、笑いながら席へ向かっていった。
と、そのとき隣の席の周りが俄かに騒がしくなった。祥子がちらっと見ると、結衣を数人の女子が取り囲んでいる。
「ねえ、一昨日の授業参観にいらしてたすっごく綺麗な女の人、前田さんのお母さん？」
「！！」となったのは祥子。だが、結衣はまったく冷静だ。
「いいえ。私の両親は事故で亡くなったの。あの人は、今お世話になっているお家の奥様よ。」
「そうなんだ。でも、いいなあ。あんな綺麗な人と同じ屋根の下で暮らせるなんて。」
祥子はスカートの裾をギュッと握った。
（何がいいのよ。両親がいないのよ？他人の家に引き取られてるのよ？どうして、そう無神経なことといえるわけ！？）
祥子だって結衣を羨ましいと思ったことを忘れて、腹立ちと苛立ちを口先に溜めていた。

結衣は、静かに微笑んだ。
「本当、あんなに綺麗な人と一緒にいられて私は幸せだわ。」
彼女達は、あの女性が真崎優三ということを知らないのだろう。それは、篠崎から教えてもらう前の祥子と同じだ。
「お名前は、真崎優三さんとおっしゃるのよね？」
突然、後ろから甲高い声がした。祥子も、結衣も皆振り返る。そこにいたのは、学級委員の布谷花音（ぬのたにかのん）だった。腕組みをして、高飛車な眼差しで全員を見下ろす。
「上流社会では有名な美人よ？」
『そんなことも知らないのは、あなたたちが一般庶民だから』とでも言いた気な口調だ。
花音のツンとした赤い唇が、結衣を捉えた。
「本当に幸運よね？ご主人の真崎潤一は真崎グループの次男でハンサム。お金は湯水のように湧いてくるし。お陰で前田さんは両親を亡くしても、何不自由なく暮らせるのよね？」
結衣の顔からは微笑みが消えたが、冷静さは失っていなかった。
「布谷さんの言うとおりよ。でも、私は単なる居候。お金があるかどうかは私には関係ないわ。」
「そうかしら？毎日高級車で送り迎えがあるじゃない？」
「それはそうだけど。・・・それには理由があるのよ。」
結衣の冷静な唇が、そこで止まった。花音はここぞとばかりに言った。
「ああ、誘拐とか？身代金たっぷり出せそうだものね。でも、居候のあなたにお金を払うものかしら？真崎潤一は一族の中でも最もしまり屋で、その上あくどい、って聞いてるわよ。」
祥子は、自分のことの様にハラハラしていた。このまま結衣が言い負かされてしまうのか？そんなのは絶対嫌だ。大体、なんで花音のような女が学級委員なのか？成績だけで学級委員を決めるような教師が理解できない。
結衣の眼差しは、まっすぐに花音に注がれた。

「布谷さんの言うとおり、もし私が誘拐されても旦那様は身代金なんて払わないでしょうね。そんなの当たり前よ。私は他人なんですもの。送迎は、私が記憶喪失で、いつどうなるかわからない状態だから。これであなたの好奇心を満足させられたかしら？」
最後にちょっと笑った結衣とは逆に、返す言葉を失った花音は肩を怒らせ、やがて踵をかえして立ち去った。
（よしっ！）
祥子は思わず、机の下で拳を握り締めていた。
だが、結衣の横顔を見た瞬間、祥子の嬉々とした表情が強張った。
結衣の固く結ばれた唇と長い睫毛の横顔が、さっきの強気なセリフとあまりにもかけ離れて悲しそうだったからだ。
それは、そうだ。
今のやりとりが、結衣の心を傷つけたことには変わりがない。
（それに、記憶喪失のことまで言っちゃって・・・。）
結衣にとってみれば、すべて隠しておきたい事だったに違いない。だから特定の友人をつくらず、会話をしていても心は許さず、自らを語らずにいたというのに。
記憶がないというというのは、どんな状態なのだろう？
両親を事故で亡くすというのは、どんな気持ちになるのだろう？
他人の家に引き取られて暮らすというのは、どういうことなのだろう？
祥子には、わからない。
祥子の母は、数年前父と離婚して家を出ていった。そのときの感覚・・・あれは、『気持ち』なんて生易しいものではない。心と身体が一体になって感じた感覚を、今でも忘れない。その何倍もの感覚を、結衣はいつも背負っているのではないか？
（やっぱり・・・気を遣うべきだよ。前田さん、色んなもの負ってる。それは他の人には絶対わかんないものだもん・・・。）
その日一日、祥子は結衣と口をきかなかった。
結衣も、誰とも会話はしなかった。

しかし、数十センチの隔たりを超えて、二人は一つの事に対し、確かな痛みを共有していた。

第４話その４

６月に入った頃だった。

祥子は廊下ですれ違いざまに、数名の女子から「リストラ」と揶揄された。

ハッとして祥子が振り向くと、女子達もやはり祥子を振り返り、クスクスと笑って小走りに去っていった。

祥子はその場に立ち尽くし、拳を握り締めた。

祥子の父は、この春、大手電機メーカーからリストラされた。それは、突然のことだった。しかし、そのことがどうしてあの見知らぬ女子に知られているのだろう？そんな疑問と不気味さが、祥子を襲った。

この学校は、就学途中に親がリストラなどで職を失った場合、学費が全額免除される制度をとっている。だから、祥子が私立に通うことには問題はない。だが、生活費は失業保険だけで賄えるものではない。父一人子一人の生活だが、生活は相当に苦しくなっている。

（先生が誰かに言うわけないよね・・・。私は誰にも言ってないし・・。）

なんで？という思いが交錯する。

この学校に、父と同じ会社に勤める社員の子どもでもいるのか？

だが、祥子の不安をよそに、祥子の父がリストラされたという噂はどんどん広まっていった。それが結衣の耳に入るころには、全学年の生徒が知っているほどだった。

祥子はいつの間にかクラスで孤立していた。

何となく、周りが祥子を離れたところから見るようになったのである。

いつも、人目が気になる。

人が溜まっていると、自分のことを噂しているのではないかと不安になる。

こういうとき、男子というのは蚊帳の外だ。噂の中に入るでもなく、かばうでもなく、途端に正体をなくす。篠崎も、例外ではなかった。

そんな中、結衣だけは別だった。とはいえ、元々、大した間柄ではないのだが・・・。

ある日、祥子は思わず、結衣に聞いていた。

「あのさ、私のお父さんのことで・・・何か、聞いてない？」

すると結衣は、

「ああ・・。それが、どうかしたの？」

「ん・・・。みんなの態度が、ちょっと、気になって。」

「そう？噂なんて、そのうち忘れ去られると思うけど。」

祥子は、その楽観的な答えに少し腹が立った。

「そうよね。前田さんには他人事だもん。それに、前田さんてすごく大人だから、これくらいのこと、気にならないんだろうしね。」

「・・・大人？私が？」

「そうよ。いつも冷静だし。」

すると、結衣はクスリと笑った。それが、祥子の神経を逆撫でした。

「何がおかしいの！？」

「だって、私、みんなより一つ年上だもの。」

「・・・え・・・？」

「当然よね。そうか・・・やっぱり、老けて見えてたんだ。」

祥子は、自分の軽率な言葉が結衣を傷つけたのではないかと、後悔した。

わかっていたはずではなかったか？

気を遣うべきだと、心に言い聞かせたはずではなかったか？

祥子は激しい自責の念にかられた。

「・・・ごめんなさい。私、変なこと言っちゃって・・・。」

「どうして謝るの？いいのよ。本当のことだし。」

だが、祥子はそんな結衣のあっけらかんとした物言いに、逆に切

なさを感じていた。
「あのね、聞いてもいい？どうして・・・1年、年上なの？」
「記憶を失くしたせいで、普通に生活したり勉強することができなくなっていたの。その訓練で1年かかったみたい。」
「そう・・。」
結衣は普段背負っているものを微塵も感じさせない。だから、祥子はつい自分の甘えをぶつけてしまったのだ。
申し訳のないことをしてしまった。
父の噂で悩んでいた自分が、すごくちっぽけだと思った。
（そうよ。お父さんのリストラは本当のことだもん。でも今お父さんはちゃんとパートだけど働いて私を食べさせてくれてるもん。後ろめたいことなんか、何もないもん。）
そういう、前向きな気持ちになれた。
二葉は、祥子のこういう心の動きを見越して、一つ年上だということを打ち明けてくれたのだろうか。だとすれば、やっぱり、大人だ。

ある授業での出来事だった。
教師が「身近な人の職業について調べる」という課題を出した。
「二人一組で、一つの職業について、調べてもらいます。インタビューしたり、働いている現場を見学させてもらったり、できれば体験させてもらうのもいいでしょう。どちらかのご両親やご兄弟に協力していただくのが一番良いですね。」
すると、お約束のように布谷花音が手を挙げた。
「先生。親が失業中で、兄弟がいない場合にはどうするんですか？」
途端に教室内は、囁きや嘲笑の渦と化した。
祥子は顔が段々と熱を帯びてくるのを感じながら、じっとそれに耐えていた。その様子を、結衣は隣で黙って見ていた。
教師は言った。
「だから、二人一組なのですよ。二人なら、どうにかなるでしょう

？さあ、好きな者同士で組んだら相談を始めて！」
教室内はワッと活気付いた。
皆、仲のいい同士はしゃぎあったり手を取り合ったりして楽しんでいる。
そんな中、不意に結衣は、花音と視線があった。
花音の挑戦的な瞳に、結衣は押さえきれないほどの闘争心にかられた。
結衣は見せつけるように、うつむく祥子の腕をとった。
「一緒にやろ。」
「・・・え・・・。」
困惑の色を隠しきれない祥子に、結衣は元気よく話しかけた。
「いいでしょう？」
「・・でも、」
「何とかなるよ。駄目なら駄目で、いいじゃない。そのとおり先生に報告すればいいだけよ。それで成績が悪くなったら、私、校長先生に直談判に行っちゃう。そんなの、私達子どものせいじゃないんだから。」
強気な発言に、祥子は気持ちが晴れる気がした。
そうだ、結衣と一緒なら何とかなる。もう、何も怖くなんかない。
「うん、わかった。一緒にやる。」
祥子と結衣は、そのとき初めて手を取り合った。

第4話その5

その日の帰り、結衣は祥子と一緒に帰ると初めて言った。
「え、大丈夫なの？お迎えがきてるでしょ？」
「だって、三橋さんのお父さんが働いてるところ見たいもん。」
「でも、パートだよ？そんなの、職業になるの？」
「当たり前じゃない。働いて、お金をもらってれば、立派な仕事よ。私には親兄弟がいないんだから、三橋さんが頼りなのよ。それに休日は、一人で外へ出してもらえないの。だから、放課後しかないのよ。」
校門の高級車の前に立っている運転手と結衣は3分ほど話をしていた。そして、やがて遠巻きに見ていた祥子を手招いた。
「一緒に乗って。場所を言ってくれれば、連れてってくれるって。」
初老の運転手、浅井は白い手袋をした手で咳払いをした。
「私はお嬢さんを無事家に送り届けねば、クビになります。」
「ね？じゃあ、決まり。乗って乗って。」
促されるまま、祥子は車の後部座席に乗り込んだ。何だか、臭いまで高級な感じがする。
「・・すごいね。」
ため息混じりに祥子がつぶやくと、結衣はうなずいた。
「本当。すごいよね。」
「私なんかが一緒に乗っていいわけ？怒られたりしない？」
「宿題のためよ。仕方ないじゃない。」
他人の家で、結衣にどれほどの自由が許されているのだろう？休日に一人ででかけられないというのは、記憶喪失のせいなのだろうか。
祥子の父親は駅前の大型スーパー内の軽食店で働いている。一般の売り場から少し離れた休憩所で、クレープやソフトクリーム、た

い焼き、焼きそば、ドリンクなどを販売する。祥子の父は昼間、これらのメニューの調理から販売まで一人でこなしている。何十種類もあるメニューを捌ききることは相当大変らしく、働き始めの一ヶ月は家でもずっとレシピを勉強し、試作に明け暮れていた。

この駅は、祥子の学校の生徒の多くが最寄り駅として利用している。だが、「みつはし」と書かれた胸の小さなネームプレートくらいでは、祥子の父とまで気付かないはずだ。

スーパーの屋上に設けられた広い駐車場に運転手を待たせ、二人は中に入った。

ここへ来ることを、父には言ってない。実は、職場を訪れたのは初めてだ。家の外で家族に会うのは何だか気恥ずかしい。

だが、一度くらいはいいかもしれない、と祥子は思った。それに、結衣のことを紹介したい。自分には今、こんな素敵な味方がいるということを、父に教えてあげたい。

2階の婦人服売り場の離れに、蝋細工サンプルの入ったショーケース。蒸し暑くなってきた季節を反映して、「かき氷」のポスターも貼ってある。客対応のカウンターの前のスペースを挟んで、白い丸テーブルと細長いベンチが並んでいる。毎日の清掃は徹底されているようだが、食べ終えたばかりの汚れや食べかすは、そのままになっている。

カウンター前の鉄板で、痩せた男性がお好み焼きを作っていた。白髪交じりの乱れた頭に紙製のキャップをのせ、ワイシャツの上に白いエプロンをしている。遠くからでも、それが祥子の父であることは明らかだった。

祥子は遠目から父の姿を捉えると、足を止めた。

「三橋さん、どうしたの？」

「・・・ちょっと、心の準備が・・・。」

そんな躊躇いの間に、カウンター前がにわかに騒がしくなった。

見ると、祥子たちと同じ中学の制服が溜まっている。

祥子は思わず、婦人服売り場の太い柱に身を隠した。
「え・・・、何？」
結衣はその場に取り残されながらも、カウンター前の様子を見守った。
「おじさん、バナナチョコクレープと、アイスカフェオレね。」
「あ、私、ピーチ生クレープと、ティーソーダ！」
「私はクリームチーズ＆ベリークレープ。」
彼女達は、結衣たちのクラスメイトではない。
祥子の父は、あらかじめ焼いてあったクレープ生地を広げ、具材の入ったタッパーを冷蔵庫から取り出した。その間、女子中学生たちは祥子の父に話しかけていた。
「おじさん、三橋祥子さんのお父さんなんですよね？」
ハッとした。
結衣は、祥子の方を見た。
祥子の顔が強張っているのがわかる。
祥子の父は笑顔で会話に入った。
「ええ。よくご存知ですね、お嬢さんたち。祥子のクラスメイトですか？」
「ううん、違うんだけど、・・・ねー。」
少女達は顔を見合わせてクスクスと笑っている。そんな中、祥子の父は手早く注文の品を作り上げていく。
「お待ちどうさま。えーと・・、まずバナナチョコとアイスカフェオレ。５００円になります。」
会計の間も、少女達と祥子の父の会話は続く。
最後の会計が終わると、一人の少女が去り際に言った。
「リストラされて大変でしょうけど、がんばってくださいね。」
ヒラヒラと手を振り、３人はクレープ片手に、笑いながら店を去っていった。
次の瞬間。
結衣の目の前を、ものすごい勢いで祥子が通り過ぎていった。

祥子はカウンター越しに、父の前に立ちはだかった。
祥子は息を切らしながら、父を恐ろしい形相でにらみつけた。
「どうしてよ！どうして私の父親だってこと、ばらすのよ！？」
人目など気にしていない。祥子は今、自分の気持ちだけで、周りなど見えていない。祥子の父は、突然のことにただ驚いている。
「私が今、学校でなんて言われてるか知らないでしょ！？父親が会社リストラされて、こんなところでパートで働いてるなんて、知られたい娘がいるわけないじゃない！」
周りの客が足を止めて、祥子たちの方を見ている。いや、見物している。
「祥子・・・。」
「私が学校で仲間はずれにされてるのも、バカにされてるのも、全部お父さんのせいなんだから！・・・大ッ嫌い。大っ嫌いよ！！」
声がかすれるほどの叫びをあげ、祥子はその場から走り去った。
後に残された祥子の父の呆然とした顔と、乱れた白髪と、へなった紙帽子が、切なかった。　結衣はその父親の姿に、泣きたくなった。
だが、その場の気まずい雰囲気を悟り、このままでは祥子の父の立場が悪くなるのではと心配になった。周囲の好奇の目は、まだ治まらない。
結衣は、今、自分に出来ることを考えた。
祥子のため、祥子の父のため、今ここにいる自分に出来ることがあるはずだ。
結衣は意を決し、店のカウンターに立った。
「あの、たい焼き3つ、下さい！」
努めて明るく、大きな声で言った。
結衣の制服姿を見ても、祥子の父は何も言わなかった。ただ、にっこりと笑って「はい。」
と応えただけだった。
その場の雰囲気がもとに戻ったのを確信し、結衣は祥子の父に言

った。
「すみません、今、財布を取りに行ってきますのでちょっと待ってて
てください。」
たいやきを焼く祥子の父の表情が、少し曇った。さっきの今で、
また、祥子の学校の生徒にバカにされているのではと思ったのかも
しれない。結衣は慌てて訂正した。
「あ、ちゃんと絶対戻ります。ご心配でしょうから、私、鞄ここに
おいていきます。ちょっと待っててくださいね。焼きあがる頃には
戻れますから！」
結衣は屋上の駐車場へと走った。
祥子はどうしただろうか。
自分に黙って、帰ってしまっただろうか？
屋上に着くまでに、祥子には会わなかった。結衣はとりあえず車
に戻り、運転席の窓をコンコンとたたいた。眠っていた運転手は慌
てて起き上がり、外に出た。
「浅井さん、さっきの女の子、戻ってきた？」
「いいえ。」
「・・そう。あの、とりあえず５００円貸してくださいませんか。」
「え？」
「事情があって、たい焼きを３つ注文してしまったの。後で奥様に
お願いして返しますから。」
結衣に自由になるお金は一銭も与えられていない。それは、真崎
潤一の方針だ。
浅井は困惑気味だったが、渋々財布を取り出した。
「・・・まあ、お嬢さんがそうおっしゃるなら。無銭飲食で問題に
なったらそれこそ大変ですし。」
「ありがとう！助かります。」
結衣は浅井から５００円玉を受け取ると、再び急いで店に戻った。
たい焼きは既に紙袋に包まれていた。
「３００円です。」

つり銭と袋を受け取り、結衣が何気なく見た祥子の父の胸元からは、「みつはし」のネームプレートが無くなっていた。
「ありがとうございました。」
次の客が来たため、結衣が再び祥子の父を見ることはなかった。
屋上へ戻る前に、結衣は5階建ての広いスーパーの中、祥子を捜し回った。だが、どうしても見つけることができない。女子トイレの個室まで見回ったが、わからない。もう、帰ってしまったのだろうか。
仕方なしに屋上へ戻ると、浅井は車の外で待っていた。
「どこへ行ってたんです？さっき、女の子が戻ってらっしゃいましたよ。」
「ええっ？」
すれ違いとは、空しい。
「それで、彼女は？」
「お帰りになりました。お嬢さんに、よろしくと。」
祥子は、結衣のことを忘れたり、放ってしまったわけではなかったのだ。
（でも、あんなことお父さんに言っちゃって・・・どうするのかしら。）
結衣はたい焼きとつり銭を浅井に渡した。
「まだ温かいですね。」
「ええ。作りたてなの。さっきの女の子のね、お父さんが作ってくれたのよ。」
祥子の顔と、結衣の悲しげな顔から、浅井は何かしら感じたようだった。
「では、一ついただきます。あとの二つは、お嬢さんと奥様で召し上がったらいかがでしょう？私からの奢りということで。」
結衣は思わず微笑んだ。
「本当？いいの？」
「ええ。これくらい、お嬢さんや奥様からお金をいただけません。

それに、たい焼きなど久しぶりです。奥様も、多分そうですよ。」
「そうかしら？そうよね。でも、たい焼きなんて召し上がるかしら？」
「召し上がりますとも。お嬢さんが買ったものを、召し上がらないわけがありません。」
結衣は微笑み、浅井に頭を下げた。
家に戻ると、結衣は、優三にたい焼きを渡した。
「浅井さんがご馳走してくださったの。私の学校の友達のお父様が作ったのよ。」
「・・・友達？」
「ええ。」
優三は、少しだけ眉をひそめたが、すぐ笑顔に戻った。
「嬉しいわ。たい焼きなんて、何十年ぶりかしら。」
結衣は、冷めてしまったたい焼きをかじりながら、祥子とその父を思い、切なくなった。
祥子の気持ちもわかるが、あの父の気持ちのほうがずっとよくわかる気がする。
（私のお父さんも、あんな感じだったのかしら・・。だからこんな気持ちになるのかしら？）
結衣の浮かない表情に、優三は一抹の不安を感じていた。
友達。
その存在が、結衣の押さえ込まれた記憶を呼び覚ましてしまうのではないかと心配になる。
友人を二人も失った過去を、思い出させてはならない。
優三は、この表面上の穏やかな生活に一筋のヒビが入る音を、確かに聞いていた。

第4話その6

前田結衣という名前は、真崎優三が勝手につけた名だった。こだわりは唯一つ、名前の中に数字を入れないこと。優三の「三」は、遠野研究所の三番目の遺伝子操作による人工児である証。結衣の本当の名である二葉の「二」は、二代目研究所長である遠野基（とおのもとい）にとって二番目の人工児である証だった。そんな呪縛のような名から、せめて今だけでも開放してやりたいという、優三の強い思いから生まれた名前だった。

遠野二葉。

そういう存在は、今、この世から抹消されている。

実際、二葉には前田結衣としての人生だけを刷り込んである。記憶喪失であることは事実だから、芝居めいた部分は見られない。

優三にとって、二葉は運命共同体だった。生まれながらにして、人としての権利を全て奪われている。耳にはめられた盗聴器と発信機。自らの手では決して外せない、呪縛という名の運命。

（いいえ、私は諦めない。二葉を、絶対にこの運命から救ってみせる。人としての道を歩ませてみせる。それができれば、私は単に真崎潤一のためのお飾り人形として作られたのではない、別の存在意義が生まれるのよ。私は自分の意思で、私のすべきことを成し遂げてみせる。）

長い間潤一の下で虐げられてきた優三にとって、二葉の存在は一縷の望みだった。希望だった。愛してもいない男と一生二人で生きていかねばならないことに絶望していた中、例え1年であっても、愛しいと思える相手と一緒にいられる機会が与えられたのだ。世間が羨む美貌も資産も、優三にとって何の価値もないことだった。それらがもたらすものが、いかに上辺だけで中身のないものか、知り尽くしてしまったからだ。

その夜。めずらしく、潤一が夕食に間に合う時間に帰宅した。
玄関では、お手伝いの者と一緒に優三も二葉も潤一を出迎える。
「お帰りなさいませ、旦那様。」
二葉が、深く頭を下げた。
『奥様』『旦那様』
家では、優三と潤一をそう呼ぶよう、潤一が徹底させている。そして、他所では「おばさま」「おじさま」と呼ばせる。世間体を重んじる潤一らしいやり方だ。
潤一は二葉を一瞥すると、優三とともに書斎へ来るように言った。その低い声が、優三を震撼させた。潤一は怒っている。二葉に、良くないことがもたらされるのだ。
書斎に入ると、スーツの上着を脱いで、ネクタイを片手でゆるめている潤一がいた。
重い扉により、外から固く閉ざされた空間に閉じ込められる。
優三は固唾を呑み込みながら、潤一の第一声を待った。
潤一はソファに座ると、二葉をにらみつけた。
「今日お前は、やってもいいことの範疇を超えたな。」
二葉は下唇を噛み、うつむいた。一応、覚悟はしていた。だが、友人を車に乗せ、寄り道をしたくらいのことは許されるだろうと、楽観視していたのも確かだった。
優三が二葉の代わりに答えた。
「結衣ちゃんは、宿題のために友人と一緒に寄り道をせざるを得なかったんです。これ以外、方法がなかったんです。それはあなただってわかってらっしゃるはずよ。」
「優三！お前は誰に向かって口をきいてるんだ！？口を慎め！」
二葉はビクッとして、身体を硬直させた。
潤一は、他所では信じられないほど穏やかで人当たりがよかった。だが、家の中では別人になる。
「宿題？くだらん。私の言いつけに背かねばできないような宿題など、する必要はない。そんなもの、無意味だ。」

何という横暴さ。潤一は、世界が自分中心に回っていると思っているに違いない。
潤一は、二葉の腕をつかむと、優三の隣に立たせた。そして、優三のやわらかな髪をつかむと、耳を露にした。白い耳に光る、紅いピアスが二葉の目に飛び込んでくる。
「よく見ろ！これと同じものが、お前の耳にもあるはずだ。これが何だか教えてやる。これは盗聴器と発信機だ。お前達がどこで何をしているか、私が把握するためのものだ！」
「！！」
二葉は、唇が勝手に震えだすのを止めることができなかった。
塞ぐことのできない口中が、みるみるうちに乾いていく。
そんなものだったなんて。
ずっと、「宗教上の理由で」つけられたものだと言われ、学校にもそう説明していたのに。
そしてそれが、優三にもつけられていたなんて。
「わかったか。お前に自由はないんだよ。私の家で、私の稼いだ金で生かされている以上、私の言うとおりに生きてもらう。当たり前のことだ。」
優三は悔しさに眉根を寄せた。
何もできない。
ここで潤一に口答えをすれば、おそらく殴られる。顔ではない、どこかを。蹴られるかもしれない。それを、二葉に見せたくない。これ以上怯えさせたくない。できるだけ平穏にすませたい。そのためには、我慢するしかないのだ。
潤一は煙草に火をつけながら、背を向けた。
「・・・わかったら出て行け。宿題などしなくていい。必要がない。・・・勉強など、その女には不要だ。」
優三は固くなった二葉の身体を支えるようにして、書斎を早々に後にした。
優三は不安だった。これをきっかけに、二葉が記憶の糸を少しず

つ手繰り寄せてしまわないか、と。
優三は二葉を自分の部屋につれていくと、きつくその身体を抱きしめた。
「ごめんなさい・・！私に力がなくて。あなたに、こんな思いをさせてしまって。」
搾り出すような切ない声に、二葉は首を振った。
「いいえ・・・。」
二葉は、優三の美しい顔を見つめて尋ねた。
「教えてください。奥様は、本当は私にとって何なのか。」
「え・・・。」
「紅いピアス。私は、これをずっと前から自分の一部としてきた気がするんです。この家に来るずっと前から。それを奥様もお持ちだなんて、偶然なはずありません。」
優三は、何と言うべきか迷った。本当のことは話せない。盗聴器の問題だけではなく、真実の過去を、二葉に話すことはできない。
（私の考えは変わらない。二葉は、すべてを忘れたままの方がいい。親友二人を失った経緯を思い出して一体どうなるの？自分の使命を思い出してどうするの？このまま・・・このまま私のもとで、成長することが許されれば・・・！）
優三は再び二葉を抱きしめた。
「あなたは、私と同じ運命の下に生まれたのよ。でも、私と同じ道を歩んでほしくない。」
「・・・どういうことですか？」
「あなたが私にとって、とても大事だということ。あなたは私の生きていく希望なの。私が生きていくうえで、初めて見出した希望なのよ。」
二葉はかつて、同じような感触を味わったような気がしていた。
遠い記憶の中で、今と同じように、柔らかで暖かな身体に包まれていた覚えがある。
暗闇の中で見た、たった一筋の光。

それを、二葉は今、まざまざと思い出していた。
（奥様は、確かに私の過去に関係がある。でも、それを私が思い出すことを望んでいないのだろう・・・。）
二葉にとっても、優三の存在は大切だった。この世でたった一つの、自分の戻れる場所。
しかし、優三は決して幸せな富豪婦人ではなかった。盗聴器と発信機で監視されているなんて、人としての権利を奪われたも同然だ。
（そして、私も・・・同じ。）
二葉は唇を噛み締めた。
（私も、人では・・・ない・・・？）

その晩、潤一は、遠野遺伝子研究所の留守を預かる遠野美鈴に電話をかけた。
それは、二葉が「前田結衣」となっても果たすべき、悪夢の続きを示していた。

第４話その７

結衣の生活は一変した。
自分の生活が、常に誰かに聞かれているなんて。
優三の悲しげな顔を見たときは平気なふりをしたが、一人になって、そのおぞましさを、まざまざと実感した。全身をかけめぐる鳥肌が、治まる気配はない。
呼吸一つにも、気を配る。歯を磨いたり、顔を洗ったりするごく普通の生活の音さえ、たてないように気を遣う。そうせずには、いられない。
「おはようございます。お嬢さん。」
「・・おはよう、浅井さん。」
そんな何気ない会話でさえ、考えてからするようになった。そして、その顔の筋肉は常に強張っていた。本当は、浅井に昨日の礼を言いたかった。だがそれによって、浅井が不当に結衣の味方をしていると潤一に誤解されるのではないかという不安が襲ってきて、結局何も言えなかった。
学校に着いて、初めて祥子のことを思い出した。
そういえば、昨日あれから、祥子はどうしたのだろうか。
父親にあんなことを言ってしまって、どうなったのか。
始業のチャイムの鳴るぎりぎりに、祥子は教室に入ってきた。
その顔は、結衣が声をかけることをためらうほどに生気を失っていた。
授業が始まってからは、耳の盗聴器を気にしながらも、結衣は祥子に気を配っていた。
祥子は座った目で、教科書とノートを凝視している。黒板や教師をまったく見ていない。おそらく、授業の内容もまったく耳に入っていないのだろう。
１５分ほど経ち、教師が祥子の様子に気付いた。

「三橋。・・三橋祥子！」
祥子は、頬杖をついていた手をはずし、驚くでもなく、ゆっくりと立ち上がった。
「三橋。今の続きを読みなさい。」
わかるわけがないことを知っていながらの常套句。結衣はノートに大きく「５６ページ３行目」と走り書きし、祥子にそっと見せた。
しかし。
「すみません。聞いてなかったので、わかりません。」
と悪びれずに答えた。祥子のふてぶてしい態度が、更に教師の癇に障ったようだ。
「君は、私の授業をバカにしているのか？邪魔だ。教室の後ろで立ってろ！」
教室の中が、水を打ったように静まり返る。
祥子は、好奇の目と、祥子を見まいとする生徒の間を縫うように歩き、教室の後ろに立った。
祥子は、結衣のノートを見ていたはずだ。なのに、まるですべてがどうでもいいかのような態度。だが、結衣も祥子の気持ちがわからないわけではない。昨日の一件は、祥子にとっての大事件だったのだ。
潤一は、宿題などしなくていいと言った。だが、これは結衣だけの問題ではない。駄目だったら校長に直談判に行こうなどと啖呵をきったのは結衣だ。しかし今となっては、それが躊躇われる。
結衣が潤一と交わした約束は沢山あった。自分の家で暮らす以上、主人の言うことには絶対従ってもらうということで、それはある意味当たり前だと思っていたから、昨日までは疑問にも思っていなかった。だが、潤一の取り決めは結衣の思っていた以上に厳密で、絶対だった。しかもそれは、人としての行動を制限するかのような決まりだったのだ。
潤一の取り決めの中に、「学校では絶対に問題を起こさないこと。保護者呼び出しのような事があった場合は、即刻退学させる。」と

いうものがあった。
（ちょっとでも約束から外れるようなことは許されないのだ。旦那様が１０と言ったら絶対１０で、１１も９もないいんだ。）
授業が終わると、祥子は職員室へと連れて行かれた。
「父親が父親だから、子どもも子どもよね。」
そんな囁きがあちらこちらから聞こえる。
結衣は、奥歯をグッと噛み締めた。
―　問題を起こすな　―
監視されているとわかった途端、生活が規則で雁字搦めになる。今まで規則は、心の奥で時折思い返すぐらいで、結衣の行動そのものを制限するものではなかった。だが、今は違う。
（軽はずみなことはできない。退学になってもかまわないけれど、あの家を追い出されたら私には行き場がなくなってしまう。帰るところがなくなってしまう・・・。）
それが、結衣の一番の恐怖だった。あの家を出て、一人で生きていく術はない。
だが、問題を起こさずとも出来ることもあるはずだ。潤一に聞かれてもかまわない言葉で、祥子を助けることができないか。
昼休み、結衣は意を決して担任の教師のもとを訪れた。
結衣は、祥子が父親のリストラのことで多くの生徒から揶揄されていること、そして、職業調べの宿題を完成させることが困難であることを訴えた。
担任はだまって聞いていたが、一通りの話が終わると、こう言った。
「宿題の件は、前田さんの保護者の方に協力していただいたら？」
「無理だと言われてます。」
「なら、あなたたち二人で組まないで、別のパートナーを見つけたら？」
「今の三橋さんの状況で、どうして他のパートナーが見つかるんですか？八方ふさがりなんです。だから、先生に相談しているんです。

」
担任は眉間に皺を寄せ、やがてため息混じりに言った。
「わかったわ。宿題の担当の先生と相談させて頂戴。三橋さんの件は、別にいじめられているわけではないし、そのうちおさまるでしょうから、様子を見ましょう。」
結衣は、その答えに納得がいかなかった。
「じゃあ、それまで三橋さんに耐えろとおっしゃるんですか。」
「噂や中傷は、どの世界にもあることよ。いちいち気にしていたら、やっていけないの。それに、お父様との確執が、学校生活をないがしろにしても良い理由にはならないのは、前田さんだってわかるでしょう？強くならなきゃ。それを繰り返して、人は大人になるのよ。」
何の解決にもならなかった。
体のいい言葉で、誤魔化されたような気がする。
大人というのは、子どもを上手く言いくるめてしまう。百戦錬磨の教師ともなれば、その達人なのかもしれない。現に、結衣はもっと色々言いたいことがあったのに、結局二の句がつげなくなって、退散せざるを得なかった。
暗澹たる気持ちで教室に戻ると、一人ポツンと座る祥子の姿が目に入ってきた。
結衣は、ゆっくりと祥子の横に立った。
「何も・・・できなくて、ごめんね。」
祥子はうつむいたまま、首を激しく横に振った。
「昨日、大丈夫だった・・・？」
祥子の表情は、前髪に隠れて見えない。だが、その肩が小刻みに震えだし、両手で目元を拭い始めたのを見た。祥子の気持ちが痛いほどに伝わってきて、結衣も目頭が熱くなるのをおさえきれそうになかった。だが、ここで自分が弱気になってはいけないと思った。
（私が、しっかりしなければ。私が三橋さんを守らなければ。大人なんか何もしてくれないし、大人ができることなんか上っ面ばかり。

だから私が何とかしなきゃ。）
祥子は、何も語ることができない。
こういうとき、優三は結衣を抱きしめてくれる。だが、今それを祥子にするには、他人すぎる。そういう意味でも、やはり優三はただの他人ではないのだろう。
午後の授業が終わり、放課後に結衣はもう一度、祥子に近づいた。
「校門まで、・・・一緒に帰ろう？」
祥子は、赤い目で頷いた。
結衣は、祥子を導くように、その手をしっかりと握り締めた。
廊下を進む間も、色々な目が向けられる。色々な囁きが聞こえてくる。だが、それを跳ね飛ばすように結衣はまっすぐ前を凝視して歩いた。自分達にやましいことは何もない。それをとやかく騒ぎたがる連中など、意に介さなければいい。
昇降口を出て、校門までの緩やかな坂道をゆっくりと下っていく。
別れるまでの時間を、惜しむように。
結衣は、おそるおそる聞いた。
「お父さんと・・・大丈夫だった？」
祥子の、結衣の手を握る手に力が入った。
「・・・昨日は、顔を合わせなかった。」
「三橋さんが帰った後、お父さん、すごく・・・悲しそうな顔してたよ。」
祥子は泣き笑いの様な表情を浮かべた。
「わかってる。あんなこと娘に言われて・・・傷つかないわけないもん。」
「・・・三橋さんのお父さん、恰好いいよ。一生懸命働いてて、どんなお客さんにも丁寧で。本当、すごく、素敵だった。」
「ありがとう。・・・私も、それはわかってるんだけど・・・。」
祥子が口ごもり、ほどなく校門前にたどりついた。
結衣は、祥子の手を離した。
「もう、寄り道・・・できないの。宿題はできないって、先生には

言っちゃった。」
祥子はそのとき、今日、初めて結衣を見つめた。
「もしかして、寄り道のこと、怒られた・・・？」
「ううん、それは、大丈夫。」
結衣は、手を軽く挙げた。
「じゃあ、また、明日ね。」
浅井が車の扉を閉めた。
結衣は、扉の外に立ちつくす祥子を見て、車の窓を開けた。
祥子の不安げな顔に、結衣はしっかりとした笑顔を見せた。
「私、三橋さんが一緒でよかった。本当よ。」
車は走り出した。
本当は、こんなセリフを言うつもりはなかった。普段なら、照れくさくて、言葉に出すことは憚られる。だが、今はこの気持ちを、伝えるべきだと思った。伝えねばならないと思った。それが、落胆する祥子を少しでも救うことができると信じたからだ。
結衣は、胸の前で両手の指をしっかりと組んだ。
今の結衣の思い。それは、祈りに近いものだった。

第４話その８

家に帰ると、その日は優三一人が結衣を出迎えた。
「ご苦労様、浅井さん。今日はこれで結構よ。」
「はい、奥様。」
浅井は深くお辞儀をし、そのまま玄関から去っていった。
不思議そうな顔をする結衣に、優三は言った。
「今日は、使用人に休みを出したの。すぐ、お茶にしましょうね。私がケーキを焼いたのよ。」
優三が踵を返すと、薄いクリーム色のフレアスカートが優雅に揺れた。
結衣には、何も気取られてはならない。優三は、いたって普通に振舞うように心がけた。
今日は、遠野美鈴が家に来る。
使用人に暇を出すのは、遠野研究所と真崎家の繋がりを秘密にするためだ。
優三は、不安だった。
潤一が美鈴を家に招くとき。それは、特別な命令を下すときだ。一体、それは何なのか？結衣に関係がなければいいが・・・。

夜も更け、潤一が自ら運転する外車で帰宅した。
それから１０分もしないうちに、玄関のドアをだまって開ける者が現れた。
地味なスーツを着て、長い髪を三つ編みにした、痩せた長身の中年女。それが遠野美鈴だ。
美鈴は玄関で待ち構えていた優三を一瞥すると、何も言わずに家の中へと進んでいく。
優三は、その後を黙ってついていった。
結衣は、自室に閉じ込めてある。

結衣と美鈴を会わせてはならない。結衣は「二葉」であった頃、美鈴が近寄るだけでひきつけを起こしていたのだから。記憶を失くしても、美鈴を見て何も感じないわけがない。
防音装置のついた地下の部屋は、普段、その存在を隠している。鉄製の扉の前で、美鈴は優三の方を振り返った。
「残念ながら、あなたはここまでよ。」
「わかっているわ。私は、ここで見張るだけ。」
「見張る？」
「二葉に、何もしないように。」
すると、美鈴は小さく笑った。
「ずいぶんな可愛がりようね。まるで、本当の娘みたい。」
優三は、美鈴を睨みつけた。
「悪いかしら？」
「一緒にいられるのは、1年だというのに。」
「かまわないわ。そんなこと・・・関係ないわ。」
美鈴はもう一度鼻先で笑い、扉の向こうへ消えていった。

間接照明のみで照らされた地下室の中は、潤一の趣味で固められていた。
黒革のリクライニングソファにクリスタルガラスのテーブル、アンティークの飾り棚。それらに囲まれて、見るからに高そうなスーツを着こなした潤一がグラスを傾けている。
美鈴が中に入ると、潤一は言った。
「仕事を、してもらいたい。」
美鈴は背筋を伸ばしたまま、潤一を見つめた。
「はい。それで、ターゲットは？」
「そこに書類を作っておいた。」
テーブルの上の紙切れ1枚。美鈴はそれを手でつまみあげた。そこには、一人の少女の名前と写真が貼ってあった。
「この子は・・・。」

「二葉のクラスメイトだ。」
「いつ、拉致すればいいでしょうか。」
「明日から、二葉は不登校になる。その1ヵ月後。1学期末考査の最終日だ。」
「それで、二葉は・・・。」
「9月になったら、別の学校に転校させる。」
「この少女は、どうなさいますか。」
「冷凍するほどの価値はない。その程度の遺伝子がどこまで発展するか、実験に使えばいい。」
「・・わかりました。」
潤一は、美鈴のほうを一度も見なかった。美鈴は黙って頭を下げ、部屋から出た。
外で腕を組んで待っていた優三を見ると、美鈴はため息をついた。
「安心しなさいよ。私が入るのを許されてるのは、この部屋だけ。あとの勝手は許されないのだから。」
「・・・玄関まで、送るわ。」
「それはご丁寧に、どうも。」
優三は、美鈴を先に歩かせた。
二葉には、絶対部屋から出るなと言ってある。しかし、安心はできない。
長い、白い廊下。
この家は、こんなにも広かっただろうか。
美鈴は、後ろからついてくる優三に言った。
「二葉が、記憶を取り戻す様子はなくて?」
「・・時々、記憶の断片が頭をかすめるみたい。」
「そう。」
美鈴は、本当は何を聞きたかったのだろう?優三には、わからない。
玄関先で、美鈴は優三と向き合った。
「一つ、聞いてもいい?」
「・・・ええ。」

「二葉に、今、友達はいるの？」
優三の身体が、ビクッとなった。
不安の色が、顔中に溢れる。
「いる・・けど。」
「名前は？」
「それを言ってどうするの？また、拉致するの？」
美鈴は、静かに息をついた。
「いいえ。それを決めるのは、私ではないから。」
「でも、命令されたのね？あの人に、命令されたんでしょう？」
美鈴は、眼鏡の奥の細い瞳をゆっくりと瞬いた。
「さようなら。」
閉ざされた扉の音が、優三の心に冷たく響いた。
（また、始まってしまった。）
優三は、力の抜けた身体を白い壁にもたれかけさせた。
（また、悪夢の続きがやってきてしまったのだ・・・。）

第４話その９

理由もなく突然「学校へ行かなくていい」と言われた二葉は、開いた口がふさがらなかった。

一体、何が起こったというのだ？制服は捨てられ、部屋から出してさえもらえない。

抵抗したら、家から追い出される。居場所を示す発信機。内緒話を許さない盗聴器。そんな弱みを握られている二葉に、成す術はなかった。

１週間ほど後、真崎潤一は自ら学校へ赴き、校長に告げた。

「結衣は、友人が迫害を受けていることと、宿題についての悩みを担任に打ち明けましたが、体よくあしらわれてしまったんです。気の弱いあの子が、どんな気持ちで相談したかわかりますか？それが、大した問題ではないかのように扱われたんです。結衣は傷ついて、もう、学校に通えない身体になってしまいました。学校に行こうとすると、腹痛を起こしたり、熱を出したり、動けなくなるんです。・・・新学期に、別の学校へ転校させます。この学校の対応に、私共は賛同できません。」

結衣が突然登校しなくなったことが、祥子にはどうしても納得できなかった。

最後の日の別れ際、結衣は祥子を励ました。その結衣が、どうして学校に来なくなるのか？

―　また、明日ね。　―

そう言ったのは、結衣だったではないか。

結局、宿題は提出せずに終わったが、問題が解決したわけではない。

父とは相変わらず気まずいまま、まともに顔もあわせていない。

いやらしい揶揄は減りつつあるものの、クラスメイトの嫌味は相変わらず続く。

結衣はあの日、もう学校に来ない覚悟だったのだろうか。だから、あんなに嬉しい言葉を残していったのだろうか。
（でも、やっぱり、わからない。）
主を失くした、隣の席。
いつになっても、埋まることがない。
篠崎に聞いても、何もわからない。
いくら考えても、やっぱり謎だ。どうして急にこなくなってしまったのか、理解できない。その理由を、教師は何も話してくれない。
（どうしてなの？私を一人置いて、いなくなってしまうなんて・・・。）
祥子は、本当に独りになってしまった。
学校では、いつも俯いて、誰とも口をきかない。誰も、祥子に話しかけない。
（私も・・・学校、辞めちゃいたいよ。）
しかし、この学校にいる限りは学費全額免除だが、例え公立の学校に転校しても、制服やら教科書やら給食費やらでお金がかかる。
結衣とは、立場が違う。
（嫌だよ。私、こんなところに一人残されるなんて。）
すべてが、つまらない。
学校にいても、家にいても、楽しいことなんて一つもない。
自分の存在理由がわからない。
（私、なんで生きてるんだろう。）
そんな疑問が、毎日脳裏をかけめぐるようになった。
駅のホームで電車を待っていると、不意に、線路に吸い込まれたくなる。
交差点で信号待ちをしていると、迫ってくる車の前に飛び込みたくなる。
暗い夜空に光る星を見ていると、そのまま瞳を閉じて倒れてしまいたくなる。
毎日が、こんなに味気なく、空しいものになるなんて。

何が、いけなかったのだろう。
何をどうすれば、こんな気持ちから脱することができるのだろう。
考えれば考えるほど、深みにはまっていく。
どんどん、出口から遠ざかっているような気がする。
（誰か、助けて。）
広い空を仰いで、祥子は高く高く手を差し伸べた。
（どうか、私を救って・・・！）
もっと激しい悲しみや過酷な運命に身を投じ、生きることに懸命になるしかないなら、こんな空しさから解放されるのではないか。
半端な悲しみと半端な状況に身を置き、何かに集中することも懸命になることもない方が、かえって辛いのではないだろうか。
（何かに、打たれたい。）
どしゃ降りの雨の中、祥子は傘をささずに歩いてみた。
（もっと、激しく、痛めつけられたい。）
額から目の中に入った雨粒が、瞳を痺れさせる。だが、それくらいで祥子は満足できない。
（もっと、引き裂かれるような痛みが欲しい。どうにもならない運命が欲しい。激しい悲しみで、すべてを忘れてしまいたい。すべてを、ぐちゃぐちゃに掻き乱してしまいたい・・！）
熱でも出して、寝込みたい。
心の痛みと身体の平穏とのアンバランスが堪らない。
眠っても、目が覚めても、変わらない世界が待っている。
祥子の心が波立っているのに、周りの世界は何も変わらず落ち着いている。それが、堪らない。
何もかもが、堪らない。

第４話その１０

結衣は、家から一歩も外に出してもらえない生活が続いた。
まるで檻に閉じ込められたペットの気分だ。
（私は一体、何者なんだろう。）
テレビや雑誌を見ることも許されず、外界と完全に遮断されている。
（私は、人として生きることが許されてない。外へ出る自由さえ無い。一体私は、どうしてこんな目にあうのだろう・・・？記憶がないから？でも、それだけで、勝手に学校までやめさせられてしまうものだろうか・・？）
窓を閉め切った部屋の中がたまらなく暑い。外はきっと、真夏の陽気だ。
窓に切り取られた英国風庭園の景色。
それだけが、今の結衣の全世界。
時折、祥子を思い出し、心配になる。
さよならさえ言えずに、別れてしまった。学校で、どうなったろうか。父親とは仲直りできたのだろうか。
そんなある日のこと。
平日の午後、真崎家に一人の訪問客があった。
「え・・・？」
お手伝いからそのことを告げられ、優三は躊躇した。
「彼女、一人なの？」
「はい。どうしても、お嬢さんにお会いしたいそうです。」
優三は、首を振った。
「駄目よ。結衣は、誰にも会うことができないの。」
「ええ。私もそう申し上げましたが、どうしても、と聞かなくて。」
優三は少し考え、やがて立ち上がった。
「わかったわ。私が直接、お話しましょう。」

玄関を出て、1分以上歩かねば、門にたどりつかない。
金色に塗られたアールヌーボー調の門の向こうに、制服姿の少女がいた。
少女は痩せて顔色が悪かったが、優三の姿を見ると微笑み、深々とお辞儀をした。
その顔を見て優三は、授業参観で出会った少女であることを思い出した。
「あなたは、いつか、教室へ案内してくださった・・・。」
「覚えてて下さったなんて、光栄です。三橋祥子と申します。」
優三は閉められた門越しに、祥子に言った。
「せっかく来ていただいたのですけど、結衣は誰とも会えないんですよ。」
「私のせいですか？私が、学校に来られない原因なんでしょうか。」
「いいえ。そうではないと思うわ。・・・もしかして、あなたのお父様、たい焼きをお作りになる？結衣が『友達のお父さんが作った。』って自慢げにご馳走してくれたことがあります。」
祥子の顔が明るくなった。
「ええ、ええ。そうです。私の父です。・・・そうですか、前田さん、たい焼き買ってくれたんですね・・。」
嬉しそうな祥子の様子を見て、この少女は本当に結衣を心配して来てくれたのだと実感した。優三は、この少女をこのまま帰すのは忍びないと思った。
「三橋さん・・とおっしゃいましたね。少し、お時間大丈夫？」
「ええ、もちろんです。」
「では、ここで5分ほど待っていてくださるかしら？ちょうど今、お菓子を焼いたのよ。ぜひ、お持ちになって。お父様と一緒に召し上がって頂戴。ね？」
祥子が返事をする間もなく、優三は小走りに邸宅へと戻っていった。
結衣とは、結局会えないままなのか・・・。祥子は肩を落として、

門扉にもたれかかった。
ここの住所を、やっとの思いで担任から聞きだした。担任は、結衣が不登校になった責任を一方的に負わされ、弱気になっているようだった。
生きる目的を見失ってしまった祥子の、最後の砦だった。結衣に会おうと思い立ったとき、祥子の瞳は再び生気を取り戻した。そして、その実現の日を指折り数えて待った。だが、その望みも絶たれてしまう。
本当に5分後、優三は息を切らせて戻ってきた。
「奥様、そんなにお急ぎにならなくても、よろしかったのですよ。」
「いいえ、こんな暑い中、待たせては悪いもの。」
美しい可憐な容姿に似つかわしくなく、額に汗を浮かべている。
優三は、顔より大きな紙袋を門の鉄柵の隙間から手渡した。
「結衣と二人で作ったのよ。お口に合えば、よろしいのだけれど。」
「・・・とても嬉しいです。ありがとうございます。」
優三はやさしい瞳で、祥子を見つめた。
「お父様のたい焼きね、本当においしかったのよ。心に染み渡る、優しい味だったの。あれが、あなたのお父様の味なのね。」
こんな大邸宅に暮らす貴婦人が、父の作ったものを褒めてくれるなんて。しかも、この言葉は嘘ではないだろう。ただの社交辞令なら、こんなに心に染みるはずがない。
不思議だ。
心からの言葉は、心が聞くのだろうか。
心は、言葉の真意を見極める力を持っているのだろうか。
祥子はこのとき、初めて、たい焼きを焼く父を誇らしく思えた。
「父に、伝えます。きっと、とても喜びます。」
「本当のことだもの。結衣が元気になったら、ぜひ一緒にお店にうかがいたいわ。」
「前田さん、そんなにお悪いんですか。」
「・・・いえ、もう、だいぶいいのよ。あなたが心配して来てくれ

たことはちゃんと伝えますよ。きっと、喜ぶわ。」
「では、こう、お伝えくださいませんか。私は、大丈夫だと。学校のことも、父のことも、何も心配しなくていい、って。」
優三はしっかりと頷いた。
「わかりました。確かに、伝えますわ。」
本当は、何も解決などしていなかった。
本当は、結衣に会って、愚痴って慰めてもらおうと考えていた。
だが、顔を見ることさえ叶わない結衣のことを思うと、自分が甘えてはいけないのだと思いなおした。逆に、祥子の方がしっかりして、結衣の気持ちを少しでも軽くしてやらねばならないのだと自覚した。
家に帰り、紙包みを開けると、市松模様のアイスボックスクッキーが沢山詰められたビニル袋が入っていた。そして紙袋の奥底には、折りたたまれた白い紙が入っていた。
開いてみて、祥子は息が止まるほど驚いた。
それは、結衣からの手紙だったからだ。
門先で優三はあんな風に言ったが、祥子が来ていることを優三が結衣に伝え、クッキーに託けて手紙をくれたのだ。
そんな回りくどいことをしなければならない理由は、祥子が知る由もない。
優三は、結衣が他人に会ったり、話をしないように潤一から厳しく言いつかっている。当然、祥子に会わせることもできない。だが、祥子が結衣にどうしても会いたいと思っているように、結衣も祥子に会いたいはずだ、と優三は判断したのである。そこで、紙での会話によって祥子が来ていることを結衣に伝え、手紙を素早く書かせ、お菓子と一緒に手渡したのだった。潤一の盗聴器がある以上、手紙だけを直接渡すことはできないし、「手紙」という言葉が会話に入ることも許されない。あくまでも祥子は何もわからないまま、お菓子だけ持って帰ったという筋書きにしておく必要があった。
結衣からの手紙には、学校へ行かなくなった理由などは一切書か

れておらず、ただひたすら祥子の身を案じ、学校に一人取り残してしまったことを詫びていた。そして、父と一日も早く昔どおりの関係に戻ることを願っていた。

祥子は、結衣が自分を見捨てたわけではなかったと確信した。記憶喪失で、一つ年上だという複雑な事情から、突然不登校になっても仕方のないことかもしれないと思った。

結衣からの手紙を胸に抱き、祥子は唇を震わせた。

自分は、独りではなかった。

自分をこんなにも案じてくれている人がいる。

祥子には想像のつかないような人生を歩んでいる結衣を思えば、自分は何と平凡で平和なのだろう。それを「堪らない」と思うなんて、そもそも幸せな証拠だ。

結衣からの手紙の、最後に書かれていた一文。

―　私は、忘れない。この先記憶が戻っても、再び記憶を失っても、三橋さんのことは絶対に忘れない　―

なんて嬉しい言葉。

この先の長い一生の間でも、こんな言葉を再びもらえるかどうかわからない。

（いいよ。一度で十分。十分よ。）

その日、祥子は久しぶりに父を玄関まで出迎えた。

「・・・お帰り。」

本当は、言いたいことが沢山あった。結衣のことや優三の言葉。伝えたいこと、謝るべきこと、数え切れない。しかし、今はまだ照れくさかった。ただ、祥子の出迎えに微笑んでくれた白髪頭の父が、痛いくらい愛おしいと思った。

まだ、明日がある。

伝えたいことは、明日から、一つずつゆっくり話していこう。

父にも、自分にも、時間はまだたっぷりあるのだから。

祥子は久しぶりに、明日という日を待ち遠しいと思いながら、布団に入った。

もし、「大っ嫌い」と叫んだ相手が父でなく友達だったら、おそらく絶縁状態になり、そのまま一生を終えてしまっただろう。だが、父子という関係が、終わりのない繋がりをもたらすのだ。それが、他人との決定的な差なのだろう。「血」のなせる業なのだろう。

母は、離婚によって父との関係を終わりにすることができたのかもしれない。だが、祥子にとって母はただ一人であり、それは断絶することができない。戸籍上何かできたとしても、それは真の意味で「断絶」したとはいえない。父と母はもとは他人だったのだから、自分達の意思で「夫婦」になることもできれば、他人に戻ることもできる。だが、生を受けた瞬間から「親子」である二人に、戻るところはない。

何年離れていても、どんなに遠く離れていても、「肉親」という根拠により会うことができる。「他人」なら、いつでもというわけにはいかない。会うからには、それなりの理由が必要だ。「友達」とか「幼馴染」とか、「師弟」とか、それなりの関係を築き上げておく必要がある。しかも、その関係をある程度維持していく必要もある。そんな努力が「血の繋がり」によって必要無くなるのだ。だが逆に、その切っても切れない繋がりが、枷になることもある。しかし、そこまで悟るには、祥子はまだ幼すぎた。

祥子は、他人である結衣と、この先も関係を築いていきたいと思った。

手紙を書こう、と思った。

返事はいらない。受け取りを拒否されてもいい。でも、自分が「ずっと繋がっていたい」と思っていることだけは、伝えたい。

空っぽだった祥子の胸に、確かな火が灯った。

それは、希望の火でもあり、命の火でもあった。

7月に入り、しばらく経った頃。

かつて結衣が在籍していたクラスでは、主を失くした机が、もう

一つ増えた。
その机が主を再び迎えることはなく・・・
次の年の3月、クラスの終わりとともに処分された。

第5話

自分が「人間ではない」という考えが浮かんだ瞬間の感覚を、結衣の身体が忘れない。あの時、激しい衝撃が全身を貫いた。

（つまり、私は人間ではないんだ。それを、記憶の片隅が思い出したに違いない。）

だがそれは、それ以上の記憶を引き出すきっかけにはならなかった。「遠野二葉」という本名も、冷凍睡眠の実験台にされている親友のことも、研究所のことも、１２歳までの幸せな日々のことも、何も、思い出せない。

（でも、希望の光は見えた。）

それは、優三の存在だ。同じ紅蓮のピアスをつけられた女性。いくら潤一の庇護下にあるとはいえ、優三との間にはもっと別の共通点があるような気がする。「盗聴器と発信機」をつけて生きていかねばならない、共通の宿命のようなものを感じる。それが何なのか思い出せば、すべてが明らかになると思う。

だが、優三は言う。

「あなたは、何も思い出さなくていい。思い出さないほうがいい。」

そのセリフそのものが、結衣の過去を知っている証だ。しかし、優三は懇願する。

「このままでいいのよ。あなたさえこのままでいてくれたら、私達はずっと一緒にいられるかもしれない。」

優三はそう言って結衣を抱きしめる。だから結衣もその時は、思い出さないほうがいいのだと思う。しかし、記憶がないことが途轍もなく辛くなる時も確かに存在する。忘れてはならない大事なことを、過去に置き去りにしてしまっている気がするからだ。

９月。

前田結衣という仮の名を纏って、遠野二葉は再び新しい学校に足

を踏み入れた。

結衣は、学校では必要以外の言葉を一切発しないと、心に決めていた。他人に関わっても、何の責任もとれないことに気付いたからだ。この前のように祥子のトラブルを目の当たりにしても、解決するだけの力がないばかりか、行動の制限まで受けている結衣に、なす術はない。

（私は、思い上がっていたのかもしれない。）

自分の無力さを棚に上げて、何を勘違いしていたのだろう。「誰かの役に立てる」、だなんて。

今回は「寡黙な転校生」で押し通すつもりだった。

だが学校というのは厄介な所で、何かとグループでの行動を強要してくる。独りでポツンとしていても、必ずしっかり者の女の子が飛んできて「ちゃんと参加しなきゃ駄目よ！」と言われ、手を引っ張られてしまうのだ。

もちろん、仲間に入っていれば楽しい場面にも遭遇する。だが、一緒になって笑っていると、突然、思い出すのだ。耳に着けられた、盗聴器と発信機のことを。

その途端、景色に亀裂が入った音を聞く。目の前が歪んで、沈んでいく。

そんなある日のロングホームルームの時間、全校生徒が講堂に集められた。

何かの講演だという。

客席側が暗くなり、明るく照らされた舞台の上に一人の女性が現れた。その女性は、悪質な飲酒運転の車に娘を轢き殺されたという体験を話し始めた。次の男性は、妹を通り魔に殺害された体験を語った。どうやら、犯罪被害者の体験談を聞かせることが目的のようだ。

結衣は、自分の不幸だけがこの世の不幸なのではないと痛感した。泪を瞳に一杯浮かべながらも、まっすぐ前を見据えて語る姿に、犯

罪を絶対に許すまいとする強い意志を感じた。
最後の講演者は、中年の夫婦だった。
父親は明らかに日本人だが、母親とおぼしき女性は栗色の髪をした、欧米系の白人だ。
突然場内が真っ暗になり、壇上のスクリーンに、美しい少女の笑顔が映し出された。
「これは、私達の娘、セシリアの最後の写真です。」
結衣の口元が、勝手に緩んだ。
「3年前、12歳の時に突然行方不明になりました。手がかりも全くなく、現在に至ります。当時はマスコミにも取り上げられ、多くの方が協力してくださいましたが、今ではもう、警察さえ捜索を諦めている状態です。ですが、私達親が、娘を諦めることなどできないのです。何年経とうと、例え死んでも、諦められる日など来はしないのです。私たちは現在、セシリアの行方に少しでも心当たりのある方を探すため、全国をまわっています。セシリアは日本人離れした特徴のある顔立ちをしていますが、もしかすると、整形手術などで顔を変えられているかもしれません。記憶がないかもしれません。皆さんのお友達の中で、もし、ちょっとでも思い当たる節のある人がいたら教えてください。失礼な結果になるかもしれませんが、どうか、私達の必死の思いに免じて協力してください。」
結衣は、この話は他人事ではないと感じた。
スクリーンに映し出されたあんな美少女が自分だとはとても思えないが、事実、結衣は記憶もないし、年齢も同じだ。何せ記憶がないのだから、整形手術をしていない保障はどこにもない。この学校の教師はともかく、生徒は誰も結衣の境遇に気付いていないようだ。そのため、結衣は一人でこの胸中のざわめきに耐えた。
講演会が終了すると、結衣は走って舞台裏に向かった。
さっきの夫婦に実際に会って、話がしたかった。あの「セシリア」という少女と自分が同一人物だなんて可能性はゼロに等しいとは思う。だが、「ゼロ」ではないのだ。結衣と同じような境遇にある少

女が、この世にそう何人もいるわけがない。
もし、あの夫婦が自分の本当の両親だったら？
今、会いに行かねば一生会えないかもしれないではないか！？
講演者たちは、教師に連れられてどこかへ引き上げようとしていた。
結衣は一瞬躊躇したが、後悔したくないと思い、声をあげた。
「あの！」
大人たちが、一斉に振り向く。
結衣は、夫婦の下にかけよった。
「あの、さっきのお話、もう少し詳しく聞かせていただけないでしょうか。」
「・・え・・？」
「突然すみません。でも私、記憶がないんです。自分が誰だか、わからないんです。」
夫婦は息を呑み、結衣を見つめた。
それを見た教師は慌てた様だが、すぐに個室を準備してくれた。教師とて、校外の大人と生徒だけ置き去りにしていくことは心配らしく、「すぐに戻るから」と言って、足早に去っていった。
ソファで向き合い、セシリアに良く似た美しい母親が紅茶色の瞳で、結衣をじっと見つめた。だが、すぐに瞳を伏せ、首を振った。
「残念ですが、あなたは私達のセシリアではありません。」
結衣は、あまりにもきっぱりと断言されたことに合点がいかなかった。
「どうしてわかるんですか？整形とかしてたら、わからないじゃないですか？」
だが、母親の表情は落ち着いていた。
「わかりますよ。どんなに顔が変わっていても、本当の娘なら、わかります。」
「そんな・・・。」
「そういうものですよ。あなたが、本当にセシリアだったら、私達

はどんなに救われるでしょう？でも、違うものは違うとしか言えません。」
女性は、結衣の手を優しく握り締めた。
「せっかく名乗って下さったのにごめんなさい。あなたも、記憶がなくてさぞ辛いことでしょう。出口の見えない苦しみは、よくわかるつもりです。」
すると、今まで黙っていた父親が、初めて口を開いた。
「・・・どちらかといえば、君は、セシリアの一番の仲良しだった子に似ている気がする。」
その言葉に、母親も頷いた。
「そう、そう。どこかで見た感じがするとは思っていたのだけれど・・・確かに似ている気がするわ。細かい部分は似ていないのだけれど、全体の面影が・・・どことなく。」
結衣は、高鳴る胸を押さえて聞いた。
「その子の名前、わかりますか。」
「ええ。家にも何度も遊びに来ていたもの。遠野二葉ちゃん、っていうのよ。」
「トオノ・・・フタバ・・・。」
結衣は、必死で思い出そうとした。この名前は、記憶の片隅に残っていないだろうか？
「二葉ちゃんは、セシリアがいなくなるちょっと前に引っ越して転校してしまったのよ。だから、その後のことはわからないの。引越先の住所も何も教えてくれないまま、いなくなってしまって。」
「そうですか・・・。」
「あなたは今、ご両親と一緒に暮らしているのではないのね？」
「はい。ある夫婦に引き取られています。」
「そう。本当に独りなのね。」
落胆する結衣に、セシリアの母は一枚の紙を渡した。それは、セシリアの行方を尋ねる内容のチラシだった。
「私達は全国を回っていますから、あなたのご両親探しに協力でき

るかもしれません。このチラシに、私達の連絡先が書いてあります。何かあったら、連絡を下さい。私達も何かわかったら、この学校へ連絡を入れます。」
結衣は、その力強い言葉に微笑んで礼を言った。孤独に冷え切っていた心が、味方を得たことで少し温まったような気がした。

結衣と別れた後、セシリアの両親は応接室へと招かれた。そこでは、校長や理事長と講演者たちとの、簡単な茶話会が行われていた。
その中に、真崎潤一の姿があった。
潤一は、この犯罪被害者の会の後援会長をしていたのである。
「生徒達にとって、大変意義のある講演会でした。ありがとうございます。」
そう言って校長が頭を下げると、潤一は穏やかに微笑んだ。
「いいえ。礼なら、講演者の方々に。毎日、終わりのない苦しみに耐えながら活動なさっている姿には頭が下がります。私など、ただの仲介役にすぎません。」
すると、講演者の一人が言った。
「真崎さんには、私達本当に感謝しているんです。莫大な寄付に、活動の場の提供と、何から何までお世話になりっぱなしで。」
「そうですとも。私達の活動は、真崎さんのご支援なしにはありえません。」
潤一は、はにかんだ様な笑顔で、ただ首を振るだけだった。
セシリアの両親がさっきの結衣の話をすると、潤一は頷き、
「彼女を引き取っているのは、私です。」
と答えた。
「どうぞご心配なく。私も全力で彼女の身内を捜索しています。見つかるまでは、私が責任を持ちますから。」
セシリアの父親は、思い出したというように目を見開いた。
「ああ・・！以前、週刊誌で記事を見た覚えがあります。そうでしたか、さっきの少女が真崎さんが引き取っているという子でしたか・

・・・。」
「そうです。まさか、あなた方に直接会いに行くとは思っていませんでしたが。」
「セシリアの親友だった子に何となく似ていました。・・・いや、同じくらいの年代だったので、そう見えただけかもしれません。」
「その線でも当たってみます。私の全力を挙げて、あの子の身内を探し出してみせますよ。」
「真崎さんが後見人なら安心ですね。」
潤一は心の奥底で、ほくそ笑んでいた。
結衣が、セシリアの顔を見て過去を思い出すか、試したかったのだ。
そして、結衣の顔がどれほど遠野二葉の面影を残しているのか確認したかったのだ。それだけのために、潤一はこの講演会を学校側に提案したのだった。権力者である潤一の申し出を学校が断るわけもなく、会は実現した。そして潤一の思惑通りにことは進んだのである。
結衣は、人気の無い廊下の隅で、セシリアの両親からもらったチラシを凝視した。
白桃色の頬をした、睫毛の長い美少女の笑顔の写真。
結衣は眉根を寄せて、唇を噛み締めた。
(私は、この顔に見覚えがあるのか、ないのか・・・。わからない。)
何も、脳裏をかすめない。どんなに写真を見つめても、何も感じない。
家に帰ると、めずらしく潤一が出迎えてきた。その不可解な行動が不気味で、結衣は思わず腰を引いた。
潤一は、笑った。
「そんなに、怖れられてるとはね。」
結衣は下唇を噛み、潤一とは目を合わせないようにした。その姿を見て、結衣のもとに駆け寄ろうとした優三を、潤一は自らの腕で

制した。
「気になるか？セシリアという娘のことが。」
「！！」
盗聴器で聞かれていることは覚悟していたが、それを直接指摘されるとは思っていなかった。潤一は一体、何が言いたいのか？
優三は不安気に潤一を見上げた。
結衣も、その答えを息を呑んで待った。
潤一の濃い眉が、得意げにつりあがった。
「教えてやろう。君の正体を。」
「あなた！」
優三の叫びは、潤一にとって何の意味も持たない。
「遠野二葉。これが本名だ。」
「・・・それは・・・。」
「つまり、セシリアという子は君の友達だったんだよ。」
優三は夫の腕をすり抜けて二葉の下に駆け寄り、潤一から守るように抱きしめた。
「あなた！事実を教えることがまだ危険だということを知っているでしょう！？」
「ふん・・・。事実を知ることと、記憶が戻ることはイコールではない。見ろ、二葉の顔を。それは、何もわかっていない顔だ。」
潤一の言うとおりだった。
二葉は潤一の言っていることを理解しながらも、事実として実感することはできなかった。　セシリアの両親が言ったとおり、自分は遠野二葉という人間だった。だが、そんな名前には全く覚えがない。セシリアの顔も、見知らぬ他人だ。大体、潤一は二葉の身元をわかっていながら、なぜ親元へ返そうとしないのだろう？取材では、「身元が判明するまで預かる」と言っていたではないか。それとも、セシリアの両親との接触によって、潤一も今日初めて二葉の身元を知ったのだろうか。いや、そんなはずはない。それは、優三の「事実を教えることがまだ危険だ」というセリフが証明している。

では、一体何が危険なのか。
記憶を取り戻すことが、何故危険を伴うのか。
（どちらにしろ・・・奥様が何度も言ったとおり、私は記憶を取り戻さないほうがいいというのが事実なのだろう。）
潤一が薄い唇を歪めて笑う。
どうしてこの男は、他人を見下して喜ぶのだろう。他人の苦しむ姿に快楽を覚えるのだろう。
自室に戻って、鏡に自分の顔を映しながら思った。
（私は・・・トオノフタバ。フタバ・・・。）
覚えのない他人のような名前を突きつけられても、受け入れられない。だが、「前田結衣」という実体のない名とは違う。自分自身の、本当の名前なのだ。
チラシのセシリアの写真を穴があくほど見つめて、脳裏に焼き付けようと思った。
だが、自信がない。
もう一度記憶をなくしたとき、この顔を覚えていられる自信がない。実際、今、親友であったはずのセシリアをまったく思い出せないではないか？
二葉は頭を抱えて、うなだれた。
（私は、私がわからない。私が誰だか教えられたのにわからない今の私が、許せない！）
おそろしい。
自分は、失くした記憶の中で何をしてきたというのか。
人でも殺したか。
親でも殺めたか。
本当は、あのセシリアを自分が殺してしまったのではないか！？
その晩、二葉は部屋の片隅で身体を丸め、震えて過ごした。
初めての感覚。
それは、得体の知れない己への恐怖だった。

第6話その1

二葉が耳に紅蓮(あか)いピアスを付けていることが生徒の間で噂になったのは、11月の半ばだった。学校側へは「宗教上の理由」としていたが、生徒間にはそれが周知されてはいない。当然のごとく校則違反の生意気な女として見られ、あっという間に孤立し、終いには集団暴行を受ける破目になった。

すっかり日の暮れた放課後。顔に痣や切り傷を作り、足を引きずりながら校門へ辿りついた二葉を、運転手の浅井は慌てて支えたが、二葉はその手を振り払った。

「私は大丈夫・・・。大丈夫です。」

後部シートに身体を預け、二葉は固く瞳を閉じた。

見知らぬ女子達に殴られ、蹴られたショックが、二葉の身体を震えさせる。だが、二葉にはそれ以上に脳裏を何度もかすめる記憶の断片の方が、ずっと重要だった。

(私は、こういう経験をしていたに違いない。ううん、こういう事を、他の誰かにしていたのかもしれない。)

屋敷に着くと、優三が血相を変えて二葉の顔を覗き込んだ。

「一体、どういうことなの?どうしたというの!?」

「・・・・。」

ショックのせいか、声が出ない。

(さっきは、出たのに。浅井さんには、ちゃんと「大丈夫」って言えたのに・・。)

唇さえ開かない二葉に、優三はそれ以上何も聞けなかった。

優三は二葉を自室に連れて行き、優しく傷の手当をした。そして着換えさせ、精神安定剤を与えて眠らせた。

埃まみれですりきれた制服をたたみながら、優三は唇を噛み締めた。

悔しかった。

どんな理由があろうとも、自分の娘のような存在である二葉が他人に暴行されるなんて許せるわけがない。犯人がわかれば、捕まえて半殺しの目にあわせてやりたいと本気で思う。
潤一が帰宅するなり、優三は人払いをして話をきりだした。
「教えて頂戴。二葉はなぜ、暴行を受けたの？ちゃんと、盗聴していたんでしょう？」
潤一は苦笑した。
「いつもは否定するくせに、こんな時ばかりは盗聴器を頼るか。」
「そうよ、こんな時くらいしか役に立たないんだから。さあ、教えて。」
潤一は細長い煙草を取り出し、火をつけた。
「ピアスがばれた。それだけだ。」
「それだけって・・・。どうしてそれが、あんなことになるのよ？」
「校則違反は許せないっていう正義面して愚かな行動に走る輩（やから）は、どこの世界にもいる。」
優三は苦いため息をついて、白い額を抱え込んだ。
「可哀想に・・。あの子、ショックで口も聞けなかったのよ。浅井にも特に何も言ってないようだし。」
「いいじゃないか、これで、不登校の原因が勝手にできたんだ。」
優三は弾かれたように顔をあげた。
「勝手に、・・・って！二葉の気持ちはどうなるの？」
「気持ち？あれは私の研究所の道具だ。『ヒト』ではない。」
「一度精神破壊しかけた道具にでも、そんなことを言うの？」
「そうだ。大体あれは、本来ならすでに朽ち果てていたはずなんだ。今さらどうなろうと知ったことではない。」
優三は奥歯を噛み、そして叫んだ。
「どうしてあなたはそうなの！？私は悔しい。二葉があんな目にあうなんて許せない！あなたが二葉を所有物だというなら、あなたはそれを痛めつけられたことに対して、腹が立たないの！？」
潤一は落ち着き払った様子で足を組んだ。

「そういう気持ちには、ならない。私にとっては使い捨てのような物だからな。」
「・・・一体あなたにとって、遠野研究所は何？生まれたときから与えられていた付属物のようなもの？」
上質な煙草の煙が、細長く宙を漂う。
優三の視線に、潤一は決して視線をぶつけるようなことはしない。しばらくの沈黙の後、潤一は立ち上がった。
「あした、一緒に学校へ行くか？」
「・・行くわ。どうせ、その方があなたにとって外聞がいいからなんでしょうけど。」
「それはそうだ。二葉を大事に可愛がっているという事になっているのだからな。だが、二葉が集団暴行を受けたことが外部に漏れることだけは絶対に許さない。」
優三は、その潤一の言葉が納得できなかった。
「どういうこと？」
「真崎家に引き取られている子が暴行を受けたなんて、ただの恥だ。」
「恥？」
「そうだ。我々は、いつも高みから下を見下ろしているべき人種だ。例え赤の他人だろうと、我々と暮らしている人間が他人から見下されたなんて絶対に知られてはならない。真崎家が世間からバカにされたのと同じことなんだからな。弱みなんか、絶対に世間に知られてはならない。」
「・・・じゃあ、二葉をあんな目にあわせた子たちは、どうなるの？」
「校内で適当に処分されるだろう。私立の学校はこんな不祥事が外部に漏れることを何よりも怖れるはずだから極秘に事をおさめるはずだ。そこに恩を売ってやればいい。二葉はもう、あの学校へ行く必要はない。」
優三は顎を引きながら、唇を引き締めた。

「・・・それで、ターゲットは決まったの？」
「・・・そんなことは、知らなくていい。」
「お願い。二葉を痛めつけた子を、さらって。」
潤一は、軽い驚きを隠せなかった。
研究所の実験台として若い子を拉致することをこの上なく軽蔑し、反対していた優三がそんなことを言うとは思ってもみなかったからだ。優三の怒りはわかる。だが。
「盗聴器からは、誰かなんてわからなかったが。」
「二葉に、しゃべらせればいい。」
「それに、一人しかさらえないぞ。絶対に。複数は危険だ。」
「絶対にリーダー格がいたはずよ。それでいいわ。」
「そいつに、実験台としての価値があるとは限らない。」
「いいじゃないの。刻んで、ホルマリン漬けにでもすれば？そういうの、好きでしょ。」
「いや、・・・駄目だ。」
潤一は口元に手をあてた。
「俺達が抗議に行き、その後、暴行に加わった一人が行方不明になれば必ず俺達が疑われる。足がつくようなことはできない。」
「なら、抗議に行かなくていい。どうせ犯人がわかったって所詮停学になる程度なら、今は黙っていて、後で・・・！」
優三の白い手が震えている。今の優三は、正気ではない。
潤一は、灰皿で煙草の先をひねりつぶした。
「優三。実験台を選択することは、ビジネスだ。個人的な恨みや憎しみで決めるべきものではない。」
「それはわかっているわ。だからどうせなら、二葉を痛めつけた連中の中で、価値のありそうなのを選んでもいいんじゃないかって言ってるの。」
「二葉が学校へ行かない以上、それを探るのは難しい。何も盗聴できないし、情報収集にも限界がある。・・・期待は、するな。」
そのまま背を向け、潤一は部屋から去っていった。

優三は、二葉の一件に心を痛めながらも、潤一がいつになく話に乗ってくれたことに意外さを感じていた。潤一からは、いつも一喝されていた。口ごたえしようものなら殴られていた。だが、今日は最後まで会話が続いた。こんなことは、もしかしたら初めてかもしれない。

電気をつけたままの部屋で、二葉は眠っていた。

優三はベッドの脇に腰掛け、傷ついた二葉の髪を撫でながら、

（明日、病院で検査させねば・・・。）

と考えていた。二葉は、何も悪くない。それなのに、こんな目に遭うなんて理不尽すぎる。

（私にできることは何？いっそ身代わりにでもなれたらいいのに。私の人生なんて、いらなにのだから。）

涙の痕が、二葉の頬に残っている。

優三は切なく眉を寄せた。

（眠りが、嫌なことを忘れていられる唯一の方法なのだとすれば、このままずっと眠っていればいいい。私がずっとそばにいて守ってあげる。もう二度と、あなたが傷つかないように。）

次の日の朝。優三が二葉のベッド脇で目覚めたときには、二葉も、潤一も、そして使用人達さえいなかった。家の中が、完全に空の状態になっていたのである。

こんなことは、めずらしい。

使用人がいない時は、遠野研究所が関わるときだ。だが、家の中にその気配はない。秘密の地下室でさえ、もぬけの殻だ。

（一体どういうこと？大体、二葉をどこへやったというの・・・！？）

玄関から外へ出て、ガレージを見ると、潤一の車はなかった。つまり、二葉を連れてどこかへ行ったということだ。

（・・・研究所へ連れて行ったというの？あの悪の巣窟へ、また引き戻そうというの？）

肩に羽織った薄いショールを通して、秋の冷たい空気が身体に染みる。

乱れた栗色の巻き毛を頬で揺らしながら、優三は不安気に空を見上げることしかできなかった。

第6話その2

広いリビングを行ったり来たりしているうちに、ようやく日が暮れた。
誰も帰ってこない屋敷の中で、優三は飲まず食わずで一日を終えようとしていた。
心配でならない。あの研究所には、遠野美鈴や冷凍実験にされた少女など、二葉の忌まわしい記憶を呼び覚ます材料が山のようにある。そんな所で一気に覚醒し、再び地獄に突き落とされるようなことになったら・・・・！？
と、その時。
突然、来客をつげるインターホンが鳴り響いた。
優三は弾かれたように立ち上がり、玄関へと走った。
クリスタルガラスのシャンデリアの下、優三は想像通りの姿をとらえた。
「やっぱり、あなたでしたのね。」
眠る二葉を抱きかかえた美鈴は、無表情のまま言った。
「この子の部屋へ案内してちょうだい。」
「・・・いいわ。」
優三は、美鈴を二葉の部屋へ連れて行った。そして、ベッドに二葉を横たえたことを確認すると、すぐに美鈴を部屋から追い出した。
「一体、どういうことなのか説明して。」
「二葉の診察をしたのよ、真崎潤一（オーナー）に頼まれて。大丈夫。骨にも脳波にも異常はなかったわ。」
優三は、美鈴の腕をつかんだ。
「どうして、わざわざあなたが！？」
美鈴は、つかまれた腕を強く振り払い、優三から逃れた。
「『どうして』？当たり前じゃないの。あなたは、二葉を普通の病院にでも連れて行くつもりだったの？冗談じゃないわ。二葉は、う

ちの研究所の大事な試料なのよ？切り傷の手当てならともかく、精密検査なんて絶対に許さないわよ。」
「でも、研究所に連れ帰って記憶が戻って錯乱状態になるリスクだって十分あったはずよ。」
「ぐっすり眠らせて連れて行ったから、目もあわせてないわよ。第一、勘違いしないでちょうだい。物事の主体は、研究所とその持ち主なのよ。試料の都合なんて関係ないの。まだそんなことも認識できないの？」
美鈴の眼鏡が、氷のように冷たく見える。
優三は、拳を握った。
「・・・わかっているわよ。でも私はいつも、例外を願っているだけ。」
「例外？ありえないわね。」
美鈴は、優三を嘲笑した。
「・・さあ、オーナーが戻るまで、少し待たせて欲しいのだけど。」
「あの人は今、どこにいるの？」
「もちろん仕事よ。二葉のことは、頼まれて私がすべて一人でやっていることですもの。」
優三は、美鈴をリビングに入れた。とにかく、ここで足止めしておくしかない。もうこれ以上、二葉に関わってほしくない。いつかは、二葉は研究所に再び連れ戻されるのだろう。だが、せめて自分の眼の届く所にいる間は、平穏に過ごさせてやりたい。
優三はピーチフレーバーの紅茶を淹れ、美鈴に差し出した。
カップをそっと口に運ぶ美鈴に、優三は言った。
「あなたは、本当に真崎潤一（オーナー）に対して従順よね。」
美鈴は、カップを唇から放さずに、優三を一瞥した。
「・・・当たり前でしょう。オーナーがいなければ、研究所はなくなるのよ。」
「なくなったって、構わないでしょう？あなたは、医者として十分に食べていけるのだから。」

すると、美鈴は鼻の先で笑った。
「そんな人生、私はいらないわ。研究して、自らの手で新しい成果を生み出すことができる喜びは、優三には絶対にわからないでしょうね。」
「違法な研究だから言っているのよ。そうでなければ、私は何も文句はないわ。」
「違法・・・ね。そんなもの気にしていたら、新しい発見なんて生まれるわけないじゃない。」
「え・・・？」
「世界を驚かせている研究発表を見てみなさい。違法だったり、倫理に触れるものばかりじゃないの。でも、それが次の進化の糧になることは確かなのよ。法律だの倫理だの、そんなもの怖れていたら人類の発展はありえないわね。」
優三は、訊いた。
「美鈴さん、あなたの言う『人類の発展』とは、何？」
「もちろん、価値ある人間を自在に作り出せる能力を生み出すことよ。そして、価値ある人間を後世の科学の研究のために生きたまま保存することを可能にすること。私達は、それを必ず実現するわ。遠くない未来でね。」
得意げな美鈴に、優三は侮蔑の眼差しを向けた。
「くだらないわね。」
「・・なんですって？」
「価値のある人間って、何よ。知能指数が高くて、運動神経が良くて、顔もよければいいってこと？大体、遺伝子操作して生まれた私達を『道具』扱いしているくせに、価値ある『人間』だなんて、よく言えたものだわ。」
美鈴も、負けてはいない。
「生憎（あいにく）、優三も二葉も完璧ではないから、『道具』止まりなだけなのよ。」
「どこが完璧でないというの？私も、二葉も、ヒトとして必要な肉

体的要素は満たしているはずよ。」
「そんなもの、自然に作れるじゃないの。私達はね、自然を超越した人間を作り出したいの。優三、あなたは確かにこの世のものとは思えないほど美しいわ。オーナーを満足させられるだけの美貌を備えて生まれた。でも、その性格・・・。持ち主に従順でない所が最大の失敗原因ね。」
「性格・・・？そんなもの、育った環境によるものよ。失敗というなら、私を調教できなかった真崎潤一こそが、要因なのではなくって？」
「もって生まれた性質ってものがあるのよ。・・・氏か育ちか。実際、あなた自身はどう？育ての親に似ている？それとも、見ず知らずの精子と卵子の提供者に似ているかしら？」
優三は、美鈴を睨みつけた。
「見ず知らずの人間はともかくとして、私は、誰にも似ていないわ。」
「そんなこと、ありえない。」
「いいえ！私の性格は、私の３７年の生活が作り出した、私だけのものよ。誰にも似ていないし、誰かに依存もしない。誰のものでもない、誰にも変えられない、私自身の個の性格だわ。」
美鈴は、静かに首を振った。
「優三は、実の血の繋がりを知らないから、そんなことを言うのよ。私は、年々父にそっくりになってくるのを実感している。自分ではそんなつもりないのに、モノの言い方や、ちょっとした仕草、特に理性を失ったときの自分は、まぎれもなく父そのものなのよ。・・遺伝よ。そしてそれは、私や兄の手によってなら、根本から変えられるものだわ。」
「馬鹿馬鹿しい。その論理によれば、人類皆、同じ性格にできるということじゃないの。穏やかで、争いを憎み、殺人や賭け事なんて縁のない世界を作り上げられるとでもいうの？ありえないわね。」
「ええ。私達が作るのは世界のほんの一握りだもの。でも、その一

握りが世界を牛耳ればいいのよ。」
優三は、身を乗り出して反論した。
「あなたたちは、一体何をしたいの？神にでもなろうというの！？」
「いいえ、神なんて実体の無いモノにはできないことを、実現するのよ。」
「必要ないわ！この世界には、もっと他に必要なものがあるでしょう？」
「貧困層を救えとでもいうの？それこそ偽善よ。世の中は弱肉強食だから成り立っているの。太古の昔からそうだった。皆が皆、平等に救われるなんて不可能よ。平等になったら、皆で生き残ることはできなくなる。平等に、朽ち果てるだけよ。」
「それを、可能にしてみせればいいじゃない！？」
「そんなことをして、何の得があるというの？私達は、慈善事業で研究しているわけじゃないのよ。くだらない感傷はやめてちょうだい。」
「・・・あなたの得になんか、ならないくせに。」
「！？」
優三は、立ち上がった。
「あなたの得にはならないでしょう？研究所の研究成果は、すべて真崎潤一（オーナー）のものだもの。成功報酬なんて、あのケチな男がたっぷり払うはずないし。それなのに、なぜあなたは人生をすべて投げ打って研究を続けるの？そんなに・・・そんなに、」
「言わないで！」
美鈴が、叫んだ。
その勢いで、空のティーカップが大理石の床で砕け散った。
美鈴の必死の形相に、優三は口をつぐんだ。
美鈴は、言った。
「これ以上の問答はやめましょう。愚にもつかないわ。ただの・・・空論よ。」
うつむいて陰になった美鈴の表情を、優三が窺うことはできなか

った。
だが、どうしてあの場で美鈴が優三の言葉を遮ったのか、優三には十分わかっていた。
この会話は、優三のピアスを通して、すべて潤一に聞かれている。二人とも、それを確信しながら話をしていた。その中で美鈴は、優三のセリフの続きを、絶対に潤一には聞かれたくなかったのだ。
優三は、小さな声で言った。
「私達は、立場が逆だったら・・・幸せだったかもしれないのに。」
すると、美鈴は嘲笑した。
「ありえないことよ。・・・優三以上の失敗作である、私では。」
「でもあの人は、美鈴さんを道具呼ばわりはしないじゃないの。」
「それは、私が試料にさえならないからよ。遺伝子操作なんて呼べる代物ではなく、単純な人工授精で産まれた、ただの人間にすぎないからよ。」
「実験が失敗しすぎれば『人間』扱いだなんて、滑稽だわ。」
「それが、私達の世界なのよ。・・・面白いことにね。」
やがて潤一が帰宅し、優三はその場から追いやられた。
二人が何を話しているのか。知りたい気持ちはあるが、知ったところで胸が悪くなるだけだろう。
その夜遅くに、美鈴は研究所に帰っていった。
優三は、眠り続ける二葉の部屋の窓から、車の明かりを見送った。
美鈴が、なぜ潤一には絶対従順なのか。
それを知っているから、優三は美鈴を憎みきれない。そして潤一を、地獄に葬り去ることもできない。
（私だけが苦しんでいるのではない。それはわかっている。遠野研究所・・・！あの研究所さえなくなれば、みんなが、呪縛から解き放たれるのに。）

第7話

美鈴が拉致を実行したのは、１２月半ば。
街中がクリスマスムードに溢れ、話題全てが年末へと向かっている最中だった。
通常は麻酔で眠らせ、そのまま実験を行うのだが、今回は少し勝手が違っていた。
「目を覚ましたら、やれ。」
それが、潤一からの指令だった。
「この少女を刻めと言ったのは、優三だ。めずらしいだろう？だから、そのリクエストにきっちり応えてやってくれ。なに、他人を傷つけることを厭わない子なんだから、自分が痛めつけられても文句は言えまい？」
美鈴はメスを握り締めながら、固唾を呑んだ。いくら美鈴でも、意識のある人間に手をつけたことはない。だが、潤一の命令ならば従うしかないのだ。
美鈴は、覚悟を決めた。
少女は、猿轡をはめられたまま、目に涙を一杯溜めて美鈴を見ていた。
まるで、「助けてくれ」と懇願するように。
「・・・残念ね。でも、二葉をリンチしようと誘ったくらいだもの。それなりに肝は据わっているんでしょう？」
少女は、必死に首をふった。だが、美鈴は容赦ない。
「大丈夫。二葉が味わった痛みより、ほんの少し痛いくらいだから。私の腕は確かよ。ちゃんと綺麗に皮を剥いであげる。手早く、破らないようにね。」
メスの銀色の光の向こうで、声にならない悲鳴が静寂を切り裂いた。

美鈴が潤一と初めて会ったのは、１０歳のときだった。
１３歳の潤一は、父親に連れられて研究所にやってきた。近い将来、自分のものとなる施設を見学に来たのである。
すでに自分の容姿が人並み以下であることを嫌というほど思い知っていた美鈴にとって、潤一は近寄ってはならない別人種だった。理知的な瞳に自信あふれる唇。当時１５歳であった美鈴の兄と、対等か、それ以上に堂々と渡り合っていた。
一目で惹かれたのに、それ以上は何もなかった。潤一は美鈴などまるで目に入っていなかったようだったし、それ以来、潤一が研究所を訪れることも殆どなかったからだ。それに、潤一の婚約者となるべく作られた優三のことも初めから知っていたため、余計な期待も生まれる余地はなかった。
美鈴は大学への入学を期に、都心で一人暮らしをすることになった。もしかしたら、キャンパスで潤一を見かけることができるかもしれない・・・。そんな淡い思いで、学部は違うが、潤一と同じ大学に入学した。
経済学部４年の潤一と医学部１年の美鈴。一つの町ほどある敷地内で二人がすれ違う確率は限りなく低い。だが、その毛先ほどの可能性に、美鈴は賭けたのである。
潤一は、有名人だった。真崎グループの御曹司であるだけでなく、そのずば抜けた容姿から、女子学生がいつも取り巻いていた。その集団は当然目立つ。彼らがよく現れる時間や場所を美鈴が探ることは、そう難しいことではなかった。
狙った時間を気にしながら授業を受け、終業と同時に講義室を飛び出す。それは、実技以外の授業にしか許されないことだったが、可能な限り潤一を追った。実際にすれ違えるのは１０回に一度程度で、しかも取り巻きの中央にいる潤一は一瞬しか捉えることができなかったが、美鈴には十分すぎるほど幸せだった。
秋になり、４年生は卒論以外の授業が皆無に近いため、美鈴が暗

記した「潤一出没ルート」はすべて無意味になった。こうなると、もうお手上げである。
（二度と・・・会えないのかもしれない。研究所に来ても、どうせ私には会う理由もないんだし。）
うつむいたとき不意に目頭が熱くなることがあるが、すぐに頭をあげてしまえば、それも忘れ去ってしまえた。

1月になった。
美鈴は後期試験の準備で忙しく、その日も図書館で勉強していたため、帰りは9時を回っていた。
雪が降るのではないかと思われるほど寒い中、駅までの道を急ぐ。目抜き通りにはオフィスビルや大型専門店が立ち並んでいる。夜9時とはいえ、まだ半分以上の建物に明かりが灯っており、駅に近づくほど、その明るさは増していく。
石畳の歩道がいったん途切れ、横断歩道を渡ろうというときだった。
突然、美鈴の脇に一台の高級車が止まった。だが、美鈴はそれが自分に関係するとは微塵も思っていなかった。
何事もなかったように、信号が青になったのを確認して渡ろうとしたところへ、男の声がしてきた。
「遠野美鈴さん。」
心臓がどっくんと音を立てた。
驚いてふりむくと、そこには、憧れて焦がれた男の姿があった。
信じられなかった。
潤一から名前を呼ばれたのは、初めてだと思う。
潤一は穏やかに微笑んでいた。
「僕のことは、わかるよね？ちょっと付き合わない？」
潤一は、車に乗るように親指で助手席を指した。
呆然とする美鈴の腕を、潤一は手でつかんだ。
「さあ、乗って。」

交通量が激しい大通りで、そう長い間車は停まっていられない。
美鈴が助手席で扉を閉めると同時に、車は走り出した。
通りを照らす、メタルハライドランプのオレンジ色が後ろへ飛び去っていく。その様子を瞳に映しながら、美鈴は今の状況がまだ信じられずにいた。
わからない。
潤一は一体なぜ、自分の前に現れたのか。
いや。そんな事の前に、これは本当に現実なのか？
運転席の潤一を見てしまったら夢から覚めてしまいそうで、美鈴は暫らく微動だにできなかった。
やがて車は段々と暗い通りを進むようになり、やがて、森林の中に入った。ほどなくして目の前に、大きな噴水のあるイギリス風の庭園が広がった。そして緩やかな坂の上に、旧〇〇邸といった風情の白い洋館が現れた。
停車したエントランスでは、二人の男性が礼をして待っていた。
「お待ちいたしておりました。真崎様。」
助手席のドアが男性の手で開かれ、美鈴はよろめくようにして降り立った。この高級な雰囲気に呑み込まれてしまいそうだ。
潤一が車のキーを男性に渡し、二人は館の中へと導かれた。
サンドブラスト処理されたガラスに金色のアラベスク模様の縁取りの大きな扉。その向こうには、美鈴が見たこともないような煌びやかな世界が広がっていた。
毛足の長い薔薇色の絨毯、クリスタルのシャンデリア、見るからに高価そうなアンティーク家具、花瓶、そして大理石の螺旋階段・・・。目まで金色に染まってしまいそうな豪華さに、眩暈さえ覚える。
次の瞬間。
美鈴は、ハッとして青ざめた。
「・・・どうした？」
潤一の優しい声に、美鈴は震えた。
「場違いです・・！私、こんな恰好で・・・。」

地味な紺色のコートの下は、白いシャツに黒いスラックス。ベージュのカーディガン。黒髪は後ろで一つにたばねただけ。それに、黒縁の眼鏡。だって、大学で勉強するだけなのだから、これで十分なのだ。まさか、こんなシチュエーションを与えられるとは想像だにしていなかったのだから。

すると、潤一は微笑して美鈴の手をとった。

「大丈夫。僕と一緒なら。」

ひんやりとした、骨ばった大きな手。

これが、男の手の感触なのか。

手を引かれてたどり着いた部屋は、全面ガラス張りで緩やかな円弧を描いていた。無数のろうそくの炎で照らされた室内には、いくつもの丸テーブルと椅子が整然と並んでいる。つまり、ここはレストランなのだ。しかし、客は一人もいない。

「貸切ったんだよ。これなら、人目は気にならないだろう？」

確かに、そうだ。だが、こんな隠れ家のような、一握りの上流階級の人間にしか許されないであろう空間を貸しきるだなんて。

いや、それは真崎潤一にとって不可能なことではない。

控えめにライトアップされた美しい庭も、潤一を前にしては何の情感も生み出さない。かといって、潤一を見つめることもできず、美鈴は、ただ手元を凝視していた。

「飲み物は？」

「え・・。」

「アペリティフは、何がいい？」

そんなことを突然聞かれても困る。だが、何か言わなくては潤一に恥をかかせるのではないかと思い、美鈴は上ずった声で答えた。

「あの、アルコール低いもの・・。」

「ああ、ごめん。まだ未成年だったんだよね。でも、少しぐらいなら、ね。」

潤一は、初対面のはずなのに、どうしてこんなに親しげに話しかけてくるのだろう。まるで、ずっと前からの知り合いのように。

ほどなく、美鈴の前には細長いフルートグラスが置かれた。中には炭酸の泡で浮き沈みする木苺が二つ、きれいなルビー色をしている。
「じゃあ、乾杯。」
ティン・・
グラスが重なり、二人は同時に飲み物に口をつけた。
口の中が少し潤ったところで、美鈴は思い切って話を切り出した。
「理由を・・・聞かせてください。」
「理由？」
「そうです。どんな御用か、聞かせてください。」
すると、潤一はクスリと笑った。
「用がなければ、誘ってはいけないと？」
「用がなければ、誘わないでしょう？大体・・・よくご存知でしたね。私が同じ・・・大学にいたということを。」
「それは、君が入学する前から知っていたよ。君のお父様から、聞いていたからね。」
美鈴は、唇を引き締めた。
「私は、あなたとの接触を禁じられております。それは、暗黙の了解だと思っておりました。」
「なるほど、それは賢明だね。だから僕も、今まで知らないふりを通していただろう？君が僕の通り道に何度出没したとしても。」
美鈴は、身体の隅々までカッと暑くなるのを感じた。
気付かれていたのだ。
あんなに遠くから見つめていたつもりだったのに、潤一にはすべてお見通しだったのだ。
恥ずかしい。
まさに、穴があったら入りたい気分だ。
そんな美鈴に、潤一は優しく言った。
「ごめん。意地悪な言い方だったね。」
美鈴は、うつむいたまま顔をあげることができない。

潤一は、続けた。
「君の一族は、僕にとって大事な財産なんだよ。しかも、今後の任務を背負うのは君と君のお兄さんだ。大いに期待している。」
やはり、ビジネス上のことだったのだ。
つまり、潤一は研究所の持ち主であり、美鈴は所有物の一部に過ぎない。その所有物が持ち主に対し、邪(よこしま)な気持ちを抱くなんてとんでもない・・・。そう、言いたかったのだ。
美鈴は冷静に瞳を伏せた。
「すべて、承知いたしております。私どもが真崎家に対してどのように礼を尽くすべきか。」
「・・・じゃあ、顔を上げて。楽しく食事をしてくれないかな。」
「・・・はい。」
それは、夢のようなひと時だった。
潤一がどんな思惑で美鈴を誘ったとしても、今、目の前で優しく微笑んでいる青年はまぎれもなく美鈴の長年の思い人なのだから。
食事を終え、最後のコーヒーを口にしながら、潤一は言った。
「いつ、こういう場に誘ってもいいように普段から気を配れるかい？」
「・・・すみません。普段、こんなことには縁がないもので・・・。」
「君は美人だ。思い切って、いやらしいくらい女を表現してみてごらん。きっと、世界が広がるよ。」
「それは、私の人生に必要がないことではありませんか。」
「僕の命令なら、必要がないことでもやるよね？」
「それは・・・もちろんです。」
「近いうちに、また誘うよ。そのときには、見違えるようになっていてくれ。」
上目遣いの挑戦的な目だった。それに、逆らえるわけがない。
食事の後、レストランから最も近い地下鉄の駅で、美鈴は車から降ろされた。

「じゃあ、また。」
時計は、１２時近い。だが、潤一は美鈴の帰宅しやすさなど全く気にしておらず、どちらかというと早く別れたいかのような感じだった。
（当たり前のことよ。私は彼の所有物。今日は私に釘を刺すために連れ出したというだけのことだもの。）
車の去った後の通りをぼんやりと見つめながら、美鈴は複雑な思いに苛まれていた。
思い人との夢のような時間。
裏腹な、主従関係のダメ押し。
（私を、意のままに操れるかどうか試したかったのかもしれない。）
そして、彼の言う「女を表現」すれば、さらに意のままになるということを証明することになるのだ。

潤一には、美鈴を手なずけておく必要があった。そのために美鈴の恋心を利用するなど、わけない事だった。
この先、美鈴は犯罪に手を染めていかねばならない。
どんな事にも動じず、命令に絶対服従するだけの関係を築いておかねばならない。
潤一のためなら、人殺しだろうと、罪をすべて被ることも厭わない・・・美鈴を、そういう気持ちにさせておかねばならない。
潤一は、周到だった。
その後も、２週間に一度は美鈴をさそった。
やがて潤一は大学を卒業し、真崎グループ傘下の会社に就職した。それからも、美鈴を誘い続けた。誘われるたび、美鈴は美しくなっていった。細い身体に最も似合う服を考え、都心の美容院で髪を整え、メイクをしてもらう。
ただし、二人が会うのはいつも限られた場所だった。それは、従業員などの「金と権力で手なずけておける範囲」の人間以外は一切いない場所だった。

半年も経っただろうか。
潤一は、後学のためにアメリカへ留学することになった。期間は5年間。帰国は、優三との結納にあわせた時期になる。それまでは、日本に戻らない。
出発を控えた前日。潤一はその夜、最後の仕上げに入った。
美鈴が一生、潤一のために尽くすように。
美鈴を、潤一のためなら命でも投げ打つほどの女に仕立てあげるために。
それは、美鈴にとって地獄に足を入れたのと同じことだった。
それは、絶対に踏み入れてはならない禁区だったのに。
美鈴はすべてを承知の上で、その誘惑を受け入れた。
美鈴はその夜、潤一に抱かれた。
漆黒の宇宙(そら)では、紅蓮(あか)色に染まった月が真円を描いていた。

第8話

美鈴が触れる窓ガラスは、いつも冷たい温度を含んでいる。
研究所の最上階に位置する自室から外の景色を眺めていると、なぜか過去のことばかり思い出してしまう。そしてその度に、苦い記憶を噛み締めるのだ。
潤一が美鈴と関係を持ったのは、後にも先にも、あの一度きりだった。
（つまりあの男（ひと）は、私を支配するためには一度で十分と踏んだのだ・・・。）
5年後に帰国した潤一はすぐに優三と結納を交わし、優三の大学卒業を待って結婚した。当然、結婚式にも披露宴にも遠野家が招かれることはない。ただ美鈴は、聞かされた事実だけを空想し、現実として受け止めるだけだ。
美鈴が、どれほど優三を羨んだことか。
同じ手順で同じ境遇に生まれたというのに、遺伝子操作の結果如何で、この差だ。美鈴は遠野一族の知能をそのまま継いだだけで、それ以上の成果は何もなかった。一方優三は、もととなる遺伝子以上の美貌と品格と、望まれる知性を備えた成功品。真崎潤一に納めるだけの価値を持って生まれたのである。
代々、真崎家に仕えてきた遠野一族。
これは、今後も続くのだろうか。互いの血が、引き継がれていく限り。
（この研究所は二葉が継ぐのだろうか・・・。あんな生活で、まともに勉強もさせてもらえないあの子が、研究所を継ぐことなどできるのだろうか？）
口に当てた指の関節を軽く噛みながら、美鈴は部屋の中をゆっくりと巡り歩いた。
一体、自分たちはどこへ向かって歩いているのかわからなくなる。

優三に、「何をしたいのか。」と聞かれたとき、ちゃんと答えられた。それなのに、時々自信がなくなる。
（それは、そうよ。だって私達の方向は、私達の意志で決まるものではない。真崎家の意向次第で、どんな方向へも行かざるを得ないのだから・・・。）
そんなある日、美鈴のもとへ小さな木箱が届いた。
それは、外国の研究所にスパイとして潜入している兄からだった。真崎潤一（オーナー）に命令され、二葉の命と引き換えに危険な任務についている兄。手紙一つ出せないと思っていたのに、これは一体どういうことだろう？
（まさか、兄の名前を語った爆発物とか・・・！？）
一瞬、そんな不安が美鈴の脳裏をよぎった。しかし、宛名の文字は確かに兄の筆跡だと思う。
固唾を呑み込み、美鈴はおそるおそる蓋をあけた。
明るみに出た箱の中身は、一枚の手紙と、何重もの新聞紙に包まれた小さな試験管だった。
（・・これは・・・？）
白茶けた薄っぺらな小さな紙切れには、『この液体の正体を調べておいてほしい。』とだけ書かれていた。
試験管の中には透明な液体が八分目まで入れられている。うかつに蓋をあけて臭いを嗅ぐことも、僅かな液体をこぼしてしまうことも厳禁だ。伝染病の菌だった場合、失敗したら美鈴だけでなく研究所自体が絶滅する可能性もある。
（・・・実験台があれば、手っ取り早いんだけど。）
しかし兄のいない研究所を守らねばならない立場上、半日以上留守にすることは躊躇われる。
（はやく帰ってきてほしい。私一人では、この研究所は重過ぎる。）
兄の基（もとい）だって、どちらかといえば気弱な性格だ。特に潤一と出会ってからは、いつも一歩引いて物事を傍観しているような感じさえする。

本当は、虫一匹殺せない兄。なのに、医師としての訓練を続けるうちに人間の身体を刻むことには慣れてしまった。人間を実験に用いることは殺戮ではないと、まずは脳にたたきつけ、段々と心に理解させていったのかもしれない。美鈴自身が、そうであったように。

きっと、二葉も同じなのだろう。

気が弱く、人を貶めることなどできない性格。だから今、かつての美鈴や基と同じように自分自身との葛藤に苦しんでいるのだ。

（初めから強い人間などいるわけがない。色々な状況に揉まれ、強くならなければ生きてこられないから、強くなろうと努力をしてきただけなのに。）

―　君は、強いから大丈夫だね　―

昔、何かの危機的状況下に置かれたとき、教師にそう言われたことがある。その教師は、別の場所で泣いていた女子の方へ行ったきり、戻ってこなかった。美鈴だって、怖くてたまらなかったが、ここで泣いても何も始まらないと思って必死に耐えていただけだった。誰かにすがりつきたいのを、我慢していただけだった。その我慢を、「強い」と言うのか。

（世の中には、我慢しようとしても出来ない人がいるのだろうか？そういう人が弱い人として、誰かに守ってもらえるのだろうか。）

ただ、誰にも守ってもらえない人生を歩まねばならない美鈴に選択の余地はなかった。しかし我慢できない人ほど、他人の優しさをもらえるという現実が許せなかった。弱さを隠し、強くなろうと必死に戦っている自分が可哀想になることさえあった。

（・・・ああ、そうだ・・・。）

美鈴は、潤一に陥落した決定的な理由を思い出した。

それは、潤一が美鈴を抱いた後に言った言葉。

―　君は、君のその強さを誇りにするがいい。それこそが、真崎家が遠野家を信頼する何よりの証なのだから　―

冷たくなっていく裸の肩を自分の手で温めながら、美鈴は潤一の言葉を身体の芯にまで刻みつけたのだった。

美鈴は、潤一から愛されようなどという甘い幻想は抱いていない。
ただ、潤一が美鈴の人生の支えだった。この支えなくして、美鈴はこんな人生を生きてはいられない。潤一がいるからこそ、すべて耐えられるし、すべてを呑み込めるのだ。
研究所を続けている以上、潤一との繋がりが絶たれることはない。うまくいけば、一生、潤一を見続けていることが許されるのだ。そのためなら、どんな命令にも従う。
もし潤一がいなくなったら・・・。
（私はきっと、生きていない。）
大恋愛なんて、いらない。
結婚も、子を持つことも望まない。
平穏な人生も、いらない。
潤一と出会え、一生潤一を見つめ続けていられること。それ以上の人生など、あるわけがない。
それこそが、最高の人生だ。
それこそが、美鈴の道（さだめ）。

第9話その1

集団暴行を受けた一件以来、誰の思惑でもなく、二葉は家から一歩も外へ出られなくなった。庭を散歩できても、門から一歩踏み出そうとすれば、吐き気や頭痛で立っていられなくなるのである。ただでさえ記憶を失くしている事を悩んでいたというのに、追い討ちをかけるような衝撃。優三がどんなに優しく接しても、それはもはや意味の無いことだった。

二葉とて、その状況を脱しようと必死だった。優三をこれ以上心配させたくない。そうでなくても、厄介になっている身だというのに。だが、もがけばもがくほど深みにはまって、身動きがとれなくなるのだ。

二葉は、優三に懇願した。

「お願いです。どうか、私の過去を教えてください。記憶を取り戻せば、少しは前へ進めそうな気がするんです。奥様は、何かご存知なはずでしょう?私のピアスと奥様のピアスが同じである理由を、教えてください。」

優三は、ただ首を振るしかない。無理だ。二葉に、これ以上のショックを与えることなどできない。

潤一は新しい学校への転入手続きを済ませたが、1月になっても二葉の症状は少しも好転しなかった。新しい制服を見ることさえできない。だが、潤一はそんな二葉に容赦なかった。

「言ったはずだ。この家にいる以上、主人の言うことに従うのは当然だと!」

潤一は、身体が動かない二葉を布団から引きずり出した。そして、運転手の浅井に手伝わせて二葉を車へ乗せようとした。

二葉は、抵抗するわけでもなく、嫌がって叫ぶわけでもない。ただ、恐怖に震え、吐き気を訴えるだけである。

「やめて、あなた!」

裸足のまま外へ飛び出した優三が、潤一にすがりついた。
「無理です！そんなの、見ればわかることでしょう！？」
「甘ったれるな！学校へ行くことが、この子の使命だ！それを拒否する権利などない！」
「あなたは勝手です！都合によって学校へ行くことを禁じたり、逆に強いたり！」
「当たり前だ！二葉は私の研究所の道具なのだから！」
その瞬間、骨抜きになっていたはずの二葉の身体が、ピクンと反応した。
（ケン・・・キュウジョ・・？）
この単語を、どこかで、何度も、何度も聞いた気がする。
二葉の瞳に、僅かな生気が戻った。
細い足でよろめきながらも、二葉は地に足をつけた。
「研究所・・・って、何ですか。」
潤一は、にやりとほくそ笑んだ。
「ほ・・・う。流石にこの言葉には反応するんだな。」
優三は青ざめ、唇を震わせた。今の二葉が、過去の真実を受け止めることなどできるわけがない。
しかし今回は、二葉のほうが潤一に詰め寄っていた。過去を知ることでこの精神状態から脱することができるのならば、このチャンスを逃す手はない。
二葉は潤一に言った。
「教えてください、私が何者か。どんなことを聞いても、私は驚きません。覚悟はできています。」
「言ったな？後悔しても知らんぞ。」
「後悔などしません。過去を知り、そのおぞましさに耐えられなくて発狂したとしても、絶対に後悔しません。今のこんな情けない状況で鬱々としているより、ましです！」
優三は、二葉の前に立ちはだかった。
「駄目よ！後悔するわ！知らないほうがいいのよ。そのためにあな

たの記憶は封印されているのだから！」
言ってしまってから、優三はハッとした。
今、言ってはならない事を口走ってしまった気がする。
「・・・そんな・・・ひどい過去なんですか・・・。」
二葉が震えながら訊いてきた。答えられない優三の隙を見た潤一は、二葉の腕を掴むと車に乗せた。そして、振り向きざまに言い放った。
「浅井、今日一日休め！これは、命令だ。」
「・・・はっ。」
潤一は運転席に乗り込むと、すぐに車を走らせた。使用人のいる前で、あれ以上のことは喋れない。むしろ、喋り過ぎてしまったくらいだ。
（まあ、いい。余計な事が起こりそうなら、あいつらを消すまでだ・・。）
不安気な二葉を助手席に乗せたまま、潤一は高速に乗った。
行く先はただ一つ。
約1年ぶりの、遠野遺伝子工学研究所だ。

第9話その2

潤一と二葉の突然の来訪に、美鈴は戸惑いを隠せなかった。何の連絡もなく潤一が研究所を訪れるなど、初めてのことだ。

潤一は、二葉の細い腕を掴んだまま言った。

「美鈴。二葉にセシリアを見せてやれ。」

「・・・よろしいんですか。」

「二葉が望んでいるんだよ。過去を知りたいそうだ。例え、精神を破壊しても。」

美鈴は二葉を見つめた。二葉は、美鈴を怖れていたことなど完全に忘れたように、美鈴を見つめ返してくる。

「わかりました。ご案内します。」

いくつものセキュリティゲートを潜り抜け、やがて、一つの薄暗い部屋にたどり着いた。そこは、通常なら所長である遠野基の研究室だった。しかし長時間に渡って主を失ったことで、廊下よりもひんやりとした空気をはらんでいる。だが、その隅の実験机には試験管と試薬などの実験道具が散らかっていた。それは、美鈴が着手し始めたばかりの研究の跡だった。

部屋の奥の壁の一部は、美鈴が手を触れると同時に扉の形を成し、鈍い音を立てて開かれた。それを見た瞬間、二葉の瞳が異常にギラギラし出した。

二葉は、胸の高鳴りを押さえられない。

心臓の鼓動が、喉を震わせる。

電気は点灯したが、薄暗くて中の様子がよくわからない。

目を細めたり、大きく見開いたりを繰り返すうちに段々と目が慣れてきて、やがて中の様子をはっきりと見て取れるようになった。

部屋の中央に、繭型の金属製の箱が置かれている。

潤一は二葉に言った。

「君の友達は、その箱の中だよ。」

二葉がハッとして振り返ると、潤一は言葉を続けた。
「セシリアは、その中で眠っているんだよ。」
「眠ってる・・・？」
「そうだ。１２歳の、可憐なままの姿でね。」
二葉には、潤一が言っていることが理解できなかった。
動けずにいる二葉を見た潤一は、美鈴に顎で合図した。美鈴は唇の端を一度ぎゅっと引き締めると、冷凍睡眠カプセルの上部に設けられた小さな扉を開けた。そうすると、ガラス越しにセシリアの顔を確認することができるのだ。潤一は二葉の上腕をつかむと、カプセルの脇に跪かせた。
「見ろ！そして思い出すがいい。お前の、運命を。」
二葉は箱に手をついて身体を支えながら、扉の中を覗きこんだ。
（・・・！）
青白い美少女の顔がある。
セシリアの両親からもらったチラシの写真のような生き生きとした面影はないし、目を瞑っているためにセシリアであるという確信さえ持てない。
「これが・・・セシリア・・・？」
「そうだ。３年前まで、お前の親友だった。」
「どうして、ここで眠っているんです？どうして、セシリアの両親に教えてあげないんです？あんなに探してらっしゃるのに。」
そう言いながら、二葉の脳裏に恐ろしい考えが浮かんできた。それが真実である証拠に、腕には鳥肌が立ち、背筋が寒気が走る。
潤一の顔が、不気味に歪んでいる。
二葉は、両手でカプセルに触れながら、この感触の記憶を辿り始めていた。
覚えがある。
この、骨まで凍らせるような冷たい感触。
手のひらから伝わる感触が、脳の隅々へと浸透していく。
瞳を固く閉じて、後頭部に神経を集中させる。

何かが、来る。
鈍い痛みと共に、心臓が徐々に高鳴ってくる。
遠い昔、この感触を抱きしめて、何日も何日も泣き続けたような気がする。
その様子を遠くから眺めていた美鈴は、ゆっくりと腕組みをした。これくらいで、二葉の記憶が完全に戻るとは思えない。潤一は一体、何を考えているのか。
カプセルの前で動けずにいる二葉の様子を見届けた潤一は、その場からゆっくりと離れた。　美鈴が慌てて後を追う。
「オーナー！」
潤一が、ゆっくりと振り向いた。
昔から変わらない長さの前髪が、ほんの少し揺れる。
美鈴は、潤一を見上げた。
「二葉を、どうするおつもりですか。」
「全部教えてやれ。どうせ、自力ですべてを思い出すことなどできるわけがないのだから。」
「・・・その後は？」
「もう二葉は、俺達の家に連れ戻すつもりはない。好感度を上げるための十分な役目は果たし終えたからな。あとは研究所で次の指示を待たせろ。」
「兄は・・？兄はいつ、戻れるのですか。」
「それはわからない。外国（あっち）へ出た以上、迂闊に連絡など取れない。」
美鈴は、基（もとい）から受け取った試験管の話をすべきかどうか迷った。基がどんな思いで荷を送ってきたのか全くわからないからだ。大体、何の液体なのか3日経っても殆どつかめていない。そんな状況で、潤一に何を話したらいいのか。
潤一は帰り支度をして、もう部屋から出ようとしている。
（・・・今は黙っていよう。兄の帰国を待ってからだって、遅くはないはず・・。）
と、その時だった。

「うぉあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
突然、うなり声とも叫び声ともつかぬ大声が、二人の背後から襲ってきた。
驚いて振り返ると、そこには凄まじい勢いで走ってくる二葉の姿があった。
二葉は、右手に何か光るものを手にしている。
二葉の目は、確実に潤一を捉えている。
一体どういうことか？
二葉の失くした過去の記憶に、潤一はいないはずだ。記憶を取り戻したら、真っ先に襲いたいのは美鈴のはずだろうに。
潤一は二葉を睨みつけ、動かない。
美鈴は、潤一の方に駆け寄った。潤一は強い。だが、万が一にも傷つけてはならない存在だ。美鈴の個人的な想いとは、別の次元で！
「二葉！」
だが、美鈴の制止の声など二葉にはまったく届かない。美鈴よりも速く、そのまま潤一の懐へと突進していく。
「うあぁぁ！」
二葉が目一杯振り翳した腕を、潤一は軽くかわした。
が、空振りした二葉の腕が再び反動をつけて持ち上がったその時。
「くっ・・・！」
潤一の端正な顔が歪んだ。
刃先が潤一の手の甲を少しだけかすめたのである。
しかし、そんなことぐらいで潤一はビクともしない。すぐに左足で二葉の腹に膝打ちを食らわせた。
「ぐっ・・。」
一瞬だけ目を見開いた二葉だが、次の瞬間に床に崩れた。
美鈴は潤一の手に視線をやった。ほんの少し血が滲んで、赤い糸のような筋ができている。
「消毒します。」
「いや、いい。大した事はない。」

「でも、何かあったら困ります。」
「・・・そうだな。じゃあ、頼む。」
美鈴はすぐに、研究所でも最も強い消毒薬をもってきて、脱脂綿で丁寧に傷口を拭った。
床に転がった二葉を見下ろし、潤一は言った。
「記憶が戻って、また精神でもやられたなら、今度こそ処分しろ。君の権限でかまわない。それが、俺の命令だ。」
「わかりました。」
潤一はそのまま車に乗り、研究所を後にした。
美鈴は再び研究室に戻り、目を覚ます気配のない二葉の脇で立ち止まった。
よく見ると、二葉はまだ右手に刃物を握っている。
美鈴は腰をかがめて、二葉の手から刃物をもぎとった。
それは、小さなメスだった。
（・・これは・・！）
その瞬間、美鈴の顔が一気に青ざめ、次の瞬間に体中の血が全身を駆け巡った。
慌てて、試験管や試薬が散らかった実験机にかけよる。
そこには、あったはずのメスが一本なくなっていた。
美鈴は、思わず手で口を押さえた。
恐怖で、涙がこぼれそうになる。
（いいえ、そんなはずはない。探すのよ。落ち着いて、よく探さなきゃ。）
美鈴は机の上にある物を端に寄せたり、本の間をめくってみたり、机の下を覗いたりしてメスを探した。だが、やはり見当たらない。
二葉が持っていたメスが、実験に使用していたメスだったのだ。
どうしてさっき、気付かなかったのか？
潤一を傷つけたメスが、謎の液体の研究に使用していたメスだったということに！！
もし、危険な伝染病のウィルスを含んだ液体だったら？

生物兵器として開発された新種の細菌だったら？
その可能性が、こんなにも高いというのに！
美鈴は床に転がる二葉の襟首をつかむと、気を失っている頬を力任せに叩いた。
「あんたなんか、はやく殺しておくべきだった！お兄様が危険に曝されることなんかまったくなかったのに！生きてたって、あんたなんか何の役にも立たないくせに！」
何度も何度も叩きつけ、その間に一回くらいは正気に戻ったのかもしれないが、またすぐに気を失い、二葉は顔を腫らしたまま床に転がされた。
美鈴はインターホンで研究所員の一人を呼び出した。
「二葉を３３０号室に放り込んでおきなさい。私の命令が下るまで、死なない程度に生かしておいて。」
研究所員が二葉を連れ去ると、美鈴は電話に向かった。
呼び出し音が鳴る間、何度も唾を飲み込んだが、全然口の中が潤わない。粘膜で喉がひっついてしまいそうだ。
潤一はまだ運転中のため、携帯には出られない。美鈴は伝言を残した。
「ご自宅にお帰りになったら、先ほどの傷口をもう一度消毒してください。もし、少しでも熱が出たり、異常を感じた場合はすぐにお知らせください。必ず、知らせてください。」
受話器を置いた美鈴は、溢れそうになる涙をグッと堪えて、上を向いた。
一刻も早く、あの液体の正体を掴まねばならない。
そして最悪の事態が起きないように、備えておかねばならない。
こうして、美鈴の戦いが始まった。

第１０話その１

美鈴は研究所員に命じ、必要と思われる物品や薬品の購入を急がせた。

検査そのものも研究所員に手伝わせたい所だが、どんな種類の伝染性を持つとも限らないため、データ解析のみ頼ることにした。

どんなに祈ったって、最悪の事態は、起こる時には起こる。だったら、それに備えておくことの方が賢明だ。

所長専用の研究室の一角の無菌室で、美鈴は一人で組織培養によるウィルスの分離に取り掛かった。

この研究室に他人を入れるつもりが毛頭なかったことから生じた、油断による災難だ。ただひたすら、自分自身を責めるしかない。我を忘れた二葉がメスを手に取れるような状況を生み出したのも、自分だ。その責任を取るために、寝る間を惜しみ、実験机に向かう。

指先が冷たくなっても、手が小刻みに震えても、やめられはしない。

徹夜が2日ほど続いた時、研究所員の一人から内線で連絡が入った。

『お知らせしたいことがあります。伺ってもよろしいでしょうか。』

「いいえ、私のほうからそっちへ行くわ。」

立ち上がると、頭の中がぐらりと揺れたような感覚におそわれた。思わず目を閉じてしまったが、そうするとそのまま眠ってしまいそうだ。

美鈴は眼鏡をはずすと眉間を指先で押さえ、拳をぎゅっと握りなおした。

所長室から他の研究員達のいる研究室へ行くためには、５つのセキュリティゲートを通り、迷路のように複雑な道のりを、どんなに慣れても3分以上はかかって歩かねばならない。美鈴にとって最も足が疲れない５ｃｍヒールの踵が、今は地面に埋まりそうなほどに

重い。
やっとの思いで研究室に着くと、所員たちが美鈴の下に集まってきた。
「主任、これを。」
出された書類に素早く目を走らせた。
「あんなに色々なプライマーを用いたのに、ＰＣＲ検査の結果はすべて陰性だったのね。」
「はい。そこで提案なのですが、私達にも検査を手伝わせて下さいませんか。」
美鈴は、首を振った。
「いいえ。それは危険すぎるわ。」
「主任は、ウィルスの正体を掴むことを急いでますよね？でしたら、」
「急いでいるわ。でも万が一あなたたちに感染したら、それこそ一大事よ。所長のいない今、そんな無謀なことはできないわ。」
研究員８名の顔を一人ひとり見渡し、美鈴は頷いた。
「ありがとう。気持ちは本当に嬉しい。もし本当に行き詰ったら・・・お願いするわ。でも、今はできるだけ被害を最小にとどめておきたいの。」
「主任は相当お疲れのようです。少しは睡眠をとりませんと。」
「そうね。転寝して液体をばらまきでもしたら、それこそ取り返しがつかないものね。」
美鈴は、微笑んで見せることで研究員たちを安心させ、無菌室に戻った。
リクライニングのついた椅子に身体を投げ出し、瞳を閉じた。
（オーナーが感染していないことを、祈るしかない。でも、でも・・・。）
考える間もなく、美鈴は深い眠りについていた。
そのとき見た夢を、美鈴は覚えていない。
だが、今の美鈴に、見る夢など必要ない。

あと少しすれば、嫌になるほどの悪夢を見なければならないのだから。

美鈴からの留守電を聞いて以来、真崎潤一は手の甲の傷に十分な注意を払っていた。

薄い唇を指先でなぞりながら、潤一は傷口の行く末を毎日眺めていた。

傷は浅かったためか、3日後には完全になくなった。

潤一は安堵の息をついた。

ところが。

その3日後、突然傷口が再び痛みだした。

見た目は、何もない。だが、皮膚の奥深くが疼くのだ。

（一体どういうことだ・・・？）

眉をひそめて、再び手の甲を睨みつける。傷口の跡も、何も見えない。気のせいかもしれない、と、そのままにしておくことにした。

次の朝。

（これは・・・！）

目覚めた瞬間、潤一はさすがに身の毛がよだった。

傷口が、もとに戻っている。

うっすらと浮かんだ一筋の血。

潤一は慌てて手を流水にさらした。

血はすぐに洗い流され、しかし、またすぐに浮き出してくる。

１０分経過しても、状況は変わらない。

潤一は傷口を清潔な包帯できつく縛り上げ、携帯を手に取った。

美鈴の伝言どおり、すぐに報告せねばならない。

潤一からの一本の電話は、検査の出口が一向に見えなくて焦っていた美鈴を、恐怖で振る上がらせるのに十分だった。

潤一から話を聞いた美鈴は、目の前が真っ暗になるのを感じていた。

すぐ、手を打たねばならない。

「今日中に、研究所にいらっしゃれますか？」
『それは無理だ。３日待ってくれないか。そしたら仕事に蹴りをつける。』
「・・・一般の病院に行ってください。この際、止むを得ません。」
『あのメスは、実験に使っていたものだろう？一体、なんだったんだ？』
「正体がわからないウィルスで・・・正体を探っている最中だったんです。」
『では、病院になど行けない。遠野研究所との繋がりが、どこでどう暴かれるかわからないからな。』
美鈴は、顎をぐっと持ち上げた。
「では、３日後にお待ちしています。私達も全力を尽くします。」
『・・・頼む。』
電話を切ると、知らず知らずのうちに、美鈴の瞳から大粒の涙がこぼれた。
最も怖れていたことが現実になってしまったのだ。
（あの人にもしものことがあったら、私は・・・！）
美鈴は拳を何度もぎゅっと握りなおし、奥歯を噛んで必死で涙を止めた。泣いてたって、何も始まらない。帰らぬ兄を待つことも、意味の無いことだ。
（落ち着いて・・・。落ち着くのよ。できる。絶対に、できるはず・・！）
美鈴は唇を噛むと、呼吸を整えて研究員達の部屋へ内線電話をかけた。
「集まって頂戴。あなた達にお願いせざるを得ない状況になったわ・・。」

第１０話その２

美鈴の招集からぴったり5分後。
会議室に全研究員が集合した。
美鈴は真崎潤一の傷の経過と、今まで把握したウィルスの特徴をデータとスライドで説明した。
「現在、ヒト、動物、細菌細胞への感染状況を観察中。分解と増殖は今のところ緩やか。ただし、複製のための酵素を自ら持ち込むタイプよ。」
すると、研究員の一人がちょっと考えながら言った。
「オーナーが怪我をしたとき、実験台上のメスは一本でしたか。」
「ええ。それ以上は机上に出していないわ。」
「じゃあ、そのメスで二葉も傷を負ってますよ。」
美鈴は驚いて、思わず立ち上がった。
「何ですって？」
研究員は落ち着いた表情で、美鈴を見上げた。
「オーナーを傷つけた反動かどうかはわかりませんが、確かに、親指から少し血がでていました。」
「・・・その後、二葉を見た？」
「死なせない程度に生かしておけという命令でしたから、毎日、私は会っています。傷は小さかったので、2日後には殆どなおっていました。今日も会いましたが、再び傷が浮き出るようなことはありません。」
「間違いない？あなたの思い過ごしとか・・。」
「とんでもない。二葉は試料です。きちんと観察記録をつけています。間違いありません。」
美鈴は、1分ほど考え込むと、一気に命令を下した。
「研究はすべて所長の研究室と、隣接する無菌室で行います。セキュリティレベルを最高位まで上げて、Ａブロックからの出入は禁止。

くれぐれも慎重に、頼みます。この研究所存続のためにも、オーナーを絶対に救わなければ。」
研究員達が動き出すと、美鈴は一人、二葉が閉じ込められている３３０号室へと向かった。
鉄の扉は引き戸になっている。
開けると、錆くさい臭いが美鈴の鼻をついた。
二葉は眠っているのか、呆然としているのか、死んでいるのかわからないような表情で灰色の壁にもたれていた。
美鈴は二葉の脇に跪くと、親指を見た。
記録によれば、右手の親指の第一関節に斜めの傷があったという。今は、研究員が言ったとおり、見た目は何もない。美鈴は試しに、二葉の親指を強く圧迫してみた。
痛みは感じないのか、二葉の身体はビクとも動かない。
「ここ、痛みを感じない？」
美鈴の声を聞いても、二葉は虚ろな目のままぼんやりとしている。
美鈴は業を煮やして二葉の頬をたたいた。
「しっかりしてよ！痛いか、痛くないか、はっきりして！」
しかし、二葉の様子は変わらない。仕方なく、他の研究員を呼び出した。
「二葉の採血、それから細胞組織の検出。分析データを急いで出して頂戴。」
「はい。」
潤一が感染していても二葉が感染していなければ、何かの手掛かりが掴めるはずだ。
（こんな時くらい、役に立ってもらわないと・・・。）
と、そのときだった。
「主任！早く来てください！」
別の研究所員が駆けつけた。
「どうしたの？」
「ウィルスのヒト細胞への反応が顕著に！」

美鈴は研究所員とともに、研究室へと走った。
電子顕微鏡の周りに、皆が集まっている。
美鈴が来ると、所員は数枚のデジタル画像を提示した。
「ヒトのリンパ球にウィルス感染させた試験管内から採取した様子です。新しい細胞株に変異しています。しかも、頻繁に形が変わるんです。」
「頻繁に？」
「はい。１時間ペースで、遺伝子組み換えが行われています。」
美鈴は、額に浮かんだ汗を拭った。
自分の手には負えない。
そう思ったが、立ち止まるには早すぎる。
「１時間ごとのウィルスの構造を出してちょうだい。それから、ヒトの他の部位のウィルス状況と比較して。もう少ししたら二葉の細胞があがってくるはずだから、それをすぐに検査にまわして。」
美鈴は時計を見た。
今が午前１１時なのか、午後１１時なのかさえわからない。
誰かに助けてほしいと思った。
だが、誰もいない。
研究所員達はあくまでも研究所の手先であり、協力以上のものは求められない。
美鈴は、今までどれほど兄に依存していたか、つくづく思い知らされた。
兄がいなければ、何もできない無力な人間だったのだ。
情けない。
もし潤一を救うことができなかったら、自分は生きていられない。
感覚の鈍くなった身体に鞭打って、美鈴は再び顕微鏡に向かった。

次の朝。
美鈴は、再び潤一からの電話を受けた。
「様子はどうです？」

『血は止まった。だが、傷口が少し化膿している。』
美鈴は、震える唇で言った。
「これ以上、放って置けません。どうか医者へ。オーナーの会社の医務室の医師でもいいから、医者にかかってください！」
『ウィルスの正体はわかったのか？』
「・・・いいえ。」
『ならば、普通の医者へかかったってどうにもならないだろう。』
「では衛生研究所でも、感染症研究所でもかまいません。」
『君がつかめないウィルスの正体を、公の研究所の奴らが容易く割り出せるとは思えない。大体、感染ルートをしつこく尋ねられて面倒なだけだ。』
美鈴は、首を振った。
「もう、手段は選べません。抗血清ができるかどうかも、効くかどうかもわからないんです。本当に、もしかしたら死んでしまうかもしれないんです。・・・お願いです。」
だが、潤一は迷わずに答えた。
『公の機関で命を救われても、遠野研究所のことが明るみに出れば俺は犯罪者だ。家名にも傷がつく。そんなことはできない。』
「ご自分の命を何だと思っていらっしゃるんです？名誉とか、家名とか、そんなものと引き換えになさらないでください！」
すると潤一は、ため息混じりに言った。
『・・・だから。だから俺は、遠野研究所に命を預ける。俺の研究所だ。俺の命くらい救ってもらわなければ、割に合わない。』
美鈴は受話器を握り締めた。
生涯ただ一人愛した相手から命を委ねられることは、幸せなことだ。だが、それは「救える」という前提での話だ。今は、救えない可能性のほうが高い。
「兄が・・・兄がいれば、可能性はあります。でも・・・。」
『そんな、泣きそうな声を出さないでくれないか。本当に、終わりのような気になる。』

潤一の声は、いつになく優しかった。それは、美鈴を奮い立たせるための計算だったのかもしれない。だが美鈴にとっては、この上なく切ないことだった。
指を胸の前で組んで、祈った。
この一件が、大事にならずに済むように、と。
だが、美鈴はその時、自分に問いかけた。
自分は一体、誰に祈っているのか。
神か？
仏か？
（違う。私は・・・。）
美鈴は、不意に思い出した。
優三から「あなた達は、神にでもなろうというのか」と問われたときに、答えた言葉を。
―　私は、神なんて実体のないモノには決してできないことを、実現するのよ　―
（そうよ。私は、偶像崇拝なんて愚かだと思っている。神なんていない。そんなものに、期待なんかしない。それなのに・・。）
では、今、美鈴は何に対して祈っていたのか？
「潤一が新種のウィルスに感染していないように」と、誰に祈ればいいのか。
（そうよ。祈る相手なんかいない。起こってしまった問題は、自分で解決する努力をするまでよ。）
今までもずっと、知らぬ間に祈っていたことはある。だが、それはいつも、無意味だった。
（そう。もう私は、何があっても祈ったりしない。私は、私を信じるだけ。信じて、実行することこそ、一番、いつも、私を救っていたはず！）
美鈴は白衣を翻して研究員達のもとへ走った。
「遺伝子構造の解析は？」
「まだです。」

「ＤＮＡの塩基配列の解読は？」
「全力を尽くしていますが、無理です。時間が必要です。」
「どんな手掛かりでもいい。何か気付いたら、すぐに教えて。」
空気が、ギリギリまで張りつめている。
美鈴の神経も、ちょっとした衝撃で切れてしまいそうだ。
だが、こんな時こそ冷静さを保たねばならない。
「電子顕微鏡での観察を続けて。とにかく、検査を急いで進めて頂戴。」
美鈴は、伸びすぎた前髪をかきあげた。
（早々に目途をつけなければ。もし本当にオーナーが感染していた場合、他の研究員にどう感染するかわからないのだから。そんなことだけは、絶対に避けなければならない。それが研究所の責任者としての務めだもの・・・！）

第１０話その３

それは、金曜日の深夜だった。
間もなく１２時をまわろうかという時間に、真崎潤一は玄関に立った。
使用人はすでに眠っている。そんな中、優三だけが潤一の様子に気付いた。
「こんな時間に、どちらへ・・？」
振り向いた潤一は、めずらしくネクタイをせず、白いワイシャツに紺のジャケットを羽織っただけのラフな恰好だった。
潤一は靴を履き終えると、言った。
「月曜の朝は、直接会社へ行くつもりだ。それまでに、使用人を全員解雇しておいてくれ。」
「！・・・どういうこと？新しい使用人を雇うの？」
「違う。しばらく、使用人無しで生活することになると思う。俺の名を使って、紹介状を書いて渡してやれ。あと、退職金代わりの小切手を。サインはしてある。リビングの机の上においておいた。好きな金額を書いて渡せ。」
優三は、潤一の突然の言葉に驚いた。いったい、何を考えているのか。
不気味、というより、胸いっぱいの不安を煽り立てる。
「こんな時間に、どこへ行くの？二葉を研究所に連れ戻して以来、あなたは毎日追い立てられるように仕事をしてた。その上、今度は留守にする上、使用人を解雇しろ、だなんて！」
「そんなこと、説明する義理はない。」
潤一は背を向け、そのまま出ていった。
重たい玄関扉の閉まる音が、優三の背骨に響いた。
（一体、何が起こっているというの・・・？）
今まで、使用人をすべて解雇しろなどということはなかった。そ

れに、解雇するときは紹介状はおろか、退職金なんて微々たる額しか渡したことがない。その潤一が今回は、優三に好きな額を書いていいと言う。
絶対、尋常でない。潤一の身に、何かが起こっているはずだ。
（もしかして、警察の捜査にでも遭うというの・・・？）
潤一が捕まれば、優三も疑われるだろう。そして、研究所のことも。
（そしたら私は、解放されるのだろうか。それとも・・・・）

研究所を訪れた潤一は、見た目は、以前と何も変わらない。
ただ、傷口に包帯を巻いているだけだ。
出迎えた美鈴は、すぐに特別な部屋へ潤一を案内した。
バイオハザードのマークが掲示された扉の向こう側。それがＡブロック　―　防護服を着用した関係者以外の出入りを厳禁とした、特定エリアである。
ベッドに寝かされた潤一は、麻酔の注射を受けながら言った。
「月曜の朝には、社へ戻りたい。」
「・・・わかりました。全力を尽くします。」
もし、このまま潤一が二度と目を覚ますことがなかったら・・・？
そんな不安が一瞬、美鈴の脳裏をかすめた。が、躊躇う暇はない。
潤一の麻酔が完全に効くのを待って、美鈴は生涯最大ともいえる試練にメスを入れた。

日曜日の朝が訪れた。
無菌室にこもりっきりで、必要最小限の研究員とともに緻密な作業が続く。
潤一の検体から、病原体診断として新種ウィルスの遺伝子検出と培養細胞による新種ウィルスの分離を行う。
研究員の一人が美鈴の隣に立った。
「主任。私がウィルス分離検査にまわります。」

「細胞変性効果を観察して。陰性でも、あとで培養上清をＰＣＲにかけてウイルス遺伝子の
検出の有無を確認して。」
「ですが主任。『あとで』とは、一体どれくらい？」
「・・・今はわからないわ。」
ウィルスによる身体への影響が特定できない上、潜伏期間が不明のため、いつ、どう動き出すかわからない。
ただ、潤一の傷口は徐々に悪化していることだけは確かだ。二葉には、傷が再び浮かび上がるなんて様子は微塵もないのに。
「主任。二葉の血液と髄液の分析と遺伝子解析の結果です。」
「オーナーの方は？」
「すみません、もう少しかかります。」
「オーナーは、あと２４時間しかここにいられないのよ！？もう少し危機感を持ってよ！」
美鈴は持っていたデータ用紙の束を、机に叩きつけていた。
誰の顔にも、疲労の色が滲み出ている。そんなことは、わかっているのに。
研究員は深く頭を下げ、去っていった。
次の瞬間、美鈴の膝がガクンと崩れた。
目の前の景色が歪んでいる。
（・・・こんな大事なときに、私は・・・。）
眼鏡の奥から、涙が溢れてきた。
疲れているのか。
自分に、絶望しているのか。
所長である兄が開発した検査法は、既存のものとは比較にならないほど優秀だったはずだ。だが、それら全てを試しても反応が見られない。兄が改良に改良を重ね、他国の研究所で作られた人工ウィルスのデータにも対応した解析プログラムでも、手に負えない。
（だからお兄様は、このウィルスに興味を持ったのだろうか。新しいデータになると思って、危険を承知で送ってきたに違いない。そ

れをばら撒いたのは、私。私の失態だわ・・！）
と、その時だった。
「主任！来てください！」
一人の研究員に呼ばれ、美鈴ははじかれたように走り出した。
たどり着いたのは、潤一のベッドだった。
潤一の額の汗を見た美鈴の全身は、凍りついた。
発熱だ。
手術用の半透明の手袋をした手で、潤一の頬から顎、首にかけて、軽く押しながら感触を確かめる。
「リンパが腫れている・・。この熱は、いつから？」
「1時間前に検温に来たときは、平熱でした。」
美鈴はハッとして、研究員に尋ねた。
「二葉は？二葉の様子は誰が見ているの？」
「これから私が行く予定です。1時間前は、やはり平熱でした。」
「いい、私が直接行くわ。あなたはすぐにオーナーの処置を！それからX線写真を撮って。ああ、その前に血液採取。リンパと血小板数を出して頂戴。もし咳が出始めたら、すぐに知らせて！」
美鈴は二葉の部屋の扉を破らんばかりに開けると、眠っている二葉の上半身を起こした。
額に手をやるが、熱はない。
（二葉からもウィルスは検出されているはずなのに症状が起こらない・・・。でも二葉は遺伝子操作されているから、純粋なヒトであるオーナーとは違う。参考にはならない。万が一、二葉に生まれつき抗体があるのだとすれば・・・。）
美鈴は潤一のところに戻った。
看病に当たっている研究員は、体温の結果を美鈴に見せた。
「37度5分からは、上昇していません。」
「・・血圧は？」
「若干低下しています。」
「発疹などは？」

「今のところ、見られません。」
「胸部X線は？」
「異常はありません。」
「あとでもう一度撮ってもらうわ。とにかく油断は禁物よ。変化があれば、すぐに知らせて。」
「はい。」
ひっつきそうなほどに乾いた喉で、美鈴は高鳴る心臓を押さえ込もうと必死に深呼吸をした。
（一刻も早く手掛かりがほしい。そうでなければ、どうすればいいかわからない。）
同定できないまま、月曜の朝になった。
潤一の熱は下がらないが、他の症状は見られない。
目を覚ました潤一に、美鈴は言った。
「申し訳ありません。まだ手の打ちようがありません。ですが、感染は・・確実と思われます。このままここに、お残り下さい。」
「それは、無理だ。」
潤一は身体を起こした。美鈴は、慌ててそれを止めた。
「駄目です！感染経路が特定できません。オーナーを研究所から出すことは、研究者として絶対にできません！」
「このままここで死ねないんだよ。俺は色々なものに対して責任を負っている。あの3日では、1週間程度の穴埋めをしてきたにすぎない。・・・万が一に備えて、すべてを片付けたい。」
「感染を広げるわけにはいきません。」
「そんなことはわかっている。もう、会社へは行けない。だが、家へは帰ってもいいだろう。使用人はすでに解雇してある。接触するのは、優三だけだ。家でなら、すべての片を付けることができる。」
「・・・しかし・・・。」
「優三なら、感染してもかまわないだろう。次に俺がここへ戻るときは、優三も連れてくる。あれは、俺の所有物だからな。俺の見えないところで生きていくことは、許さない。」

美鈴は、唇をギュッと引き締めた。
「何日、お望みですか。」
「3日だ。」
「そんなにですか？駄目です。すでに発熱していて、潜伏期間はすぎています。この後どうなるか・・・。」
「だが、これ以上の症状が現れることなく終わる可能性だってあるはずだ。」
「それはそうですが・・・！」
「どうせウィルスが特定できない以上、処置もできないんだろう？なら、どこにいても同じだ。」
「研究所にいてくだされば、一刻も早く手を打つことはできます。」
「・・・責任があるんだよ。上に立つものとしてのな。」
美鈴と潤一の視線が、激しくぶつかった。潤一の気持ちもわかる。第一、助けられる見込みもない、こんな状態では・・・。
やがて、美鈴は頷いた。
「わかりました。ただし、私が運転してお宅までお送りします。熱が上がって、途中で事故でも起こされては困りますので。」
「だが、今みたいな防御服で運転するのは無理だろう。」
「もちろん、脱ぎます。私自身は、感染を怖れてはいません。怖れているのは、他の研究員に感染してしまうことだけですから。」
「・・・いいのか。」
「こういう仕事です。感染を怖れていては、何もできません。それに・・・。」
（どうせあなたが死んだら、私も生きてはいられない・・・。）
だが、他の研究員達は、潤一と美鈴が狭い車の中で接触することに猛反対した。
「もし主任に万が一のことが起こったらどうするんです？誰がこのウィルスに対処するというんですか！？」
美鈴は苦しい表情で、首を振った。
「でも、何の解決策も見出せない今、オーナーをここに引き止めて

おくことはできない。ただ、死を待てとは言えないのよ。」
「では、私が邸宅まで送ります！それなら、よろしいでしょう？」
美鈴より若い研究員の申し出を、美鈴は優しく断った。
「いいえ。そんなことをしたら、それこそ所長に叱られる。私の使命は、研究員の命を守ることでもあるのだから。」
「そうおっしゃるなら、なおのこと、ここにお残り下さい！この危機を救えるのは所長が留守の今、主任しかありえないのですから！」
研究員達の言葉は、疲れた美鈴の身体に染み渡った。
美鈴だって、もう、どうしたらいいかわからない。
大体、新種のウィルスの同定には時間がかかるものなのだ。いくつかの発症事例を参考にしながら様々な検査で特定していくのが通例だ。細胞変性効果が陰性であることが判明してからの培養上清の遺伝子検出までにだって2週間は待ちたいところなのに、そんな時間さえない。
「とにかく、オーナーを送ってすぐ戻るわ。長くても往復6時間の接触よ。マスクくらいはするしね。」
「ですが主任。オーナーが家から一歩も出ないことは本当に可能ですか。それに、優三だって外に出られては困りますよ。もしかしたら優三だって既に感染しているかもしれない。そんな身体で買い物なんかに出て、空気感染で広がりでもしたら、それこそ一大事です。この研究所だけの問題ではなくなります。」
美鈴は頷いた。
「それはもちろん、注意するわ。」
「しかし・・・いくらオーナーの申し出でも、やはり賛成しかねます。主任。」
「あなたたちの意見はわかったわ。でも、行くわよ。」
「主任！」
「だって、仕方ないでしょう！？」
美鈴は、思わず叫んでいた。
「もう、あなたたちだって覚悟してるでしょう？オーナーを救えな

いかも、って！救えない確率の方がずっと高い、って！」
大声をあげた瞬間、美鈴の瞳から涙が溢れた。
「死んでしまう人間を、どうして縛り付けておけるの！？最期の願いくらい聞いてやりたいじゃない？聞いてやるしかないじゃない！オーナーが何しに戻ると思うの？すべての清算をしに戻るのよ！？」
静まり返った空間で、美鈴の涙が頬を流れる音が聞こえるようだった。
美鈴は、心底自分が情けないと思った。
自分の命よりも大事な男の命を、救うこともできない。
もう、誰も何も言わなかった。
美鈴は潤一を連れ出し、車の後部座席に乗せた。
車の窓をきっちりと閉め、美鈴は早朝の高速を走りぬけた。

第１０話その４

真昼間に堂々とこの屋敷を訪れたことは、未だかつてなかったと思う。

車を玄関に横付けすると、すぐに優三が出てきた。

美鈴は後部座席の潤一の身体をほぼ背負うような形で、家の中に入った。

優三は潤一の変わり果てた姿に絶句した。

「オーナーの寝室はどこ？」

美鈴の厳しい口調に、優三は言われるまま、玄関から遠くに位置した東向きの部屋へと案内した。

潤一はベッドに横たわると同時に、深くてだるい息を吐いた。

「書斎にベッドを用意します。それまではこちらで休んでください。」

美鈴はそう言い残し、優三を連れて廊下に出た。

「一体、何があったの？」

優三の悠長な質問が腹立たしくて、美鈴は答えもせずに自分の質問をぶつけた。

「優三、３日分の食料くらいはここにある？」

「・・・ええ。使用人達が辞める前に買いだめしておいてくれたから。」

「あなたは、身体に変化はない？」

「ないわ。」

「・・オーナーが二葉を研究所に送り届けて以来、あなたはオーナーとどれくらい接触している？」

優三は思わず眉をひそめた。

「どう答えればいいのかしら？まあ、手も触れ合っていないけど。」

「そう・・・。じゃあ、多分大丈夫ね。」

「何が言いたいの？いい加減、教えて。」

美鈴は、廊下の窓から外を凝視しながら答えた。
「オーナーは、新種のウィルスに感染してる。」
「・・・それは、研究所で？」
「そうよ。二葉がウィルスの付着したメスでオーナーを傷つけ、そこから感染したのよ！」
優三はハッとして、美鈴の腕をつかんだ。
「二葉は？二葉は今、どうなってるの？」
「生きてるわよ。忌々しいことにね。オーナーと同時に感染しているはずなのに、二葉には何の症状も出ないのよ。」
「そのウィルスは、どの程度危険なの？」
「全然検討もつかないのよ。だから優三も、この家から出ないで頂戴。」
すると優三は、失笑した。
「発信機と盗聴器に縛られた私が、自分の意思でこの家を出るなんて許されると思うの？」
「そうね。ただ、今はオーナーがあんな状態だから。逃げ出そうと思えば、逃げられるでしょ。」
優三は、背の高い美鈴を見上げた。
「逃げても自由にならないことは、私が一番よく知っているわ。私がほしいのは、真の自由だけよ。」
すると今度は、美鈴が嘲笑した。
「真の自由、ね。そんなもの、この世に存在しないわ。」
美鈴はそう言うと、潤一が身体を休めながら仕事を片付けられるよう、書斎を整えた。優三に手伝わせて簡易ベッドを運ばせ、用意してきた点滴や薬品を配置する。
美鈴は細かな指示を記したメモを優三に渡した。
「解雇した使用人に電話をかけて、身体に異常がないかすぐに確認してちょうだい。それから、二葉には効かないウィルスでも、優三には効くかもしれない。感染しないように万全を尽くして。あとは、薬、消毒、栄養、点滴、全部書いといたわ。私は3日後の夜、迎え

にくるから。そのときは優三、あなたも一緒に来るのよ。」
「・・・それは、あの人の命令？」
「ええ。研究所の所有物は、オーナーに万一のことがあったら、研究所で朽ちてもらわないと。」
優三は唇を噛んだまま、美鈴の目をまっすぐに睨みつけた。
「真崎潤一がこれで死んだとしても、それは当然の報いだわ。そんな私が、あなたの指示通り看病するとでも思うの？」
「これは所有物であるあなたへの命令よ。逆らう権利などないわ。」
「でも、あなたが研究所へ戻る以上、監視はできないわよね？命令に逆らったら、私を殺す？でも、命令を守っても研究所に連れ戻されて朽ち果てるのなら、どちらでも同じことじゃないの。」
「くだらない問答する時間はないのよ、優三。じゃあね。」
優三は、大声をあげた。
「待ちなさいよ！あなたが看病すればいいでしょう！？なんで私があんな男を助けなきゃならないの！私は、この男の死を待っていたのよ。そんな私に何を委ねるの？もはや命令なんて何の効力もないことを知りながら、どうして涼しい顔で私に任せるの！？」
踵を返して歩き始めた美鈴の背中に、優三は更に叫んだ。
「いいの！？私は何もしないわよ！他人に感染することは怖れるけれど、あの男が苦しむことは一向にかまわないんだから！」
常に盗聴を怖れて発言を制限されてきた優三が、今、初めて生の声を発している。
美鈴は肩越しに振り返って、その美しい顔を一瞥した。
「勝手にすればいい。ただ私はオーナーを救うために、研究所へ戻らざるを得ない。ここで看病するよりも救える可能性が高まるから。・・・それだけよ。」
玄関の扉の閉まる重い音を聞きながら、優三は震える前歯で唇を噛み締めた。
優三の抵抗など、美鈴には怖るるに足らないということなのか。
それとも・・・。

リビングのソファの隅で膝を抱えながら、優三はまんじりともせず次の日の朝を迎えた。ここなら、潤一の書斎の様子を微塵も感じずに過ごせる。例え今あの男がどうなっていようと、知ったことではない。だが、実際に潤一の身が滅びていく様子を目の当たりにはしたくない。目にした時の自分の行動が予測できないからだ。

美鈴のメモは、破いて捨てた。

優三にとって、それが「何があろうと絶対に潤一を助けない」という決意だった。

初めて会ったあの日から、ずっとあの男に隷属させられてきた。

それが優三の人生の全てだった。

どんなに美しい宝石や服を買い与えられても、それらはすべて潤一のために過ぎなかった。

優三には、「自分自身の人生」を生きることが許されなかったのだ。

逆らえば、殴られ、蹴られ、監禁される。

警察に逃げ込もうとしても、その寸前で連れ戻された。

マスコミにリークしようとしたら、すぐ潤一にばれて、薬を打たれて半日以上悶え苦しんだ。

（どうして、そんな男を助けなきゃいけない？苦しめばいいのよ。いくら苦しんだって足りないくらいよ。あの男が一体何人の人間の人生を奪ったと思うの？新種のウィルスに感染なんて、因果応報というものよ。十分に苦しめばいい。そして、死んでしまえばいい！）

抱えた膝に額を埋めて、優三は奥歯を噛み締めていた。

潤一の苦しむ姿なんて、一生見られないと思っていた。

それが、こうして現実になったのだ。念願が叶ったのだ。

（なのに、どうして嬉しくないの？どうして・・どうしてこんなに苦しいの・・・！）

優三は知っている。

美鈴が、潤一を一途に思い続けていることを。

そしてその恋心を、潤一がずっといいように操ってきたことを。
すべて承知で、美鈴は未だ潤一だけを思っている。
それが、切ない。
美鈴がしていることを思えば、決して同情などできない。
だが、恋を知らずに生きてきた優三には、時々美鈴が羨ましくなることがあるのだ。
そしてその思いから、優三はどうしても美鈴を憎みきれないでいる。
（彼女は命がけだわ。それはわかる。でも、だからといってあの男を助ける気はない。だって、二人とも今まで多くの命を弄んで犠牲にしてきたのよ。そんな人間が命を救われるなんて、間違ってる・・・。間違ってるわ。）
置き時計の秒針が空間（とき）を刻むたびに・・・
優三はその考えを、骨の髄に刻み続けた。

第１０話その５

いくら広い屋敷の中でも、同じ屋根の下にいるはずの人間の気配が全く感じられない状況というのは、どうしても不安を駆り立てる。
潤一がどうなろうと構わないが、「どうなっているのか」が気になって仕方がない。
ソファから立ち上がり、一歩踏み出しては躊躇して、再び腰を下ろす。
そんな行動を何十回と繰り返し、とうとう優三はリビングから廊下へ出た。
空気の流れる音さえ聞こえそうな静寂。
この家は、使用人が何人いても、何十人もの客を招いても、いつも生活の臭いが無い。
生きている人間の生気が感じられない、白い屋敷。
廊下の窓からは、今にも降り出しそうな雲行きが窺える。
日の射さない薄暗い廊下を、優三は足音を立てないように進んだ。
潤一に、様子を見に来たことを気取られたくない。
ただ、そっと部屋の中を覗いて、生きてるのか死んでるのかを確認したいだけだ。
ほどなく、潤一の書斎の前にたどり着いた。
アラベスク模様の彫刻が施された漆塗りの扉に、そっと耳を寄せてみる。
息を押し殺しても、何の音も聞こえてこない。
優三は固唾を呑み込み、意を決してドアノブに手をかけた。
白魚のような指で、ゆっくりとノブを回す。
ほんの少し扉を押したところで、僅かな隙間から中をうかがった。
（・・・・。）
優三の視線の先に、机に向かう潤一の姿があった。
薄暗い中、デスクライトで手元を照らし、何かに憑りつかれた様

にペンを走らせている。
優三は息を潜めたまま、静かに扉を閉めた。
（何だ・・。全然平気じゃない。）
拍子抜けした。熱で倒れていてくれることを期待していたのに、これでは以前と何も変わらない。
（新種のウィルスなんて、美鈴さんの取り越し苦労なんじゃないの？別に使用人を解雇する必要も、点滴も、全部無意味だったんじゃないの？）
大きなため息をついて、優三は自分の寝室に戻った。
安心して眠ってもいいのだと思った。
潤一の行く末を憂う必要なんかない。それより、この先もまだ当分潤一の道具として生きていかねばならない覚悟をするほうが建設的だ。
（今のうちに休んでおこう。私の安息なんて、滅多に無いのだから・・・。）
羽根布団の上掛けに身を沈め、優三は無理に固く瞳を閉じた。

約束の日の夜中に、美鈴が迎えに来た。
優三は美鈴に、「新種のウィルスなんて杞憂ではないか。」と言うつもりだった。しかし、３日前よりずっと険しく、殺気立っていた美鈴の表情を見た瞬間、何も言えなくなった。
美鈴の顔は、正気ではない。何かの薬物を使って、身体を持たせている・・・そんな異常ささえ感じる。まるで、潤一を迎えに来た死神のようだ。
美鈴は自ら潤一の書斎に向かった。優三はそれを追う気にもならず、ただ玄関ホールで待っていた。
どうせ、潤一は大丈夫なのだ。
生きて、再び優三の脅威となるのだ。
１０分後。
ようやく現れた二人の姿に、優三は（やっぱり・・。）と落胆し

た。
潤一は青い顔ながらも、自分の力で立っていた。それを美鈴が軽く支えている程度だ。
潤一は分厚い封書をいくつも抱えていた。
潤一は美鈴に
「先に車に乗っていてくれないか。」
と言った。
「わかりました。」
美鈴が従い、家から出て行く。
二人きりになると、潤一は優三に封書を差し出した。
「俺が死んだら、これをポストに入れてくれ。」
優三は、すぐには手を差し出せなかった。
「あなたは・・・死にそうに見えないわ。」
「そうかもしれない。だが、一応の覚悟はしておかないとな。」
「あなたらしくもない。いつも自分が一番で、無敵のような顔をしていたくせに。」
すると、潤一は疲れた頬で苦笑した。
「・・・そうだったな。」
優三は、重い封書の束を恐る恐る受け取った。
死にそうに見えないのに。
なぜ潤一は、こんなにも重い覚悟をしているのか。
もう二度と戻らないような眼差しで、玄関から家の中を見つめているのか。
（ここに居るのは、本当に私の夫なんだろうか・・・。）
夫婦というより、主従関係だったと思う。
潤一は由緒正しい家の令嬢を娶って跡継ぎをつくることよりも、一生意のままに操れて世間受けの良い人形を妻にすることを選んだのだ。煩わしい人間関係を嫌い、自分以外の人間を愛することなど絶対にできない潤一には、正しい選択だったろう。誰の人生とも重なり合おうとせず、独りを好む冷徹漢。薬指にはめられたプラチナ

の指輪は、二人で交わした約束の証ではない。潤一にとっては、勝手に群がる女に対する印籠であり、優三にとっては一生とれない犬の首輪のようなものだった。
その絶対的な力が、今の潤一からは感じられない。
それは、単なる病気のせいなのだろうか。
やがて、潤一は自ら玄関の扉に手をかけた。
そして、優三に背を向けたまま言った。
「優三。」
「・・・。」
潤一の痩せた背を見つめながら、優三は次の言葉を待った。
「俺たちは、跡継ぎをつくっておけば良かっただろうか。」
思いがけない言葉に、優三は一瞬躊躇ったが、冷静に答えた。
「それは、人工的に？それとも自然に？」
「・・・そうだな。」
潤一の言葉尻が、少し笑ってるような気がした。
その時初めて、優三は潤一の終わりを予感した。
それなのに、初めて、二人を繋ぐ空気がほんの少し柔らかいと感じた。

美鈴の運転する車の後部座席に潤一が乗り込み、優三は助手席に座った。
「・・・私が運転しましょうか。」
「いいえ。悪いけど、私は優三を信じていないの。」
「でも、途中で事故をおこしそうなほど顔色が悪いわよ。」
「オーナーを無事送り届けるために、事故なんて絶対に起こさないわ。」
そう言い切ると美鈴はサイドブレーキを力任せに下ろし、アクセルを踏んだ。
助手席からミラー越しに見える後部座席の潤一は、いつの間にか静かに眠っていた。

第１０話その６

窓がほとんど無い研究所内では、昼も夜もわからない。
鳴り止まない電話の呼び出し音で起こされた時も、一体何時なのか検討もつかなかった。
電話の主は、美鈴だった。
『優三、すぐに身支度を整えなさい。手伝いが要るの。』
「私は、手伝う気なんかないわよ。」
『すぐ迎えにいくわ。』
優三が反論する間もなく、電話は乱暴に切れた。
五分後、密室の扉が開けられた。鍵は、中から開けることができない。
美鈴は優三に防護服を渡した。
「すぐに着て。」
優三はフイッと横を向いた。
「・・・いやよ。」
すると、すかさず美鈴の平手打ちが飛んだ。
「早く！あんたの都合なんかどうだっていいのよ！」
「いいえ、私は犯罪の片棒なんか絶対に担がない。」
「これは人助けよ。このウィルスを克服できれば、生物兵器の恐怖から逃れる術を見出せるかもしれない。よく胸に刻み付けておきなさい。あんたに頼まなければならないほど、切羽詰っているってことを。」
優三は唇を噛み締め、美鈴を凝視しながら防護服に手を通した。
葬式のような足取りで廊下を進みながら、優三はたずねた。
「二葉は？二葉はどうしているの？」
「・・あの子も手伝っているわ。」
「手伝うって・・・。あの子はまだ１５歳でしょう？」
「血圧測って検温するくらいはできるわ。」

「それはそうだけど、」
次の自動扉が開かれた瞬間、優三は思わず息を呑んだ。
直線に伸びる廊下を挟んで並ぶ複数の小実験室。そのすべての覗き窓から、病人が見える。
「これは・・・！？」
「感染したのよ。研究員全員に。」
「全員！？」
「そうよ。オーナーを連れて研究所に戻ったら、このざまよ。」
「あなたは、感染していないの？」
「わからないわ。でも、歩けるのが私だけなのよ。」
一つの部屋で、二葉が血圧を測ってメモしているのが見えた。
「二葉は、今どういう状態なの？」
「正気よ。セシリアのことも思い出して、しばらく放心はしていたけど。」
「そんな二葉を、無理やり連れ出したのね。」
「二葉にはウィルスへの抗体があるらしいのよ。看病にうってつけじゃないの。それに、役割を与えたら結構しっかりとした目つきになったわ。人とは、多分そういうものなのよ。」
廊下の突き当たりの特別室に、潤一は眠っていた。
美鈴は、優三にメモを渡した。
「薬の投与も任せるわ。私が解決策を見出すまで、何としても生かして。」
「・・・私は、この男の生死なんてどうでもいいのよ。」
「優三！」
美鈴の手が、優三の胸倉を掴んだ。
「この期に及んで、まだそんなことを言うの！？あんたがやらないで、誰がやるのよ！」
美鈴はそのまま、優三を激しく揺さぶった。
「あんただけなのよ！あんたにしか許されないこともあるの！この世であの人の妻はあんただけで、その座が許されたのはたった一人

なの！あんたがやらないで、誰があの人を救うっていうの！？」
間近で見た、眼鏡の奥の美鈴の瞳は、ハッとするほど綺麗だった。水晶色に潤んでいるからだろうか。
優三は美鈴の手から逃れると、言った。
「今回・・・だけよ。この先二度と、こんなことはないわ。」
「当たり前よ。この次があれば、私はもう、迷わない。」
それは、どういう意味だったのか。
優三が尋ねる間もなく、美鈴はすぐにその場を離れていった。
優三はメモの支持に従い、動き出した。
初めてだ。
潤一を看病するなんて。
多忙な潤一は生来丈夫な体質らしく、滅多に病気になどならなかった。多少の風邪や熱なら、何事も無いように仕事に行ってしまう。寝込んだ例など、記憶に無い。
熱を測ると、３９度以上ある。
吐く息が熱くて、病を実感する。
額に寄せられた皺と乾いた唇が、見るからに苦しげだ。
（インフルエンザになったときの私と、あまり変わらない気がする。ただ、高熱の期間が長すぎる気もするけど・・。）
このウィルスが、長い発熱による衰弱死を狙って作られたものだとすれば、抵抗力の弱い年長者から死に至るのだろう。
病室から病室へ５分おきに飛び回って働いている二葉の表情は、マスクや防護服に覆われて全くわからない。優三としては、すぐに駆け寄って話しかけたい。だが、今の二人にそんな余裕はない。
今、この研究所で感染していないのは、遺伝子操作により生まれた者だけだ。それに気付いているのは美鈴だけだった。美鈴は失敗作と言われていたが、こういう状況では、やはり普通の人間とは違うのだと思い知る。だが今回は、それが救いだった。もし美鈴が倒れれば、優三も二葉も何もできず、この研究所は単なる墓場となって朽ち果てる。

未知のウィルスをXとすれば、Xの中でも各ウィルス株間において病原性が異なることが判明している。症状の予測はできるが、誰がどういう症状になるかは確定できない。今のところ、一人が胃腸炎、別の一人が肝炎を引き起こしている。潤一が発熱やリンパの腫れ以上の症状が見られないのとは対称的だった。

静寂も束の間、ある小実験室の緊急ブザーが鳴り響いた。

美鈴はすぐ実験室に駆けつけた。二葉が廊下で助けを呼んでいる。

「急に痙攣をおこしました！」

その声は、優三の耳にも届いていた。思わず病室を出て、美鈴に「どうしたの？」と声をかけると、物凄い勢いで怒鳴られた。

「優三は部屋から出ないで！あんたは、絶対オーナーから目を離しちゃいけない！」

二葉と美鈴が一つの実験室に入り、病人の手当てを始めた。

言われたとおり潤一の病室に戻った優三には、それ以上何が起こったか窺い知る由もなかった。

1時間後。

優三は、二葉が廊下をふらふらと歩いているのを目にした。

「二葉！」

ガラス越しに、声をかける。

防音になっているわけではないから、何とか会話はできるはずだ。

額にへばりついた前髪が、二葉の疲れを痛々しく現している。

「どうなったの？」

二葉が、何を忘れ、何を思い出したのかはわからない。だが、半年以上一緒に暮らした自分を忘れたとは、優三には思えない。

二葉は優三の眼を見ると、黙って首を振った。

それは、どういうことなのか。

死んだ・・・ということなのか。

優三は真相を確認すべく、美鈴に内線をかけた。

美鈴は、優三からの用件を聞くと、冷たい声で言い放った。

『つまらないことで電話しないでよ。』

「だって、亡くなったのなら、その症状を知りたいのよ。前兆がわかれば、」
『無理よ。人によって症状が違うの。あと3人くらい死なないと、関連性の有無もわからないわ。』
優三は、思わず眉をひそめた。
「あと3人くらい、って・・・！どうしてそんな冷たいことを言うの！？」
『ただの真実よ。ウィルスの早期同定のためには少しでも多くの症例が必要なの。』
「まさか症例のために、わざと研究員達に感染させたわけじゃないでしょうね？」
『冗談じゃないわ！私はそんなことしない！研究員の命を守ることは、代理所長としての私の責任よ。絶対、そんなことはしないわ！』
美鈴の苦しい叫びに、優三は声を落とした。
「・・・悪かったわ。」
『・・・・。』
受話器が置かれた。
美鈴は唇を噛み、頭を抱えてうなだれた。
もしかしたら、研究員達は自らウィルスに感染し、症例になったのかもしれない。潜伏期間を考えれば、美鈴が留守にするずっと前から、彼らはそれを覚悟していたのかもしれない。
美鈴が行き詰っていることを悟り、最後の手段に出たのかもしれない。
（私は責任者として失格だわ。でも、今はともかく、一人でも多くの命を救わなくてはならない・・！）
乾いた唇を噛み締め、美鈴は再び頭をもたげた。
次の犠牲者が出るのを食い止めたい。
しかし、遅々として進まない研究も、病人の間を飛び回っての処置も、美鈴の気を焦らせるだけだ。　冷静になろうとしても、明らかなタイムリミットが全身を駆け巡る。

「主任！」
治療中に、二葉が廊下から呼びかけてきた。
「2号室、咳が止まりません！」
美鈴は急いで二葉と共に病室へと駆け込んだ。
美鈴は症状を一通り見、二葉に指示を出した。
「レントゲンを撮るわ。ストレッチャーを！」
廊下を走るガラガラという車輪の音を聞いていると、これが永遠に続く道のような感じがして、気が遠くなる。
段々、自分が何のために動いているのか見失いそうになる。
そのたびに美鈴は痛感する。
自分は、凡人であると。
天才と呼ばれた父や兄とは違う。美鈴は、平凡な女の子が必死の努力で這い上がってきただけなのだ。医師の娘だから、医師になる知力も財力もあるのだと、周りは噂した。そうかもしれない。だが、超人的な何かを持っていないのは確かだ。
二人目の意識不明者が出たとき、美鈴は立ちくらみを起こした。
昼光色の蛍光灯に照らされた明るい廊下で、美鈴はしゃがみこんだ。
こめかみの内側が、ずきずきする。眉間の裏側が痺れている。
美鈴はポケットから注射器の入ったケースを取り出し、左腕の袖をまくって注射しようとした。
と、そのとき。
「駄目！」
ハッとして振り向くと、そこには優三の顔があった。優三は、注射器を持つ美鈴の腕をしっかりと掴んだ。
「薬物でしょう？そんなものに頼っては駄目よ！」
優三の厳しい視線に、美鈴は鋭く言い返した。
「じゃあ、どうしろって言うの！？私の身体は限界なのよ！少しでも気を抜いたら、寝てしまいそうなの！倒れそうなの！でも、そんな暇はないのよ！！」

「依存症になるわ！例えこの現状を克服できても、その後あなたは地獄を見るのよ？死んでしまうかもしれないのよ！？」
「克服できればいい！その後の私のことなんか、どうだっていいのよ！」
美鈴の悲しい叫びに、優三は声を落とした。
「それは研究所のため？それとも、オーナーのため？」
「人の命のためよ。当たり前じゃないの？」
優三は、首を振った。
「あなたは、その『命』を今までどれ程犠牲にしてきたの？犠牲にしてもいい命と、そうでない命があるとでもいうの？」
「・・・前にも言ったはずよ。くだらない問答をしている暇は無いの。」
「よく言う！『神なんていう実体の無いものには出来ないことをする』、なんて大口たたいたくせに！」
優三が美鈴の身体を揺さぶった拍子に、注射器が床に転げ落ちた。
「今みたいな状況を回避するために、散々人の命を踏み台にしてきたんじゃないの？それも満足にできないで、何が『人類の発展』よ！？」
美鈴は抵抗もせずに、優三に揺さぶられるままになっていた。
「答えてよ！何とかできるんでしょう！？そのために今まで人の人生を弄んできたんでしょう？私の人生を、二葉の人生を、奪ってきたんでしょう！？」
優三は、震える唇で、なおも美鈴を叱責した。
「そうでなければ許さない！ここにいる全員を救えないのなら、今まであなた達が犠牲にしたすべてが無意味になってしまう！そんなこと、絶対に許せない！！」
「だから！」
美鈴は身体を壁に預けたまま、力なく答えた。
「だから、私は自分を犠牲にしてもやり遂げようとしているんじゃないの。あんたの言ってることは矛盾してるわ。」

床の上に転がった注射器を拾い上げ、美鈴は呟くように言った。
「この薬はメタンフェタミンといって、戦後しばらくは市場に出回ってたものよ。心配されるほどのものじゃないわ。」
優三は、美鈴に尋ねた。
「それが、あなたの研究者としての使命だというの？」
「そんな立派なものじゃない。私は、自分の不始末の尻拭いをしているだけよ。」
細くて力ない美鈴の背を見つめながら、優三は、何を望めばいいのかわからなくなっていた。
潤一が死ねばいいのか？
美鈴も含め、研究所が全滅すればいいのか？
考えながら病室に戻ったとき、それは起こった。
潤一が突然、身をよじって呻きだしたのである。

第１０話その７

優三は扉を破るように廊下に飛び出し、２号室で意識不明の患者の処置に追われている美鈴の下へ走った。
美鈴は優三の姿を除き窓越しに捉えると、二葉に２、３指示を出して、廊下に出てきた。
「どうしたの！？」
「彼がものすごく苦しがってて・・・。でも、こっちの患者の方が緊急なら、」
「そんなこと、私が判断するわ！」
美鈴は優三と共に潤一の下に駆けつけ、その七転八倒の苦しみを目の当たりにした。
「優三！オーナーの身体を押さえつけて！」
美鈴が注射をしようとするが、潤一はじっとなどしていられない。
優三は潤一を後ろから羽交い絞めにし、美鈴がその上に馬乗りになるような形で、注射を打とうと試みた。だが、潤一の抵抗力は美鈴の弱った身体を床に跳ねつけてしまうほどに激しい。
後ろにいる優三も、暴れる潤一の肘や足で蹴られ、歯が立たない。
殴られ、口の端から滲み出た血を手の甲で拭いながら、美鈴は薬棚からクロロホルムを取り出した。厚めのガーゼにたっぷりと染み込ませ、潤一の口元に無理やり押し付ける。
だが、眉根をきつく寄せて悶え苦しむ潤一は、なかなか大人しくならない。
激しい痛みが、潤一の意識を眠らせないのか。
それとも、無意識の中で身体だけが悶絶しているのか。
額に汗を浮かべながら、美鈴は怒鳴った。
「足をベッドに縛り付けて！」
優三は太い包帯をベッドの足に巻きつけると、潤一の裸足の足に引っ掛けようとした。だが、顔を近づけられないほど暴れられて、

上手くいかない。骨格のしっかりとした、太くて重い男の足が、優三の頬を何度も蹴り上げる。
なのに、不思議だ。
痛いには痛いが、苦痛ではない。
優三の身体を何度も蹴り上げてきた、この足。
そのたびに、痛みに泣いてきた。
だが、それは身体的な痛みに泣いてきたわけではない。心の痛みに泣いてきたのだ。
優三は汗だくになり、顔や腕に痣を幾つもつくりながら、何とか潤一の足を固定した。
潤一の鼻や口にビニルパイプのような管をとりつけている美鈴の額からも、汗が吹き出している。唇から顎にかけてへばりついている血が、汗で溶け出すほどだ。
「薬棚から番号３２と４のビンを取って！」
「はい！」
その次の瞬間、潤一は再び痙攣したように身体を仰け反らせた。
激しく首を振り、叫び声をあげている。
「優三！タオルを！！」
美鈴はそう言いながら、潤一が舌を噛まないように顎や口元を押さえる。
それだけでは治まらないと察知し、美鈴は自らの拳を潤一の口の中に入れた。
「・・・っ！！」
途端に、手の甲を激しく噛まれた。
が、ここで手を引っ込めるわけにはいかない。
美鈴は優三の持ってきたタオルを何とか口の中に押し込むと、噛まれた手を口から取り出した。
その傷を目にした優三は、思わずビクッとした。
人の噛む力とは、何と強いものなのか。
しかし美鈴は、そんなことお構い無しに再び処置を始めた。

優三は、何も声をかけることができなかった。「大丈夫？」なんて陳腐なセリフを吐いたって、どうにもならない。むしろ、美鈴に怒鳴られそうだ。

美鈴が正念場に立たされていること。そして、命がけで潤一を救おうとしているこの大事なときに、一体何ができるだろう？

必死の美鈴を見つめながら、優三は目頭が熱くなるのを感じていた。

そして、今まで決して感じたことの無い憐れみの情が胸にこみ上げてくるのを抑えられなかった。

もう、いいではないか。

これで、潤一も美鈴も、十分に痛い目にあったではないか。

これ以上、二人が苦しむ姿など見たくない。

誰かが犠牲になるのを、見たくなどない。

潤一の死をずっと願っていた。死ななければ、解放されないと思っていたからだ。

だが、人の死とは、誰かが願うとか望むとか、そんなものとは無縁でなければならない。

人の命を弄ぶ研究所をずっと忌み嫌ってきた。そんな自分が、一人の人間の死を望むということは、研究所を責める資格を失うということだ。

出生がどうあれ、優三は人から後ろ指を指されるような生き方はしてこなかった。それが優三の誇りだった。そのたった一つの支えを、失いたくはない。

優三は祈った。

潤一が助かって、美鈴と二人で生きていかれるように。

冷凍睡眠のセシリアを目覚めさせ、二度と拉致をしないと誓い、研究から身を引いてくれれば、優三はもう何も望まない。それ以上の償いをしろとは、言わない。

多くの犠牲となった魂への償いは、優三が望むものではなく、潤一と美鈴が二人で考え、実行していくべきものだ。

（だから神様・・・。どうか一刻も早い平穏の訪れを。こんな理不尽な状況から私達を解放してください。どうか・・・！）
その刹那。
潤一の地獄のような叫びが、病室中に響き渡った。
激しい筋肉の収縮で、潤一の顎が砕けたのである。
美鈴は絶望的な息遣いで、潤一の手を握り締めていた。
優三は、潤一の下に駆け寄った。
注射器を準備する美鈴の傍らで、優三は叫んだ。
「こんなところで死んだら許さない！あなたを必要としている人がいる限り、死ぬなんて許さない！」
その思いがけない言葉に、美鈴は一瞬、手を止めた。
「これからは、美鈴さんと一緒に生きていけばいい！いつも勝手で、残忍で、私が大嫌いなあなただけど、この世に一人でもあなたを必要としている人がいる限り、生きなきゃいけない！自分の思い通りにならないことなんか無いんでしょう！？そう言って風を切って歩いてきたんでしょう！？」
潤一の腕が、苦しみで暴れまくる。その腕を必死に抱きかかえ、優三は泣き叫んだ。
「こんなところで息絶えるなんて自業自得よ！自分の研究所で研究対象のウィルスに殺されるなんて間抜けよ！そんな馬鹿馬鹿しいこと、あなたは大嫌いでしょう！？悔しいでしょう！？その強靭な生命力で、もう一度立ち上がって、私を見下ろしてみなさいよ！！」
何かの機械から聞こえてくる小刻みな電子音の間隔が、段々狭まってくる。
美鈴の息が荒くなる。
優三の心臓を打つ音が、どんどん早くなっていく。
時計の針の動きさえ、早まり始めたようだ。
天井と床とが、逆になろうとしている。
空気が、歪み始める。
体温と気温の境が消えかかっている。

すべてのものが、限界に達しようとしている。

次の瞬間。

電子音は、間隔毎に打つことを止め、一定レベルの連続音へと変わった。

優三がつかんだ太い腕は、すべての力を無くし、ただ、重力に引かれている。

それは、すべての慌ただしさが一瞬にして治まった瞬間だった。

美鈴は細い唇をきりりと引き締め宙を睨みつけていたが、やがて黙ったまま、別の病室へと去っていった。

優三は、死んだ潤一の傍らで、その腕を抱えたまま動けなくなっていた。

放心状態にある優三の耳に光っていた紅蓮のピアス　―

―　潤一の所有物である証のガラス細工は、いつしか紅い砂となって、無菌の風に舞い、散った

第１０話その８

必死の治療も虚しく、最後の研究員が死んだ時・・・美鈴の張り詰めた神経は切り裂けた。
美鈴はうなり声を上げながら、傍にいた二葉の襟首をつかんだ。
「全部・・・全部お前のせいよ！！」
潤一が死んだときも、残りの研究員を救おうという気持ちで理性を保っていた。
しかも、薬物の力を借りて、かろうじて肉体を維持していたような状態だった。
そんな美鈴には、もはや一かけらの理性も、情も残されてはいなかった。
鬼とも悪魔ともつかぬ形相で、美鈴は二葉に迫った。
「お前がすべての元凶だ！お前さえいなければ、こんなことにはならなかったのに！」
二葉は、恐ろしさに声も出ない。身動きもできない。
そこへ、騒ぎを聞きつけた優三が飛び込んできた。
「美鈴さん！」
美鈴は、持っているメスで今にも二葉を殺害しようとしている。
優三は慌てて美鈴の細い腕をつかみ、叫んだ。
「二葉に罪はないわ！」
「この娘は生きていること自体が罪よ！存在そのものが、罪よ！！」
美鈴は正気ではない。
二葉を殺害し、その後、自らの命さえ絶とうかという状態だ。
と、その時だった。
「奥様、そこをどいてください。」
優三はハッとした。
久々に聞いた二葉の声。
二葉は、優三を忘れてはいなかった。

二葉は震える唇を必死に押さえながら、しかし落ち着いた目で優三を見つめた。
「奥様は、研究所から出てください。私はここで、主任に殺されます。」
「・・・なんですって！？」
「私が犯した罪です。私のせいで、この研究所の人たちも、オーナーも死んでしまったんです。私だけが生き残るわけにはいきません。」
「それは違う！未知のウィルスなんてものに興味を示して弄んできた研究所自体が招いた結果よ！二葉のせいじゃないわ！」
「いいえ。私がオーナーを傷つけなければ、こんなことにはならなかったんです。」
「そのとおりよ。」
美鈴は優三の手を振り払い、仁王立ちになって二葉を見下ろした。
「よくわかっているじゃないの。道具のくせに人を傷つけ害をなした、その償いをするがいい！」
美鈴はメスを握りなおすと、思い切り振り上げた。
「私がこの手で、壊してやる！！」
「美鈴さん！！」
優三の悲鳴が、美鈴の暴走心を更に掻き立てる。
二葉は覚悟を決めたように、瞳をギュッと閉じた。
3人の、同じ運命の下に生まれた女達が集うとき、複雑な思惑が絡まりあう。
美鈴の目の前に、優三の柔らかな巻き毛が舞った。
勢いで振り下ろしたメスが、髪の一部をかすめる。
思い通りにならない苛立ちが、美鈴を更に凶暴化させた。
「どけ！私の邪魔をするな！」
「そんなに人を殺したいの！？人の命を救うために働いていたあなたが、またその手を汚すの！？」
「二葉は人ではない！ただの道具で、ただの生物（せいぶつ）にすぎない！」

「『命』には変わりないでしょう？」
「そうだ。この世に存在すべきでない、余計な命だった！」
「それを作り出したのがこの研究所じゃない！？すべては、研究所が招いた災いなのよ！」
「ちがう！すべての原因は、この禍々（まがまが）しい人工児のせいよ！！」
「そんなに殺したいのなら、私を殺してからにしなさい！」
優三は白い額に粒のような汗を浮かべて、美鈴を睨みつけた。
「真崎潤一亡き後は、私も朽ち果てるのだと言ったわね？ならば、今ここで、私を殺せばいい！」
「・・いいえ！奥様、それは筋違いです！」
「二葉は黙っていなさい！」
後ろの二葉を振り向きもせず、優三は大声を張り上げた。
とりあえず、美鈴の暴走を止めたい。自分を傷つけることで少しでも気が静まるのなら、それでいい。
美鈴は、左目を歪めて引きつった笑いを浮かべた。
「誰かを睨みつける表情さえ、憎らしいほど美しいわね。」
優三は唇を噛んだまま、身じろぎもせずに美鈴を凝視し続けた。
次の瞬間には喉を欠き切られてもおかしくない状況だ。
そして優三に、その覚悟はできている。
美鈴は左手でおもむろに眼鏡を外すと、床に投げ捨てた。
一重の切れ長の眼。
レンズ越しではわからなかった、素の感情がむき出しになる。
優三はありったけの勇気を奮い立たせ、叫んだ。
「・・・さあ、この作り物の顔を傷つけるがいい。用済みになった道具を、壊せばいい！」

美鈴にとって、優三は『夢』だった。
いつも、いつだって、優三になりたかった。
特別な頭脳なんかいらない。あの容姿と、真崎潤一の両方を手に

入れる、その運命が欲しかった。それなのに、優三はそのすべてを否定した。
何という贅沢！
例えそれが仕組まれた人生でも、美鈴なら喜んで甘んじたのに。
だが、潤一が望む要件を、美鈴はまったく備えていなかったのだ。
それに気付いたとき、美鈴は思った。
絶対に報われない想いでも、一生密かに思い続け、尽くすことが許されるのならば、それだけで幸せだ、と。
それなのに、そのささやかな幸せを奪われてしまったのだ。
同じ地上で、同じ空気を吸って、研究所という媒介を通じて繋がっていられたのに。
それだけを、一生の支えとしていくはずだったのに。
それだけが、この荒涼とした人生の、ただ一つの希望だったのに！

優三は、そんな美鈴の思いを理解しているつもりだった。
美鈴の切ないほどに恋焦がれる思いが、羨ましくて。

でも、美鈴は優三を未だに羨ましく思う。
潤一が死んでも、やっぱり優三は潤一の物で、潤一の妻なのだ。
それは、美鈴には絶対越えられない壁なのだ。

美鈴は、銀色のメスを握りなおした。
優三を殺したって、この気持ちは治まらないだろう。
二葉を殺したって、潤一が生きかえるわけではない。
そんなことはわかっている。
だが、復讐や敵討ちはいつの時代にも存在しているではないか。
この世で一番大切な人を奪われた恨みを晴らす方法が殺戮以外にあるのなら、教えて欲しい。
美鈴は、下唇を引き締めなおした。
優三の白い喉元が、震えるように脈打っている。

どちらも決して視線を逸らせることなく、にらみ合っている。
と、その時だった。

パ・・・ン！

優三にも、二葉にも、そして美鈴にも、何が起こったのか訳がわからなかった。
しかし次の瞬間、美鈴の手からメスが滑り落ち・・・
ドサッという音をたてて、その身体が地面に崩れた。
「優三、・・・二葉！」
突然、後ろから耳慣れない男の声が響いてきた。
とっさに振り返ると、そこには黒いスーツを着た遠野基（とおの・もとい）がいた。

基は麻酔銃を手にしながら、ゆっくり二人に近づいた。
この世にまだ人が存在したのかと思うほど、基の存在が特別に見える。
次々と研究員が死ぬ中で、優三も二葉も、もう、この世の果てが訪れたと思っていたからだ。

スパイ活動を終え帰国した基が目にしたのは、研究所の入り口にかけられた最高レベルのセキュリティだった。今まで、用いたことがない。このシステムは、外部からは、所長である基しか解くことはできない。
研究所の中は奥へ行くほど凄惨で、部屋ごとに眠る死体によって、基は何が起こったかを確信した。
そして、この有様だ。
真崎潤一が亡くなって美鈴が大人しくしているわけがない。
基は暫らく事の成り行きを見守り、美鈴に麻酔銃を向けるタイミングを見計らっていたのだった。
驚いたような表情の優三に、基は「何があったのか、説明してく

れないか。」と言った。
優三は思いつくままに事の経緯を堰を切ったように話した。色々なことがありすぎて、時間軸に忠実になど話せない。ただ、自分が見、知っていることを伝えるだけだ。
二葉にとって、基は過去の人だった。思い出すまでに、多少の時間を要した。どちらにせよ、基が二葉に話しかけることは無かった。
基は眠っている美鈴を肩に背負い、優三たちに着いて来るよう命じた。
セキュリティゲートを抜け、死の臭いから大分はなれた部屋までやってきた。
研究所の入り口に近い客間。座る間もなく、基は優三に尋ねた。
「オーナーから預かってるものはあるか？」
「・・・ええ。封書をいくつか。あの人が死んだら投函するよう言われてました。」
「どこにある？」
「入り口脇の金庫に、美鈴さんが入れてくれました。」
基は、すぐに部屋を出た。
優三は固唾を呑みながら、事の成り行きを見守るしかない。居場所を見失って落ち着かない二葉の肩を抱きながら、待った。
5分ほど後、基は分厚い封書を抱えて戻ってきた。
そこで二葉は部屋の外に待たされ、優三だけが中に残った。
基と優三は向かい合ってソファに腰掛けた。
基は封書の宛名に目を通し、
「私宛ての封書がある。開けてみてもいいか。」
「もちろんです。あの人はもう、死んでしまったのですから。」
基は封を切りながら、優三を一瞥した。
「他人事のように言うね。」
「じゃあ、どうすればいいんです？夫を亡くした世間一般の妻のようになんか絶対になれないことを、所長が一番良くご存知でしょう？」

「・・・十五年も夫婦だったのに？」
「その年月以上に、私はあの男の所有物だったんですよ？今、私は真の解放に向かえる期待で胸が一杯なんです。・・・あの人の遺言が守られない以上は。」
封書の中の一通の手紙を取り出し、基は暫らくの間黙って読んでいた。
優三から言わせれば、基の方が異常だ。あれだけの惨劇を目にしたばかりだというのに、こんなにも冷静でいられる。あのウィルスのことも、どれほどわかっているのだろう。
やがて、基は封書から小切手らしきものを取り出し、優三に差し出した。
「これは、君のものだ。」
「・・・？」
「オーナーは、この研究所の権利と財産の一部を私に残してくれた。更にその一部を、私は君に渡す。これを持って、しばらく二葉を預かってくれないか。」
「え？」
思いがけないことだった。
基は言った。
「オーナーは君を実験台として刻むように遺言している。だが、それは所詮死人の戯言だ。美鈴はどうかわからないが、私はまだ君を刻むつもりはない。ただ、君を実験体として欲しがる輩に奪われることだけは許さない。君は私の試料だからだ。」
「二葉を預かって、私はどうすればよいのです？」
「私が今回の惨劇の後始末をつけ、美鈴が正常に戻るまで都会に身を潜めていて欲しいんだ。」
「都会？」
「下手な田舎に君のような絶世の美女がいてみろ。人目につきすぎるし、不自然だ。なら、人の出入りが激しくて隣近所に関心のない人間の多い都心の方がいい。これだけの金があれば二人で一年は暮

らせる。一年あれば、私も何とかできる。」
「真崎の家へは、何て？」
「オーナーが封書で知らせる様だ。それでオーナーと君は、真崎家の権力でこの世から抹消される。・・・どっかの医師が死亡診断書を書き、死体のない葬式が行われるんだろう。ニュースにもなるかもな。『真崎グループ御曹司、美男美女夫婦交通事故死』なんてな。」
優三は、唇を僅かに震わせた。
「真崎優三は・・・この世のものではなくなる・・・。」
「そうだな。新しい名前を好きにつければいい。」
「二葉は？二葉はどうすれば？」
「二葉は、あまり社会から隔離しないでくれ。最後の在籍中学には、卒業までの月謝が振込み済みだそうだから、放っておいても1年後には卒業証書が来る。そしたら高校へ入学させる。できるだけ名門校に入れるよう、勉強をみてやってくれないか。」
「そしたらまた・・・実験台を見つけさせるのですね。」
「そうだ。18歳以下の生きた材料は、どうしても必要だ。」
優三は、奥歯を噛み締めた。
「こんな有様を目にしながら・・・、尚もあなたは同じ事を繰り返すのですか？」
「そうだ。こんな有様だからこそ、やはり更なる研究が必要だ。」
「そうでしょうか？私は、今回の事はすべて研究所の自業自得だと思っています。オーナーもいなくなった今こそ、手を引く時ではありませんか？」
基は、苦笑した。
「私は、真崎潤一に命じられたから研究をしているわけではない。無論、方向性などは従っていたがな。だが、私は父と同じ根っからの研究者で、この研究所も手放す気はないんだ。」
「研究を否定はしません。ただ、人の命を犠牲にする研究方針を変えて欲しいだけです。」

「人類の発展に犠牲は欠かせない。」
「それは違います！犠牲の上の発展なんて、何の価値もありません！」
基は、深いため息を吐いた。
「・・・優三。私は1年ものスパイ活動で疲れているんだ。綺麗ごとを並べ立てて私を責めるのはやめてくれないか。」
「所長！」
「そうでなければ、君にこのまま眠ってもらうまでだ。・・・永遠にね。」
優三は下唇を噛み締め、必死に基の冷たい視線に耐えた。
基は、潤一が存在している時は気弱な雇われ所長そのものに見えた。潤一の命令に嫌々従っているだけの、本当は正義を求めている人だと思っていた。なのに。
「勘違いするな。美鈴を眠らせたのは私の試料を守るためであって、君や二葉の命なんてものを救おうと思ったわけではない。」
「・・・わかりました。とりあえず、二葉のためにも大人しく従いましょう。でも1年後、私達が大人しくここへ戻るとは思わないで下さいね？」
「戻らないなら、連れ戻すまでだ。そのためのピアスじゃないのか？」
「・・・！」
「優三の受信機はオーナーが破棄している。だが、二葉の受信機は私が持っているんだ。優三は二葉を捨てるなんて事は絶対しない。二葉がいるところが、優三の居るところだ。」
そうだ。
潤一が死んでも、やはり、解放などされないのだ。
優三は、基を睨みつけた。
「所長は・・・あの人（潤一）と全然変わらない人間だったんですね。」
「それは、違うよ。」

基は、薄紫色の薄い唇で微笑を浮かべた。
「私は、オーナーとは違う。」
不気味な基の表情に、優三は思わず視線をそらせた。
基は小切手と一緒に、Ａ４サイズの茶封筒を渡した。
「私の名で、新宿のマンションの一室を借りてある。家賃も１年間振込み済みだ。」
優三は怪訝な顔で基のを見つめた。
「随分、用意周到ですこと。・・・まさか、今回のこと、所長が全部仕組んだわけじゃ・・！？」
すると基は、小さく笑った。
「それができたら、すごいことだね。だが残念ながら流石の私もそんなことはしない。このマンションは、偶々（たまたま）二葉の新しい住処として借り上げておいたものだ。」
優三はソファから立ち上がり、基を見下ろした。
「・・・そういうことにしておきましょう。真実がどうあれ、私に拒否する権利などないのでしょうから。」
優三は部屋から出て、外で待っていた二葉の手をとった。
「私と一緒に暮らしましょう。私は、何があってもあなたを守るから。」
「ここを、出るってことですか。」
「そうよ。こんなところに居る必要はないわ。」
「・・・でも、セシリアが・・。」
「セシリアは大丈夫。所長が、どうあっても守るでしょう。彼のライフワークである冷凍睡眠の象徴なのだから。」
基は、研究所を去る二人を、軽く手を挙げて見送った。
「じゃあ、また、１年後に。」
足早に研究所を後にしようとする優三に、二葉はそれ以上話しかけることができなかった。
この白い手を信じてついていった先に、一体何が待っているのだろう。

この3年間でかき回された人生は、これからどうなってしまうのだろう。
わかっているのは、唯一つ。
セシリアがいる限り、自分は再びこの場所へ戻ってこなければならないということ。
それだけだ。

麻酔で眠る美鈴の乱れた髪を擦りながら、基は伏せ目がちに宙を見つめていた。
基が、このウィルスの正体を探りたいと思っていたのは事実だった。
遠野研究所で造られた遺伝子操作による人工児に、ウィルスの抗体がある可能性を見出し、どうしても試したかったのだ。だから、相当のリスクを覚悟で美鈴に郵送した。スパイ先の研究所でもウィルスの情報を盗むことに挑んだが、結局適わなかった。
一週間ほど前。
潜入も潮時だと悟った基は研究所を抜け出し、複雑なルートを経て日本へ帰りついた。
研究所での事態は、想定済みだった。
美鈴がウィルスの同定を完結できないことも、緊急事態が生じれば研究員達が自ら症例になろうとすることも、すべて計算の内だった。
（まさか、オーナーの死というおまけまでついてくるとは、思わなかったがな。）
これで、真崎家という眼の上のたんこぶが無くなったのだ。
この研究所のオーナーとして潤一が選ばれたときから、すべてはわかっていた。
戦時中の混乱から抜け出し、研究所創設者だった先代が隠居したばかりの真崎家にとって、研究所はリスクの高すぎる無用の産物で

あったことを。しかし、先代の目の黒いうちは切り捨てることができず、潤一という、本妻が使用人との間に儲けた忌わしき息子をオーナーに据えたのだということを。

真崎家の思惑とは関係なく、潤一は遠野研究所をこの上なく重宝し、利用し尽くしたが・・。

（これで真崎家は、厄介払いができたと浮かれるはずだ。研究所のすべての権利を放棄してな・・・。真崎潤一がこれからの研究に必要なだけの資産を俺に残してさえくれれば、もう真崎家の後ろ盾など不要だ。美鈴には気の毒だったが、これで凡て上手くいったんだ。これだけの症例があれば、私なら絶対にウィルスの正体を探れる。再び優秀な研究員を招き、強欲な金持ちに臓器を売りさばけば、資金に困ることなく、研究を続けることが出来る・・！）

基は、腹の底から湧き上がる笑いを、抑えることができなかった。

美鈴の目尻に残った涙の跡を見返ることもなく・・

基は再び、独り、研究所の中央に立ったのだった。

第11話その1

2月。

小雪の舞う灰色の空の下、優三は一人電車に揺られていた。

今日は、二葉の入試結果が発表される日だ。

優三個人としては、合格でも不合格でもどちらでもかまわない。二葉が入学する目的は、実験台を探すためにすぎないからだ。

だが、この1年の二葉の努力を思うと、合格させてやりたいとも思う。

二葉の記憶は完全に戻ってはいなかったが、セシリアの事と、実験台にすべき生け贄を探す使命だけはしっかり思い出していた。だが、それとは別の次元で「知識を得る」ことに非常に貪欲だった。今までまともに勉強できなかった分を取り戻すかのように、優三の少しの手解きさえあれば、難関校の入試問題を解けるまで机を離れずに追求し続けた。

遠野一族の遺伝か、遺伝子操作の結果かは不明だが、二葉の知能は高く、スポンジごとく知識を吸収していく。二葉はこの能力を、中学時代は発揮できずにいたのだろう。

地下鉄に乗り換えると、窓に映る自分の顔の後ろに他人の視線が映る。

優三は、どこで昔の知り合いに会うかわからないため、長かった巻き髪をショートにし、必ず色つきの眼鏡をかけて出かけていた。化粧も最低限に抑え、服も地味なものばかり揃えた。　しかし外出するたびに、優三は自分がどれほど注目されてしまうかを実感するのだ。

真崎優三である時は、注目されるためにつくられたのだから、人目に曝されるのが当然だった。マスコミのへの露出も度々あったし、注目されることに慣れていた。だが、今、こうして目立たず生きねばならない存在になった時、自分の容姿の特異性に気付くのである。

「・・・女優さんじゃない？」
「そういえば、どこかで見たことあるかも。」
「すごい綺麗。一体いくつかしら？」
そんな囁きがあちらこちらから聞こえる。
どうしてだろう。
真崎優三である時も、人の噂の的だった。それに慣れきっていて、気にも留めなかった。
だが、今は、人の声も視線も煩わしい。
放っておいてくれ、と思う。
じろじろ見ないで、と思う。
人から逃れるように地下鉄を降り、優三はホームから出口へと、ひたすら下を向いて突き進んだ。こういう状況を二葉に察して欲しくなくて、二人で外出したことは一度もない。
地下鉄独特の埃臭さに耐えながら階段を上りきると、すぐ右手に見える歩道橋を渡り、オープンカフェや外資系オフィス、大使館が連なる街並みを抜けていく。
かつてはこの街を、いつも高級車で通り過ぎていた。ゆっくり一人で歩いてみたいと思っても、それは許されない望みだった。
ふと立ち止まり、ショーウィンドウを見つめてみる。だが、その中に飾られているのは今の自分とは無縁の産物だ。
潤一の死から約1年。
念願の自由は、まだ手に入らない。
（いえ、多分一生手に入らないものなのかも・・。）
潤一が死んでも、研究所の所有物であるという変わらぬ事実。
いつだったか、美鈴が言っていた「真の自由なんてこの世にありはしない。」というセリフ。
（それは、私達のような者には自由なんて与えられるわけがないという意味だったのか・・？）
レンガ造りの古い門柱を潜り抜け、まだ寒々としている桜の木の下に、合格発表の掲示板が設けられていた。もう昼過ぎのため、係

員以外には誰もいない。
優三は瞳を伏せ、一度、軽く深呼吸をしてから掲示板を見上げた。
左端から、ゆっくりと数字を追っていく。

そして。

それは、安堵の溜息だった。
係員に促され、入学の手続きをするために校舎内に入る。
事務室は、鉄骨造の近代的な建物の1階にあった。伝統ある旧校舎とは対称的で、壁一面がガラス張りになっている。
優三が書類を受け取り、必要事項を記入していると、不意に後ろから声をかけられた。
「あの、失礼ですけど。」
思わず振り向き、優三は心臓が止まるかというほど驚いた。そこには、かつての知り合いが立っていたからだ。
だが、あくまで知らぬ振りをせねばならない。
優三は冷静に唇を閉じ、見知らぬ人に対する眼差しを作った。
女性は優三の顔を見つめながら、
「ああ、やっぱり私の昔の知り合いによく似てらっしゃるわ。」
と言った。優三はそこで初めて、口を開いた。
「そうですか。」
「ええ。でも、やはり違う方なのよね。あの方は、亡くなってしまったのだから。」
「・・・そんなに、似てますか。」
「ええ、声まで。本当に美しい方でした。あんな、神の気まぐれのような美しさは二人といないと思っていたのに、またお目にかかれるなんて。」
優三は、苦笑しながら、再び書類に目を戻した。
あまり関わりたくない。どこで、どう疑われるかわからないからだ。

だが、女性は執拗だった。
「あの、私の娘も合格しましたの。同じクラスになるかもしれませんわね。」
優三は、女性の方は見ずに「ええ、そうですわね。」とだけ答えた。
優三の余所余所しさに、女性は「では、失礼します。」と言って去っていった。
深く息をついて、優三は冷や汗を拭った。
昔の知り合いに会ってしまったのは、今回が初めてだった。知り合いは誰も彼もセレブリティで、電車に乗るような人も、スーパーに買い物に出るような人もいないからだ。だが、学校が一緒になれば、会う可能性は高い。高校生くらいの子を持つ人も多く居たし、この名門校に通わせている人も、少なくないはずだ。
（・・大丈夫。どうせ、私はもうお払い箱になる身。このまま二葉の母親代わりでいられない。だから・・・大丈夫。）
こんな心臓の高鳴りも、今回限りだ。
そう思うと、急に切なくなった。
１年という、期限が近づいている。
遠野基から受け取った１０００万円は、家賃を支払わずに済む二人暮らしには十分すぎ、まだ半分以上残っている。何が起こるかわからないため、優三は節約を重ねていたためでもある。
二葉を連れて、逃げるか。
発信機を感知されない場所まで行けば、自由にならないか。
それは、１年中何度も何度も考えたことだ。
しかし、死人として処理された優三が、二葉を抱えて生きていくのは余りにも難しすぎた。　人目を気にするため、美貌を活かすこともできない。働いたことのないお嬢様育ちの優三は、自分に何の仕事ができるかもわからない。
選択肢は、３つある。
一つは、遠野基の言うとおり研究所に戻り、試料としての使命を

果たすこと。
二つ目は、二葉を連れて一緒に逃げること。
そして三つ目は、二葉を残し、一人で逃げること。
その三つ目を考えるたび、優三の胸の奥がチクリと痛む。
基は、優三が二葉を捨てて逃げないと踏んでいるようだが、不可能ではない話だ。有効な発信機を持たない優三の居場所を、基が探し当てることは難しい。一人でなら、逃げ果せる。そして、真の自由を手に入れるのだ。
（いいえ、それはやはり・・・できない。）
もし、基が優三を解放すると言ってくれれば問題はない。だが優三の本当の希望は、優三自身だけでなく、二葉の解放も叶うことなのだ。
だが、それは期待するだけ無駄だろう。
スパイ活動を終えた遠野基は、優三が知っていた基とは違っていた。基のことを、それほど知っていたわけではない。だが、二葉を救うために潤一に土下座をし、命の危険を承知でスパイ活動に出た基とは、やはり別人だと思う。
基は何度も言った。「私は、私の試料を守るために動いたのだ。」と。
基にとって二葉だけは、ただの試料ではない思っていた。
それは、誤解だったのだろうか。
それとも、1年のスパイ活動が、基の精神に何らかの変化をもたらしたのだろうか。
やがて、新宿の自宅マンションに戻ってきた。
二葉は無事合格したというのに、浮かれた気持ちは全くない。
（ううん、駄目よ。私のことと、二葉の合格は別問題。ちゃんと、笑顔で褒めてあげなくちゃ。）
そう言い聞かせ、優三は玄関のドアを開けた。
「ただいま。」
だが、そこに待っていたのは二葉だけではなかった。

噂をすれば影。というように、思えば影が現れる。
背の高い、細身のスーツ姿。
「・・・所長・・！」
基の脇には、二葉がうつぶせに倒れている。
「二葉に何を！？」
優三の剣幕に、基は笑った。
「何もしないよ。ちょっと眠らせてあるだけだ。これからの会話を聞かれたくなかったんでね。」
「・・それなら、席を外させればいいだけの話ではありませんか。近くには色んな店がある。時間を潰すことなどわけが無いでしょう。それなのに、すぐ薬を使うなんて。・・・身体にいいわけがないのに。」
「・・・そうだな。まあ、いいから座ってくれ。」
二人は丸い卓袱台に向かい合って座った。
基は胡坐をかき、優三は正座をして姿勢を正した。
基は、美鈴に良く似た細い切れ長の眼で、優三を見つめた。
「もう、逃げることは不可能になったね。」
「そうでしょうか？ついさっきも、どうすれば逃げられるか考えてたところですけど。」
「逃げられないだろう？二葉を捨てても、君は一人で生きてはいけない。生きる術を教わらずに４０年近くも生きてしまったのだから。」
「死ぬ気になれば、いくらでも生きられます。」
「生きることは、出来るさ。その美貌なら、どっかの金持ちが買ってくれる。」
優三は、鋭い視線で基を睨み付けた。
「私は、自由が欲しいんです。自分の意思で、自分の人生を生きたいんです。誰かの所有物でいることが、嫌なんです。」
すると基は、苦い表情を浮かべた。
「自由なんて、この世に存在しない。そんなものを望んではいけな

い。」
「美鈴さんと、同じ事をおっしゃるんですね。」
「・・・そうだ。人は一人では生きていけない。他人の存在は、自由を奪う。だから真の自由など存在しないんだよ。」
それは違う。
そう思ったが、それ以上の反論が浮かばず、優三は口を噤んだ。
基は肩の力を抜き、言った。
「研究所に戻るから、支度をしなさい。」
「・・・嫌だと言ったら？」
「優三。・・・この1年で私は研究所を立て直すために奔走し、やっと次の研究に着手する準備を整えた。君は、その実験台になるんだ。」
優三は、膝の上の拳をギュッと握り締めた。
「私に・・・一体何を？」
「遺伝子操作の人工児を母体とした生命の誕生。・・つまり、君に、遺伝子操作された子どもを産んでもらいたいのだよ。」
「！！」

第１１話その２

優三は青ざめて、首を振った。
「私が何歳(いくつ)だと思っているんです？」
「そう。だから急いでいる。やるなら、これが最後のチャンスだ。」
それを聞いて、優三は苦笑した。
「・・・真崎潤一が生きていたら、できない実験ですものね。所長にとっては、天の采配とでもいうのかしら？」
「そうだな。しかしこれは、私だけの意思ではない。」
「え？」
「オーナーの、遺言だ。」
優三の臓器が、無数の棘が突き刺さったように痛んだ。
「どういうことです？あの人は、私に道具としての使命を全うして朽ち果てるよう遺言したはずです。」
「そうだ。そのとおりじゃないか。道具としての使命とは、私の実験台になることだ。」
「嫌です・・！」
優三は、眉根を寄せ、哀願を込めた眼差しで訴えた。
「私が研究所の所有物だということは承知しています。実験台として刻まれることも覚悟はしていました。でも、どこの誰だかわからない男の子を孕むなど、絶対に嫌です！」
「知らない男ではない。使うのは、真崎潤一から提供された精子だ。」
「なっ・・・！？」
目の前が真っ白になる。
次から次へと明らかになる事実に、眩暈がする。
「彼は『もしもの時』に備えて、随分前に命じていたのだよ。」
「あの男は・・！私と結婚した時に言ったのですよ、『子どもは要らない』と！」

「だから、『もしもの時』なんじゃないか。」
優三は、邸宅を去る間際に言った潤一の言葉を思い出していた。
―　俺たちは、跡継ぎをつくっておけば良かっただろうか。　―
そして優三は、こう答えた。
―　それは、人工的に？それとも自然に？―
初めて、潤一と自分が夫婦であると感じた瞬間だと思っていた。
その甘い切なさで、つらい過去を少しは拭えたと思っていた。
だが、潤一のセリフは、こんな未来を暗示していたのだ。
あのセリフは、潤一の人間らしさとか、後悔の念とか、そんなものではなく、ただの宣告だったのだ。
「死んでなお、私を支配するのですか・・。」
「君は、真崎潤一のために作られた道具だからな。」
「だからこそ、自分が死んだら私も殺せと言ったはずです。」
「そうだ。わからないか？遺伝子操作された子どもを出産した母体は、今まで例外なく、１６人とも直後に死亡している。」
「・・・！」
優三は自分に迫った死を、初めて実感した。
ついさっきまでは、心のどこかで期待していた。
研究所から逃れて、自由に生きていけるんじゃないかと。
３つの選択肢。
だが、それは幻想にすぎなかった。
優三を待っているのは、確実な「死」だけだったのだ。
選択権など、端から無かったのだ。
唾を呑み込むこともできないほど緊張した喉で、優三は言った。
「また・・・私や二葉と同じ運命を作り出したいですか？私も二葉も不幸です。不幸な人間を作って、どうしようというのです？」
「人類発展の礎となるのだよ。」
「不幸な子が生まれることが『発展』ですか？」
「不幸かどうかは本人の問題だ。大体、この世に幸福な人間が一体どれくらいいると思う？産まれて間もなく親に殺される子もいれば、

大切に育てた子どもに殴り殺される親もいる。幸せの絶頂だと思っていた矢先、通り魔に殺されたり、詐欺で全財産失って首をつる老人もいる。人間とは本来、不幸を背負って産まれるのだよ。それをどう受け止めるかが問題だ。人工児である君だって同じだ。君はこの世で一番美しい。例え遺伝子操作の結果だろうと、その美点を持って産まれたことを喜べばいいんだ。幸せだと思えばいいんだ。この世には、美点を一つも備えずに生まれる人間が殆どなのだから。」

「そんなの・・・！科学者の傲慢です。遺伝子操作で美点を備えた人間を作り出して、『喜べ』だなんて。」

「じゃあ聞くが、整形手術で美人になるのと、遺伝子操作で美人をつくるのと、何が違う？双方とも人為的につくられたものだろう？」

「違いますわ！整形は本人の意思で行われるものではありませんか？でも、私は違う！それに私は、人間が、自分の意のままに人間を作り出すことがおかしいと言ってるんです！そんなもの、人類の発展ではありません。自然への冒とくです。発展どころか、私は、滅亡をもたらすと確信しています！」

基は眉をひそめた。

「そういう凡人の言い分は聞き飽きている。倫理なんて、世の中で起こっている理不尽な事象の中では虚しい理想にすぎない。正義を振り翳しても、悪に殺されればそれでお終いじゃないか！人には、それぞれの生きる道がある。私は、私の道をとうに理解し、受け止め、全うしている。優三も、同じだ。観念していたはずだろう？真崎潤一が死に、同時に死人にされて、もう、どういう結末を辿るべきか覚悟しているだろう！？」

「いいえ・・・、いいえ！」

優三は振り絞るような声で反抗した。

「もう、沢山です・・！私は、私として生まれながら、私の思うように生きられない。誰かの所有物で、その呪縛から絶対に逃れられないなんて！」

「それが、君の運命なのだよ。君の生まれた理由を考えればわかる

ことだろう！？」
基は立ち上がり、優三の腕をつかもうとした。
が、差し出された基の手から逃れるように優三は身を翻した。
「優三！」
フランス窓を勢いよく開け、優三はベランダに出た。
冬の冷たい風が、基の胸元に吹き荒ぶ。
ラベンダー色のロングスカートが優三の細い足にまとわりつき、クリーム色のブラウスが風をはらんではためいている。
優三は、決死の形相で基をにらみつけた。
「所長、よく覚えておいてください！運命とは、自分で変えられるものなんですよ！」
「違う！どんな事象も、すべては必然だ！人間は、自分の意思で選択した道を生きていると思っているが、それは違う！人事を尽くして天命を待つ！それが人の道だ！！」
優三が何を考えているのかわかるから、基は迂闊に手を出せない。
こんなにも背筋がざわめくのは、優三の本気を勘付いているからだ。
優三の白い肌が、透き通るように青い。
沈黙が続くことが怖い。
だから基は叫び続ける。
「こんなところで死んでみろ！警察の厄介になる！死人であるはずの君が生きているとなれば、真崎の家はどうなる！？」
「素敵だわ！そうよ。私はずっと真崎家の正体を世間に暴露してやりたかった！他人の介入を得るために何度も自殺を図ったし、逃亡もした！でも、ずっとあの男に阻止され続けてきたのよ！それがこんな形で叶うなら、これ以上のことはないわ！」
基は、優三を引き止めるための手段を次から次へと模索した。
「二葉は！？二葉にはどう説明する？また精神を病むぞ！」
「そうしたら、所長がまた手術すればいいじゃないですか？『記憶を消す』！傑作だわ！」

基は胸に麻酔銃を隠し持っている。
だが、それを優三に悟られたら最後、飛び降りられてしまうだろう。
あとは、引き金を引くのが早いか、飛び降りるのが早いかの差になる。
優三の美しさが、儚い命を象徴しているようで怖い。
基は、わからなくなっていた。
今、優三を引き止めている理由は何か。
大事な実験台を失いたくない、それに尽きるのか。
それとも、人の命を、失わせたくないのか。
それとも、多くの悪事が世間に曝されることを怖れているのか。
優三の黒い瞳が、ふと力を抜いて揺れた。
「思い出しましたわ。・・・私の罪を。」
「罪？」
「私は一度だけ、殺人教唆の罪を犯していたんです。」
「・・・そうだったか？」
「二葉がひどいいじめにあった時、いじめた生徒を誘拐するよう頼んだのは私です。実験台として刻んでしまえと言ったのは私！なのに、今の今まで忘れて、聖女面していたんです。人から後ろ指指されるようなことはしてこなかった、なんて思っていました。何という愚かしさ！人からの仕打ちは死ぬまで忘れないのに、自分がした仕打ちは簡単に忘れてしまえる。」
基は、息を殺して優三の次の行動を見守る。
優三のセンチメンタルな告白は、死と生の狭間にある。
紙一重の危うさ。
優三の唇が、大きく開かれた。
「人類の発展なんておっしゃるなら、己の犯した罪を絶対に忘れない遺伝子を作りなさい！人にとって本当に必要なものを、人間が作り出せるなどと思い上がっているのなら！！」
と、次の瞬間。

優三がベランダの手すりに指をかけた。
基はハッとして、胸元に手を入れる。
優三の体が半分、鉄柵より上に乗り出した。
いけない。
引き金を引いても、身体は下へ落ちてしまう！
基は咄嗟の判断で、足を踏み出した。
たった三歩！
それが、こんなに遠いとは！
基の手は、宙に揺らめくスカートの端をつかんだ。
だが、それは空気を掴むのと同じ結果しかもたらさなかった。

ズシッ・・・

重い音と振動が、基の身体を突き抜けた。

第１１話その３

寒い、曇りがちな昼下がり。
基（もとい）はベランダから下を覗くことはせず、すぐに窓を閉めた。
次に玄関扉を少しだけ開け、辺りに人影が無いことを素早く確認すると、部屋を出た。
ここはマンションの６階。
エレベータを待てず、階段を転げおちるように下った。
管理人のいるエントランスではなく、南側の庭に直接出られる裏口を選択する。
ベランダからの眺めを満たすには足りないが、１０ｍほどの奥行きには芝生が敷き詰められ、垣根代わりに高さ５ｍほどの常緑樹が植えられている。
うつぶせに倒れている細い身体を見つけて、基はすぐさま抱き上げた。
マンションを見上げるが、誰も覗き込んだりはしていない。
人一人が転落した振動と音にも関わらず、誰かが近づいてくる気配もない。
他人との付き合いや干渉をできるだけ避けられるマンションを探した甲斐があったというものだ。このマンションは独身か共働きの夫婦ばかりが暮らしている。小学生以下の子どもや、専業主婦も存在しないことを確認した。だから、夕方まではほとんど無人状態になる。
それが、幸いした。
基は、優三の出血が大したことがなく、芝生に痕跡を残していないことを注意深く点検し、足早に駐車場へと向かった。
車の後部座席に優三を横たわらせ、そこで初めて脈を確認した。
骨や内臓、脳の損傷は相当だが、まだ、死んではいない。
６階からであること。そして、芝生のクッションでダメージが少

なくて済んだようだ。
基は運転席に乗り込むと、携帯電話を手に取った。
「・・美鈴か。緊急事態だ。今から私の言うことを、すべて確実に遂行してくれ。」

別れは、いつも突然訪れる。
二葉が目覚めたとき傍にいたのは、美しくて優しい優三ではなく、出っ張った頬骨に氷の眼鏡を乗せている美鈴だった。
二葉がびくっとして飛び起きると、美鈴は眉ひとつ動かさず言った。
「これから、私とここで暮らすのよ。」
「・・・!?」
二葉にとって美鈴は、セシリアを奪った敵である。
美鈴にとって二葉は、真崎潤一を殺した張本人である。
お互いの最も大事な人を奪ったという事実。
それを背負って同居していくなんて。
美鈴自身も、こんなつもりではなかった。
二葉が高校を卒業するくらいまでは、優三が保護者代わりを務めるのだと思い込んでいた。
だが基は、優三を実験台として研究所に連れ戻すと言う。
「ならば、二葉は一人で暮らすことになるのですね?」
美鈴がそう言うと、基は首を振った。
「いいや、それは駄目だ。二葉を一人にはできない。いつ、どこで狙われるかわからない身だし、逃げ出されたり、自殺されても厄介だ。お前が、きっちり見張っておけ。」
「私は・・・!」
美鈴は二葉を許してなどいないし、一生憎み続けると宣告したかった。
だがそれは、潤一をこの上なく愛していたということを兄に告げるのと同じようで、言えなかった。

兄が自分の気持ちを知っていることは百も承知だ。だが、それを自分の口から告げるのは気恥ずかしい。だから結局、兄の言うとおりにした。

同居の日は、思いがけなく早く訪れた。

兄、基からの突然の電話。

基は優三を連れて研究所へ戻ったが、基の到着の前に美鈴は研究所を出た。

それは、優三の自殺未遂の後始末をつけるためだった。

マンションの住人の誰もが、本当に優三の身投げに気付いていなかったか。

優三と基の言い争いを、近隣の誰しもが聞いていなかったか。

墜落の形跡が、残ってはいないか。

そのほかにも、基に指示された無数のチェック項目を一つ一つ確実に潰していかねばならない。それは、2～3日で片付くことではない。この2月でマンションとの賃貸契約が切れる。別のマンションへ引っ越すまでの約20日間をフルに活用して、調べつくさねばならない。その張り詰めた日々が、二葉への憎しみを考えずに済ませてくれるだろうか。

大きなため息を何度も吐きながら、美鈴は重苦しい任務に頭を抱えた。

本当に、これは研究のためになるのか。

今の自分が耐えることで、人類の発展に繋がるのか。

わからない。

しかし、すべて研究の役にたつのだと信じなければ、前へ進むことができない。

美鈴と二葉は、会話を一切交わさずに日々を過ごしていった。

美鈴は、優三の消息について一言も二葉に説明はしなかった。

二葉も、美鈴に訊くことができなかった。

12歳のあの日も、養父母から突然引き離された。養父母の行方は、全くわからないし、どんなに尋ねても教えてもらえなかった。

今回だって、どうせ同じだ。
優三を恋しがっても、二葉の意思でどうにかなるものではないのだろう。

美鈴は、優三が二葉に与えたものを、すべて捨てた。
服も、本も、雑貨も、ありとあらゆるものを、処分した。
「道具には、必要がないものでしょう？」
唇を噛み締めて怒りに堪えている二葉に、美鈴は言い放った。
「この1年、あんたと優三は人間ごっこをしていたの。満足したでしょう？でも、それは全部幻だったのよ。・・・思い出しなさい、道具であることを。道具としての、使命を。あんたを存在させておく理由は、ただ、研究所の発展に少しは役立つと思っているからだけ。役に立たないと判断したら、私はあんたを・・・壊す。」
美鈴の三白眼は、眼鏡の奥で二葉を鋭く捕らえている。
二葉は、恐怖よりも、覚悟をしていた。
美鈴は本気だ。
使命を果たさねば、いつでも、容赦なく殺されるだろう。
美鈴はそれを躊躇わないし、容易くやってのける。
美鈴と暮らす日々を重ねれば重ねるほど、二葉は冷静に自分を見つめなおしていった。
そしてその冷静さは、やがて、二葉の心を冷たく凍らせていった。

二葉の瞳から輝きが失せるまでに、そう時間はかからなかった。
心神喪失。
記憶喪失。
錯乱状態。
そんな過酷な精神状態を乗り越えた二葉が、健やかに安らげるわけがない。
ただ、かろうじて正常さを保つことができているのは、たった一つの希望があるから。

セシリアを救い出すために、自分は存在しているということ。
セシリアを救い出すことができるのは、自分だけであるという自負。
厳しい状況の数々が、二葉を使命に目覚めさせたといっても過言ではない。
ばらばらのように見えた出来事すべてが、実は一本の道に結びついていたのだ。

3月に届いた高校の制服は、ネイビーブルーのセーラー服。
白いライン、同系色のネクタイ、校章入りのソックス。
二葉はそれらを見つめながら、思った。
これは、制服ではない。
使命を果たすための、戦闘服のようなものだ、と。
（セシリア・・・。必ずいつか、救い出してあげる。あなたを救える手段が実験台を捧げる以外にないというから、私は罪を犯す。あなたを救うためだけに、今私は、この世に存在しているのだから。）

第１２話その１

温暖化の影響か、今年も桜の開花は早かった。
白桃色の花びらから緑の葉が覗き始めた４月の第一日曜、遠野二葉は高校の入学式を迎えた。
セーラー服の胸元を飾るネクタイを気にしながら、二葉はまっすぐ前だけを見据えていた。
初めてのことばかりで周囲は皆、不安以上の期待に満ち溢れた表情を浮かべているというのに、二葉の青白い顔は固い決意で強張っている。
クラス発表を見てから、教室へと向かった。
１年２組。
伝統校らしい趣の廊下に、木製の引き戸。だが、造りは頑強でロココ調の飾り彫りが施されている。
机の上に貼られた名札を確認して、席についた。
『トオノ』なんて中途半端な苗字は、いつも二葉を教室の中央に置く。
やがて教室の所々で、会話が始まった。クラスの３分の１は高校からの入学だが、残りは中学からのエスカレーター組。殆どが顔見知りだ。
新参者の二葉には、誰も話しかけない。
二葉も、誰とも目を合わせないように俯く。
（私がしなければならないことは・・・ただ一つ。）
奥歯を噛み締めながら、何度も、何度も呪文の様に繰り返す。
どんなに素敵な出会いがあっても、素晴らしい出来事があっても、それらはすべて蜃気楼にすぎない。
「それ、ピアス？」
突然の声に驚いて、二葉は息を呑んだ。
顔を上げた先には、二人の女子の厳しい表情があった。

「私達は風紀委員なの。新入生のチェックに来たんだけど、入学早々いい根性ね。」
二葉は、頬にかかるサイドの髪で耳元を隠しているつもりだった。だが、深く俯いていると、その髪が耳たぶから外れてしまうのだろう。
「私達と一緒に来てくれる？」
風紀委員と名乗った二人組は、ネクタイに刺繍された糸の色から、2年生だと推測できる。
二葉は、黙って立ち上がった。
美鈴の言いつけは、「絶対に問題を起こすな」。
ここで風紀委員に逆らって言い合いになるより、おとなしく職員室に行って、教師から風紀委員に「宗教上の理由」という届出を説明してもらった方が余波が少なくてすむ。
入学早々風紀委員に連れられた二葉は、その後、二度と風紀委員に注意されることはなくても、事情を知らないクラスメイトから「校則違反」というレッテルを貼られることになる。
誰からも声をかけられず、冷たい視線だけを浴びる日々が始まった。
（いいんだ。どうせターゲットを見つければ、不登校になるんだし。いい理由付けになるじゃない？そうよ。私はここへ、友達作りに来てるわけじゃないのだから・・・。）
それに、今まで見てきたものや味わった地獄に比べれば、どうということもない。
居心地の悪い教室の中央で瞼を閉じながら、二葉は同じセリフを何度も心の中で繰り返した。

5月のゴールデンウィーク明けの昼休みのことだった。
二葉の隣の女生徒が「キャっ！」と小さく叫んだと同時に、飲み物がばらまかれる音が床に響いた。
甘ったるいミルクティの臭いが立ち上る。

二葉の黒革の鞄にも、その飛沫はかかっていた。
「やだっ、ごめんなさい！」
黒いストレートボブの艶やかな髪を揺らして、少女は白いハンカチで二葉の鞄を拭き始める。その間も、ずっと「ごめんなさい、ごめんなさい。」と繰り返す。二葉を、よほど怖れているのか。それとも生来の性格なのか・・・。
「・・・もういいから、雑巾で机と床を拭いたほうがいいんじゃない？」
しゃがみこんだまま二葉を見上げた少女の眼は、ハッとするほどの漆黒だった。
「そうする。・・・本当に、ごめんなさい。」
少女が足早に教室を出て行くと、周囲からは溜息交じりの失笑が漏れてきた。
「ほんと、学習しないよね。」
「中学時代からずっとじゃない？よくここまで上がって来れたよね。」
「そうそう、数学なんか、２０点以上採ったことないらしいじゃん。」
どこの学校でも、どんなに「名門」と世間で言われようと、人の口はいつも人を罵る。そういう時の人の顔を、鏡に映してみてもらいたい。きっと、どんなときよりも醜いはずだ。
（・・・なんて、犯罪者の片棒担いでいる私が言えることじゃないか・・・。）
やがて、少女が雑巾を持って戻ってきた。
よく絞っていないらしく、水滴がポツリポツリと床を濡らしていく。
あんな雑巾で拭いたら、ミルクティが水で薄まるだけだ。
二葉は、少女に手を差し伸べた。
「その雑巾、貸して。」
「・・え・・？」

「貸して。」
二葉は奪い取るように雑巾をつかむと、ガラス窓から身を乗り出して、雑巾を力いっぱい絞り上げた。下は緑の芝生。人もいないし、別に問題はない。
「はい。」
しっかり絞られた雑巾を受け取った少女は、半ば唖然としていた。こんな予想外の展開を、受け入れきれていないのかもしれない。
午後の授業が始まり、二葉は初めて隣の少女を意識するようになった。
５時間目の古文の担当は７０歳に近い品の良いお婆さん先生で、どうしても睡魔が襲ってくる。一応みんな必死でノートをとっているのだが、隣の少女は授業から２０分後、見事に舟をこいでいた。時々ハッとして目をあくのだが、すぐ瞼が重くなっていく。
見てはいけないと思いつつ、二葉の目はすでに少女の様子に見入っている。面白くて、どうしても目が離せないのだ。
と、そのとき。
「佐々木さん！」
甲高い、年配女性特有の声音が、気だるい雰囲気を吹き飛ばした。お婆さん先生の視線からして、「佐々木」というのが、二葉の隣の少女の名らしい。
「佐々木さん、佐々木望美（ささき・のぞみ）さん！？」
しかし、望美はまだ夢うつつの状態だ。
二葉はためらいがちに、望美の腕をつついた。
「・・・え、なに？」
瞼が半開きの状態で望美は二葉を見ている。二葉は眉をひそめて、「前を見ろ」とばかりに、人差し指で前方を小さく指差した。
望美は不思議そうな面持ちで、何となしに教壇の方を見た。
そこに待っていたのは・・・・
結局、望美には放課後の居残りが課せられた。

「自業自得。」
嘲笑交じりの揶揄が飛ぶのを二葉は聞いたし、望美自身にも聞こえているはずだ。
しかし二葉にとって、それは他人事ではなかった。
同じような目に何度もあっているし、遠い記憶の中で、同級生からひどい暴行を受けた覚えがある。言葉の暴力も身体の暴力も、どちらも心に深い傷を刻みつけ、それは例え癒えても完治することはないだろう。
だから、望美を見ていると胸が痛む。
放課後、人気のない教室では、望美が一生懸命古文の課題に取り組んでいた。
望美の背後から、春の夕日が教室全体をオレンジ色に染め上げている。
二葉は、意を決して望美に近づいた。
誰とも親しくならず、ただ、セシリアのために任務を機械的にこなそうと思っていた。
しかし、どうしても望美を放っておけない。それに、望美の存在なら盗聴器で美鈴に知られても問題はないだろう。望美はお世辞にも美少女ではないし、特別な能力も認められない。統率力どころか、他人のお荷物にならないようにしているのが精一杯という感じだ。美鈴が欲しがる要素は一つもない。
「・・・できた？」
突然話しかけられて、望美はひどく驚いたように顔をあげた。しかもそこにいるのは、風紀委員に入学早々目を付けられた一癖も二癖もありそうなピアス女である。隣の席にいることを認識しながらも、できるだけ見ないように、関わらないようにしていた存在・・・のはずだった。今日の、昼休みまでは。
望美はびくびくしながら、「ううん、まだ・・・。」と、小さく言った。
二葉は隣に座り、課題のプリントを覗いた。

「・・・なんだ、今日やった所ばかりじゃない？」
「そう・・だけど、古文苦手なんだ。古文自体は嫌いじゃないんだけど、あの先生が・・・ね、何言ってるか理解できないっていうか、理解しようと思って一生懸命聞いていると眠たくなるっていうか・・・。」
二葉は、小さく笑った。
「わかる、それ。声も小さいし、黒板の字も小さいし。」
「そう！そうなんだよね！駄目なんだ、ああいう、メリハリのない授業。」
「私立って、定年無いのか聞きたいくらいよ。」
「あ、中学の時はね、骨董品みたいなお爺さんいたよ。歴史教えてくれたんだけど、本人が歴史の生き証人みたいな感じだった。」
二葉が声をあげて笑うと、望美も一緒になって笑った。
「知らなかった、遠野さんも笑うんだねー。」
「佐々木さんこそ・・っていうか、私、隣が佐々木さんっていう名前だってこと、今日初めて知ったんだけど。」
「ひっどーい！それはないよー。」
望美の笑い方は、予想外に快活だった。しゃべり口調も、はきはきしている。
二人は課題の答えを考えながらも、ずっと無駄話をしていた。
望美といると、二葉は自分でも不思議なほど沢山喋ってしまっていた。
それは、本当に楽しい時間だった。
6時過ぎに校門で別れ、その帰り道に二葉はふと、我に帰った。
こんなに笑ったのは、一体いつ以来だったのだろう？
盗聴器を忘れて、任務を忘れて会話をするなんて、今まであっただろうか。記憶に残っている限りでは、まず、ない。
（・・・駄目よ。今日は、調子に乗りすぎた。）
細い足に巻きついているソックスを俯き加減に見つめながら、二葉は呼吸を整えた。

いくら望美がターゲットになりえないとしても、これ以上深く関わることは許されない。二葉の素性を知られることも、不登校の理由を失うことも、美鈴が許さない。

恐る恐る家に戻ると、美鈴は不在だった。

こういう時、大抵美鈴は研究所に呼び戻されている。今日も、おそらくそうだろう。

二葉は安堵の溜息をついて、マンションの非常階段へとゆっくりと進んでいった。

マンションの鍵を二葉が持つことを、美鈴は許さない。

美鈴が不在の間、二葉は出入りの自由を奪われる。二葉が外出時に美鈴が出かければ、二葉は締め出しを食い、二葉が家の中にいる時に美鈴が出かければ、二葉は外出できない。このマンションはオートロックのため、美鈴が不在時に二葉が外出すれば、美鈴が戻らない限り家の中に入れない。その覚悟があるなら、外出すればいいということだ。

美鈴は、二葉を徹底的に支配するためなら手段を選ばない。二葉が自分自身を研究所の道具だと自覚するために、脈絡ない暴力を振るい、頻繁に口汚く罵る。持ち物も最小限しか買い与えず、娯楽や趣味なども当然許さない。

二葉は、屋内の非常階段の中央に腰を下ろした。

蛍光灯の青白い色があれば、怖くはない。

気候も良く、温かいし、空腹が満たされないこと以外は、問題はない。

（今日はここで眠るのか・・・。）

調子に乗っていた今日という日に相応しい罰かもしれない。

クラスメイトの誰しも、こんな生活を強いられている同級生がいるとは想像だにしないだろう。

階段の細い手すりに肩を預けて、二葉はゆっくりと目を閉じた。

明日には、また元の自分に戻ろうと思う。

今日のことなど無かったかのように振舞わねばならない。

それが自分に課せられた役割だ。

冷酷な眼差しは、得意だ。

少し遠くを見つめて、強い決意を心に宿せばいい。それだけで、誰も話しかけなくなる。

結局昨晩、美鈴はマンションに戻らなかった。美鈴は必要最小限の金しか二葉に渡していないため、今、二葉は五百円足らずしか所持していない。他の生徒の昼食代以下の金額で、あと何日過ごさねばならないのか、見当もつかない。いっそ空腹で倒れて病院に担ぎ込まれようかと一瞬思ったが、それが美鈴にばれた瞬間にセシリアの生命維持装置の電源が抜かれることを想像して、やめた。セシリアは二葉のアキレス腱で、研究所にとって最高の人質なのだ。

『全品税込み９５円』が売りのコンビニで食パン一斤を買った。これが一番お腹を満たす。一食２枚ずつ食べても４食分あるのだから、おにぎり一つ買うよりずっと経済的だ。

公園のベンチでパンを手で千切りながら大事に食べ、水のみ場で喉を潤してから、学校へ向かった。

時折、真崎家にいたことを思い出す。

通っている学校のグレードは変わらないのに、この生活は落差がありすぎる。優三は十分な愛情と、金と、衣食住を保障してくれていた。今と同様に外出の自由などは無かったが、それでも満たされていた。

その優三は、今、どうしているのかわからない。

真崎潤一が死んだとき、優三の瞳も死人のようだった。だが、１年間二人だけで生活している中で、優三は二葉を守る責任感で生気を奮い立たせているように思えた。

あの１年だけだったかもしれない。

研究所に引き取られて以来、人間らしい扱いを受けたのは。

本当は、優三も、二葉も、「人間」ではないのに。

研究所で人工的に作られた、ヒト型の「生物」で、「試料」に過

ぎないのに。

だから美鈴は二人の生活を未だに「人間ごっこ」と揶揄するのだ。

第１２話その２

望美との会話を避けるように、二葉は始業ギリギリで登校した。
しかし、望美は教室にいなかった。
意気込んでいただけに、拍子抜けする。
遅刻か欠席か。
だがクラスメイトは、そんなこと誰も気にしていないようだ。・・・二葉だけを除いては。
普段と変わりなく、授業が始まった。
１時間目は世界史Ｂ。
望美は、世界史の授業が一番好きだと言っていた。曰く、「歴史はどんな物語よりもドラマチック」らしい。
「あー、今日の日直は誰だ？」
５０歳すぎに見える担当教師の問いに、二葉はハッとなって立ち上がった。
「・・・はい、私です。」
「悪いが、職員室へ行って新しいチョークをもらってきてくれないか。」
「はい。」
二葉は一人、教室を出た。
と、その外には思いがけず、望美の姿があった。
「・・・何してるの？」
望美は「シッ！」と人差し指を唇にあて、小さく囁いた。
「だって、入りづらいから。」
「は？じゃあ、１時間目が終わるまでここにいるつもり？」
「・・・そうなるかな。」
二葉は呆れ顔で溜息をつき、
「今、チョークを取りに職員室に行って戻ってくるから、そしたら一緒に入ろう？」

「うん！」
望美はにっこり笑って、「ここで待ってる。」とばかりに、廊下に座り込んだ。
望美の屈託のなさは、二葉が普段背負っている重荷や緊張をことごとく崩していく。夕べ、非常階段で眠ったためにキシキシしている身体の痛みさえ忘れてしまう。
二葉が職員室から戻ると、望美は廊下の壁にもたれて転寝をしていた。本当に、どこまでも呑気というか、緩んでいるというか・・・。
「佐々木さん、行くよ。」
「んっ・・・。」
望美は目をこすりながら鞄を持って立ち上がり、二葉と共に教室に入った。
「１８番、佐々木望美です。遅刻しました。すみません。」
教師に謝り、席に着く。
どうも、望美の遅刻はめずらしいことではないらしい。「またか。」という空気が教室全体に漂っている。
昼休み、二葉は望美から「お昼を一緒に食べよう。」と誘われた。
二葉は、クラスでは校則違反のレッテルを貼られた云わば「不良」である。誰も話しかけないし、当然ランチも一人だった。そこへ、クラスではやはり浮いている望美が声をかけたのだ。それは、周囲から見れば嫌われ者同士がつるんだ、みじめな二人組という印象だったのかもしれない。しかし二葉はそれを断った。
「・・・ごめん、昼は・・・ちょっと、」
曖昧な断り方が、複雑な事情を察知させたのかもしれない。望美はすぐに「あ、わかった。ごめんね。」と言って手を振った。
（「ごめんね」・・って、私が言うべきセリフだよ・・・。）
二葉は下唇を噛んだまま、ゆっくりと踵を返した。
今日の二葉の昼食は食パン２枚。バターやジャムも何もない、安物でパサパサの食パン２枚だ。そんな惨めな食事を、他人に見られ

たくない。普段は、美鈴が栄養バランスが整った固形食品とドリンクを持たせてくれる。それを間近で見られるのも嫌なので、昼食はいつも屋上の隅でひっそりと済ませる。屋上の立ち入りは原則として禁じられているため、誰かに見られる心配なく、落ち着いて食べていられる。

手すりから身を乗り出せば、灰色のビル街が一望できる。ところどころに不可思議な形のビルが飛び出し、その中央に赤い東京タワーが聳え立っている。

いくつ目の学校かは覚えていないが、一度、赤坂の迎賓館が近くだったことがある。もちろん中の砂利さえ踏むこともできないが、見上げるほど高く聳える優美な門扉が大好きだった。その映像だけは、なぜか左の脳裏に焼きついている。

（ヒトの顔は・・・覚えられないのに。）

あんなに大好きだったセシリアの顔も、記憶喪失前のことを思い出しきれていないからか、「尋ね人」のチラシに掲載されていた写真の笑顔しか覚えていない。ましてや、この間まで一緒に暮らしていた真崎優三の顔も、明確に思い出すことができない。断片的な記憶を繋ぎ合わせても、顔の細部まで頭の中で再現することができない。今一緒に暮らしている美鈴など、恐ろしくて正視したことさえないのだから、思い出す術もない。

その日は美鈴が帰宅していたため、家の中に入ることができた。

美鈴は、疲れた顔で二葉を眺めていた。二葉がその視線を見つめ返すと、美鈴は突然眉を吊り上げた。

「今、私を睨んだわね？」

次の言葉はおろか息を吐く間もなく、二葉は床に張り倒されていた。

「うざったい顔。人間の顔した生物なんて、見てるだけで吐き気がするわ！」

美鈴が研究所から戻ったばかりの時は、大抵すこぶる機嫌が悪い。そもそも美鈴が研究所に呼び戻されるときとは、研究所長の基（もとい）の手

に負えない事態が発生したときに他ならない。そしてそれは多くの場合、失敗に終わっている・・・と、思う。そうでなければ、相当疲れているのだ・・・と考える。
（私を憎んでいることはわかっている。何かあれば、すべて私に返ってくるのもわかる。）
美鈴の暴力に対し、二葉も始めは恐れ、膝を抱えて泣いていた。
だが、理由を悟って納得してしまうと、精神の苦痛は和らいだ。
夜通し泣くことも、授業中に思い出し泣きをするようなこともなくなった。
朝、制服に袖を通すたびに、決意を秘めた眼差しで玄関を出ることが出来る。
だが今は、その眼差しをことごとく崩してくれる存在がいる。
「おっはよう、遠野さん。」
席に着くや否や、満面の笑みで望美が出迎えてきた。
「・・・おはよう。」
「ねえ、数学の宿題やった？」
「そりゃあ・・・。」
「よかったぁ。あのね、答え合わさせて。」
「え？」
「全っ然自信がないの。ね、お願い！」
「そんな・・・、私だって自信なんかないよ。」
「平気！私より絶対正しいから。」
どこから出た根拠かわからないようなことを捲くし立てながらも、二葉はいつの間にか自分のプリントを机の上に出していた。
ペタッと貼りつくように望美は座り込んでくる。
望美は二葉のプリントと自分のを見比べながら、眉間に皺を寄せていた。
「・・・駄目だ。修正しようもないほど私の答えと遠野さんの答えが違う。」
「え、そんなに違う？」

望美のプリントを逆に覗き込んだ二葉は、すぐに下唇を噛んだ。
「・・・ねえ、この問題、どっから答え出したの？式とか何にも書いてないけど。」
「ああ、それは見た目！」
「見た目？」
「そう。ほら、ここの角度でしょう？どう見ても４５度に見えるから。」
「・・・駄目だって、そういう根拠のない答え出しちゃぁ・・。」
よくこれで名門校の中学受験を乗り切り、ここまで来れたものだ。クラスメイトの揶揄は伊達ではないということだ。
結局、訂正可能な箇所だけ即席で直させ、宿題プリントを提出した。
望美だって、普通の高校でならそこそこの成績がとれるのかもしれないが、この名門校では完全な落ちこぼれだった。
地味な見た目。
行動は緩慢で、運動神経も無い。
芸術方面の才能もないようだ。
あるのは、くったくのない明るさと人懐っこさだけ。
将来はこの性格を活かして、「俺がいなきゃコイツは駄目なんだ」的な男性に見初められるのを待つか。
望美は、一度心を許したらどこまでも、というタイプらしかった。
二葉がドライにかわしても、次の日には何もなかったかのように再びくっついてくる。
二葉も、懐いてきた捨て猫を振り切れないかのように、何やかやと相手にしてしまう。
望美を見ていると、時々フッと脳裏をよぎるものがある。
だが、それが何なのかは全くわからない。
落としてきた記憶が多すぎて、何が現実で何が夢だったのかわからなくなる。
思い出したことが「過去の記憶」なのか「思い描いたことのある

幻想」なのか・・・
「あのね、明日は一緒にお昼食べてくれる？お母さんが二人分持たせてくれるから。いいでしょ？」
「・・・それは・・・。」
「アレルギーとかあるの？だったら言って。」
「それは無いけど。」
「じゃ、いいよね？ね？」
二葉が浮かべた曖昧な笑顔が、ＯＫの返事になった。
両手を挙げて歓んでいる望美を見ていると、「それくらい、いいかな。」という気になってしまう。色々なことが、どうでもよく見えてしまう。
望美といると、楽だった。
気を使わなくていいから、息苦しくない。
無条件で懐いてくる子猫のように、望美は二葉に従順だった。
傍から見れば、二人は確実に「友人同士」だった。
だが。
二葉には、わからなかったのだ。
この「気楽」さは、望美を見下しているからこそなのだということに。
望美との付かず離れずの関係は、しばらく続いた。

第１２話その３

遅めの梅雨に入った。
二葉がそろそろ不登校になる季節の訪れだ。
二葉の中で、生贄となる生徒はすでに決まっていた。鈴木恭二という、学年トップの同級生だ。
二葉がこんなにも簡単にターゲットを決められたのには理由がある。鈴木は大したルックスでもないのに自分を「王子」と位置づけているいけ好かないヤツで、何かあると弱い望美を貶めるような発言を繰り返した。望美は「本当のことだもん、しょうがないよね。」と言って笑っていたが、二葉には許せない相手だった。
今は、鈴木がターゲットとして相応しいデータを集めているところだ。それが完了すれば美鈴に提示し、この学校での任務は終わる。
望美との関係も、終わりになる。
そんなある日、望美が突然登校しなくなった。
1日や2日なら「体調を崩したのか。」くらいにしか思わないが、1週間も続くと不安になる。担任に尋ねると、「ああ、ちょっと病気で熱が続いているらしい。」と言われた。
「お家の方から、連絡が入ってるんですか？」
「もちろん。どうして？」
「・・いえ、いいんです。すみません。」
一瞬、美鈴を疑ったのだ。
二葉と最も親しい望美を勝手にさらったのではないか・・・、と。
だが、もしそうなら美鈴は研究所に戻るはずだ。まだマンションにいるということは、拉致は実行していない・・・はず。
しかし、完全に不安を拭い去れるわけではない。美鈴が、いつ、どういう気を起こして誰を拉致するかなんて二葉にわかるはずがない。そして美鈴は、気まぐれだ。
二葉は焦った。

美鈴が変な気を起こさないうちに、さっさとターゲットを差し出したほうが賢明だ。
次の日も、望美は学校に来なかった。
盲腸にでもなって、入院しているのだろうか。
そんなことを考えながら、下校しようと校門まで来たときだった。
「・・・佐々木さん？」
そこには、私服を着た望美が立っていたのである。
望美は、はにかんだ笑顔で軽く会釈をした。
「一体、どうしたの？」
二葉が駆け寄ると、望美は前髪の奥の瞳で笑った。
「私、転校するの。」
「え・・・。」
二葉の目の前が、一瞬真っ暗になった。
晴天の霹靂とは、こういうことか。
望美はそんな二葉の心境を知ってか知らずか、話を続ける。
「実は私、1年前から漫画家やってるの。」
「・・漫画？」
「うん。それで、今回やっと連載の話をもらえたの。今までは何とか学業と両立してきたつもりだったけど、もう、こんな進学校じゃ絶対やっていけないって決心ついたから・・・通信制の高校に転校するんだ。」
一体、望美は何を言っているのだ。
今までの日常とは、まるで別世界の話をしている。
妄想癖が、ついにここまで来てしまったのか？
呆然としている二葉に、望美は言った。
「本当は、学校なんていつやめてもいいと思ってたの。でも、遠野さんに会ってからは学校が楽しいって初めて思えたから、結構・・・悩んだ。」
どうして望美が遅刻ばかりしていたのか。
どうして宿題忘れが目立って多かったのか。

どうして中学の頃から落ちこぼれのレッテルを貼られていたのか。
どうして授業中、居眠りが多かったのか。
それはすべて、望美が漫画家という多くの人が夢見ても届かない職業を手にしていたからだというのか。
何の才能も無いような顔をして、その実、宝石を隠していたというのか。
望美に対して抱いていた優越感など、二葉のとんだ勘違いだったというのか。
人懐っこい笑顔の裏で、望美は何を考えていたのだろう？
二葉に近づきながら、何を思っていたのだろう？
別れを切り出すのは、二葉が先のはずだった。
もうすぐ、無言のまま学校を去るはずだった。
それなのに、逆に別れを切り出されるとは！
二葉の唇が小刻みに震え、何も言葉にならない。
いや、言うべきセリフが思いつかない。
二葉の中で、言いようのないドロドロとした感情がゆっくりと渦を巻き始めた。
二葉の反応が何もないことに諦めの色を見た望美は、最後の別れを切り出した。
「いろいろ、ありがとう。遠野さんは優しいから、嬉しかった。遠野さんは漫画なんて読まないかもしれないけど・・・一度でいいから、見つけてね。」
校門前の大通りに、紅いスポーツカーが停まった。
望美はそれを見るや否や、二葉に手を振って車に乗り込んだ。運転席にいたのは、母親だろうか。鮮やかな色は、あっという間に薄ねずみ色の空気に溶けていってしまった。
まるですべてが、幻だったように。
家に戻ると、美鈴が待ち構えていた。
「・・・決まったでしょうね？誰をターゲットにするか。」

二葉は、唇を噛んで俯(うつむ)いた。
今は、ターゲットだの生贄だの、どうでもよかった。
しばらくは、心を空っぽにしたかった。
だが、美鈴は容赦なかった。
「鈴木恭二っていう子のデータを集めていたわよね？それを見せて頂戴。」
「・・・・。」
二葉はだまって、鞄の中からメモを取り出して美鈴に渡した。「データ」なんて大層なことを言っても、内容はただの手書きメモだ。二葉には、コンピュータの使用が許されていない。学校にコンピュータ室はあるが、こんな「拉致候補者メモ」なんてものを公の場で入力できるわけもない。
美鈴はメモにざっと目を通すと、二葉に背を向けた。
「これでいいわ。明日は学校に行きなさい。あさってから、行かなくていいわ。」
「・・・はい。」
二葉は自室に入ると、部屋の隅で膝を抱えた。
一体、この気持ちは何だろう。
腹立たしいとか、苛立ちとは違う気がする。
羨望か、妬みか？
指の関節を噛みながら、二葉は真っ暗な宙をにらみつけた。
あの時。
望美と別れるとき、何も言葉が出なかった。
本当は、何と言うべきだったろう？
今でも思いつかない。
ただ、重苦しい。空気も、気持ちも、何もかも。
次の日登校すると、教室は望美の話題で持ちきりだった。
転校したことも、望美が漫画家だったことも、皆知っていた。
「全然気付かなかったよね。」

「絵が得意なんて、言ってた？」
「さあ、あんまり眼中になかったからねぇ。」
「ペンネーム、『のぞみ』って平仮名で書くらしいよ。」
隣にある、主をなくした空っぽの机。
だが、そこには寂しさが感じられない。
「ねぇ！見つけたよ！」
一人の女子が、携帯を上に掲げた。
「ほら、ネットに出てる！昨日発売の『mC』だって！」
「『mC』！？超メジャーじゃん。」
「初連載って書いてある。今日の帰り、本屋に寄らない？」
「賛成！絶対見つけよう。」
現金なものだ。
今まで、散々望美を鼻先であしらってきたくせに。
だが彼女達は、望美の成功を素直に受け止めている・・と思う。
「あんな人の漫画なんて、くだらないに決まってる。」とか、「あんな人、いてもいなくても変わらない。」とか中傷する声は、意外なほど聞かれない。少なくとも二葉には、彼女達のような明るい感情など、全然湧いてこないというのに。
（そうか。本当は、『おめでとう、絶対読むから雑誌名教えて。』とか言えばよかったのか・・。）
一人の帰り道、学校の生徒には絶対会いそうもない小さな書店で、二葉は「mC」という雑誌を見つけた。
艶やかな表紙の見出しの左端に、「のぞみ」というペンネームが踊っている。
そっと数枚ページをめくると、巻頭のカラーページに望美の写真入りでインタビューが載っていた。
縦長の楕円に縁取られた写真の中の「のぞみ」は、教室の隣の席にいた望美とは全く違った。薄く化粧をしているからだろうか。モデルのように可愛らしく微笑んでいる。
棒立ちになって立ち読みをしていると、店の隅に座っている親父

の視線をビシビシと感じた。二葉は今の財布の中身を考え、雑誌の裏の値段を見た。買えは、する。
（・・・いいか、どうせ明日から登校しなくていいんだし。）
二葉は雑誌を買い、人気のない公園のベンチに座った。
落ち着いて、もう一度雑誌を開く。
インタビューでは「のぞみ」が、学校生活について語っていた。
―進学で有名な高校に通っているそうですね？―
『はい。でも中学からのエスカレーターですから、油断しちゃってあまり勉強してません。』
―授業は大変ではありませんか？―
『家では漫画を描くので精一杯ですから、勉強時間は授業がすべてなので、大事にしています。どんな教科でも、漫画を描く上でのヒントになりますし。』
―前向きな考えですね。ヒントといえば、お友達との交流もありますよね。―
『そうです。ストーリーを考える上でも人の心理は重要なので、どうしても人間観察してしまうのが悪い癖だと思うんですけど。』
―それは、お友達も怖いですね。いつ深層心理を読み取られているかわからないんですから。―
『もちろん、そんなの表面には出しませんよ。ただ、相手によって自分のキャラクターを変えるんです。相手の反応を予想して、行動します。私が思ったとおりの反応をすれば私の勝ち。なんて、いつも考えてるんですよ。』
―キャラクターを変えるというのは、すごいですね。―
『しばらくはクラス内を観察するんです。その中で、これはという標的を決めるわけです。そして、どう近づけば相手がのってくるか考えて、行動に移します。毎回違った性格の人を標的にしないと意味がありませんし、ドラマになりやすい性格の人かどうかというのも重要なポイントですね。』
そこまで読み進めて、二葉は胸がつかえる思いに苛まれた。

―友人関係もすべて、漫画の資料なんですね。―
『そうでなければ、プロになれないと思ってます。ですから、本当の意味での友達は作ったことがありません。言い方は悪いですけど、関わった人は、みんな私の漫画作りのための道具ですね。』
（道具・・・。）
聞きなれた忌わしい言葉が、二葉の胸を突いた。
―でも、相手によってキャラクターを変えていたら、クラスメイトが不審に思いませんか。―
『もちろん、そうならないように気をつけてます。まず、私はクラスメイトとは基本的に親しくなりません。そうすれば、標的に近づくときに出す性格が私の性格だと、皆が錯覚するでしょう？』
―それは、一つのクラスで一度しか有効でないのでは？―
『普通にやれば、そうですね。ですから私は、第一の標的は、大抵クラスで浮いてる人間にします。誰とも関わらない一匹狼みたいな人。そういう人との関わりなら、周りを巻き込まず1対1で観察できますし。で、大体の人間観察が終了したら付き合いをやめて、次の標的に移ります。次は、性格重視で標的にしますから、クラスの人気者の時もあれば、いじめにあっている子の時もあります。1年ごとにクラスがえがあるので、今までに結構な人数の観察ができましたよ。』
―今の標的は、どんな人？―
『校則違反で不良のレッテルを貼られている人。見た目よりプライドが高いから、優越感をくすぐると喜ぶタイプ。あと、孤独が全身からわかりやすく滲み出ているので、無邪気に優しくすると信用してくれちゃうんですよね。割と思ったとおりの反応を示してくれて、意外性がないのが面白くないんですけど。』
二葉は、雑誌を乱暴に閉じて立ち上がった。
一瞬、目の前が真っ暗になった。
怒りで、呼吸が荒くなっている。
望美は、この雑誌が二葉の目に留まらないとでも思ったのだろう

か？
クラスメイトが読んでも、これが二葉のことだと誰も気付かないとでも思ったのだろうか？
そんなはずはない。
読むことを承知で、インタビューに答えているはずだ。
だから、発売日には転校手続きをとったのだ。
望美が二葉に近づいたのは、すべて計算の上だったなんて。
友人関係を結んだのも、優しい誘いも、すべて漫画を描くためだったなんて。
ミルクティーを溢した事に始まり、放課後の会話も、人懐っこくついて回ったのも、すべて二葉を観察するためだったとは！
しかも、二葉が見下すように、あのキャラクターを演じていたなんて！
陰で笑っていたのだろうか。
二葉が、あまりにも望美の想像通りの行動をとるから。
昨日別れた時の二葉の表情さえ、望美にはいい材料になったのだろう。
優越感を抱いていた相手に置いていかれた時の人間の表情、という滑稽な瞬間を、望美は漫画のために、しっかりと瞼の裏に焼き付けたのだろう。
見下していた相手から、見事に馬鹿にし返されたのだ。
望美はこのインタビュー記事により、今までのクラスメイトと完全な決別をしたのだろう。　これから生きていく世界は別々であり、もう二度と平凡な高校生には戻らないという決意。　これからは住む世界が違う、と言いたかったのかもしれない。
二葉は言い知れぬ屈辱に、どうしていいかわからなかった。
とにかく今は、必死で奥歯を噛み締めることしかできない。
本能に任せた道順で、家に戻った。
リビングでコーヒーを飲んでいた美鈴は、二葉を見るなり言った。
「明日から学校に行かなくていい理由は作ってきた？」

二葉は荒い呼吸を抑えながら、美鈴に雑誌を見せた。
「・・？なんなの、これは。」
二葉は、望美のインタビュー記事のページをめくってみせた。
美鈴はしばらく黙って目を通し、やがて言った。
「これ、あんたのことね。なるほど、堂々と馬鹿にされたわけか。これなら明日から不登校になっても仕方ないわね。」
二葉は、うな垂れたまま動けなかった。
美鈴は雑誌を閉じると、
「次の転校先は決めてあるから。ただ真崎家のコネが無い今は、あんたにも頑張ってもらわないと。転入試験のために猛勉強してちょうだい。なるべく無駄なお金は積みたくないのよ。」
「・・・わかりました。」
自室に戻ったが、二葉は勉強する気になど到底なれそうもなかった。
今は、この沸々と煮えたぎるような感情を抑え込むのに精一杯だ。
爆発すれば、周りにあるものすべてを傷つけたくなる。それは、できない。
第一、傷つけられるほどの持ち物を、二葉は持っていない。
制服を着たまま床にしゃがみ込むと、模様の無い壁を睨み付けた。
ゆっくりと柔らかな下唇を噛むと、乾いた瞳から涙が溢れた。
頬を伝う熱い雫を堪えようと、何度も唇を噛みなおす。だが、やがて唇が震えて、噛むことができなくなった。
わからない。
どうして、泣いているのだろう。
泣く理由は、何なのだろう。
欺かれたことが、悔しいのか。
馬鹿にされたことが、許せないのか。
それとも、いいようにあしらわれていた自分が憐れなのか。
涙を流すなんて、一体いつ以来だろう。
肉体的な痛みも、気が狂うような出来事も、涙を誘うことはなか

った。
だが、今は止めどなく溢れてくる、痛み。
その痛みが恨みに変わる頃、次の朝がやってきた。
グレイがかった空は、明けきらない梅雨を引きずっている。
腫れた瞼を押し上げて、二葉はゆっくりと立ち上がった。

リビングには、眼鏡を外してニュースを眺めている美鈴がいた。
二葉は、覚めやらぬ感情を抱えたまま、それを行動に移した。
いつもは、感情を行動にぶつけた後のことをシミュレーションすることで、怒りを解消していた。だが、今はそんな気にはならないし、そのつもりもなかった。
「どうしたの？」
美鈴の問いかけに、二葉ははっきりとした口調で答えた。
それは、二葉が自らの意思で犯罪に手を染めた瞬間だった。

「もう一人、実験台は、要りませんか。」

第１３話その１

季節は何度か流れ、再び一枚ガラスが結露する日々がやってきた。
骨の髄まで染みるような冷たい空気で目覚める。
（・・・今日からは、もう登校しないでいいんだ・・・。）
ターゲットの名を、１０日前に美鈴に告げた。
そして昨日、美鈴はマンションに帰らなかった。

二葉は、ターゲットを選ぶことに躊躇いを感じなくなっていた。
今では、セシリアを冷凍催眠から目覚めさせるために、あと何人の生贄が必要なのか指折り数えている。
ダイニングで朝食を摂り、何気なく窓の外を見ると、景色がいつもと違うことに気付いた。
ひんやりとした空気を含んだガラスに近づくと、外は一面雪景色だった。
（めずらしい・・・。東京で雪なんて。）
だが、次の瞬間、二葉は不意にこめかみに鈍痛を感じた。
中学に入った頃から偏頭痛に悩まされてはいたが、今日のは特別に強い痛みだ。
瞼の裏からこめかみ、後頭部へかけて締め付けられるような感じと、時折金槌で殴られているような感じが交差する。
二葉はその場にしゃがみこんだ。
だが、どうにもならずソファに身体を投げ出した。
軽く口を開いたまま、目を閉じる。
美鈴がいれば薬をもらうのだが、その美鈴が今はいない。
薬棚は、鍵がかかっていて自由に開けられない。
このまま、痛みが治まるのを待つしかないのか。
こういう時、二葉は自分の罪を思い出す。

自分の犯している罪が、自分に返ってきたのだと思う。
セシリアとの美しい思い出は、記憶喪失の後遺症なのか、ほとんど思い出せてはいない。ただ、記憶を失う前からセシリアのために実験台を探し歩いていたという事実から、自分にとってセシリアがどんなに大切な存在だったかを推測して、自分を納得させている。
冷凍カプセルの中で眠っていた少女は、本当にセシリアなのか？
実在するセシリアは、二葉にとって本当は見知らぬ他人だったりはしないのか？
大体、本当に冷凍睡眠から目覚めさせることなど可能なのか？
そんな疑いを拭えない日もある。
だが、その疑いが現実だったとしたら、二葉はどうすればいいというのか。
美鈴の下を逃げ出すか？
研究所に逆らうのか？
耳たぶに埋められた盗聴器と発信機が本物である以上、反逆の先に待っているのは滅亡だけだ。それだけは、確かなことだ。
確かなことだけを辿っていけば、自分がすべきことは決まってくる。
研究所の所有物として生まれたときから、辿る道は決まっているのだ。

二葉が目覚めたとき、それは見慣れない、しかし、見覚えはある景色があった。
そこは、遠野遺伝子工学研究所の一室。
ハッと起き上がると、壁に埋め込まれたモニターの電源がつき、そこに遠野基（とおの・もとい）の顔が映し出された。
『目覚めたようだね。』
二葉は画面をにらみつけた。
「どうして、私はここへ？」
『頭痛で倒れただろう？ちょうど健康診断もしなければならなかっ

たし、美鈴に連れてきてもらった。良かったよ、発見が早くて。』
「・・・。」
『まだ暫らく休んでいなさい。もう少ししたら、食事を運ばせよう。』
休んでいろといわれても、もう眠くない。やることもないし、暇つぶしに考え事をすれば、嫌なことばかり思い出してしまう。肝心な記憶は、なかなか戻らないというのに。
白い天井。
臭いのない空間。
清潔というより、生物の存在を否定するかのような無機質な部屋だ。
宙を睨みつけていると、次々と人が倒れ死んでいった光景の記憶が蘇る。
そして、真崎潤一。
この研究所のオーナーだという彼を死なせたのは、二葉自身だ。
それを思い出し、二葉は思わず起き上がった。額を抱えて、眉をひそめる。
（そうだ、私はこの手で人を殺めていた・・。）
肺の奥が締め付けられるように痛みだし、息苦しくなる。
下唇を突き出して口を大きく開けても、肩だけが空しく喘いでいる。
と、その時部屋の扉が開いて白い防護服の人間が入ってきた。
新しく雇った研究員なのだろう。トレイにのった食事をテーブルに置き、そのまま退出していった。
褐色のスープにビスケット、それに栄養ドリンクらしき液体。
研究所での食事も、美鈴から与えられる食事もいつも一緒。味も一緒で、飽きるどころか口に入れるのを拒否したくなることも多い。これに比べれば、一斤１００円足らずの食パンの方がずっとご馳走だ。
これらの食事から解放されたのが、真崎優三との１年間。

美しくて優しい女性は、ある日突然姿を消した。
初めの頃は優三を思い出して時々泣いていた。しかし、思い出すたびに幸せな日々が恋しくなるだけで今の辛さに耐えられなくなりそうになり、思い出すのをやめた。記憶の奥に封印しようと決めていた。
だが、研究所に来ればいやおう無しに思い出される。
白くて、柔らかな手だった。
荒れた心を抱きしめてくれた、救いの女神だった。
（本当に今、どうしているのか・・・。）

二葉が次に目覚めたとき、傍らには美鈴が立っていた。
氷のような眼鏡の奥で、美鈴の目が光った。
「そろそろ麻酔が覚める時間だと思って迎えに来たのよ。正解だったようね。」
「麻酔？」
「今回の検査は時間がかかったのよ。手術台にものってもらったし、途中で目覚められたら困るからきつめの麻酔をしたの。」
「・・・。」
「今日からは新学期まで仕事をしてもらうわ。」
「仕事？」
「編入試験の勉強をしながらできる仕事よ。楽でしょ。」
美鈴は、わけがわからないという顔をしている二葉の腕を引き、ある実験室に入った。
ベッドに勉強机、勉強道具の置いてある生活空間とガラスの壁面で隔てられた無菌室。その中に横たわる小型のカプセルを見て、二葉は思わず息をのんだ。
そこに眠っているのは、生後まもない赤ん坊だった。
思わず近づいて、ガラスにへばりついて中を覗く。赤ん坊は白い服を着て、すやすやと眠っている。睫毛の長い、目鼻立ちのきれいな赤ん坊だ。

「真崎優三の子どもよ。」
「！？」
ハッとして美鈴を見上げると、美鈴は腕組みをしたまま言った。
「真崎優三が2週間前に産んだの。人工児が産んだ初の人工児。貴重な試料よ。」
「・・・奥様（優三）は・・・？奥様は、今どこに？」
二葉の質問に、美鈴は一度唇を噛み締め、そして答えた。
「死んだわ。」
「死んだ・・・？」
「出産後、体力が残ってなくて。まあ、普通に考えても高齢出産だったし。人工授精に相当時間がかかったし。」
「父親は・・・どうしているんです？」
「父親は真崎潤一よ。あなたが殺したんでしょ。」
「え・・？」
美鈴は二葉の疑問に答えようと口を開きかけたが、躊躇し、やめた。
「仕事は、その赤ん坊に異常が出たら私に知らせること。それだけよ。私達は今新しい研究で忙しいの。監視カメラがあっても、一日中監視していられないのよ。監視ごときに割く人員もいないしね。」
優三が死んだ。
そして、その子どもがここに眠っている。
そんな思いがけない現実を、どう受け止めろというのか。
呆然とする二葉を横目に、美鈴は部屋を出ようと踵を返した。が、思い出したように立ち止まって付け加えた。
「赤ん坊の身の回りの世話は、定期的に研究員がやるから手を出さないで。それからその子、泣かないように造ってあるから、勉強の邪魔にはならないわよ。」
「泣かない？」
「最近多いじゃない？子どもが泣き止まなくてうるさいから殺しちゃうっていう親。夜泣きでノイローゼになる母親とかもいるし。そ

ういうのの解決にならないかと思って、研究した結果よ。」
「それって、一生泣かないってことですか？」
「いいえ。言葉を話せない小さい子が自分の欲求を伝えるために泣くことを止めているだけ。」
「じゃあ、痛いとか、苦しいとかいうことは、どうやって伝えればいいんですか？」
「だから、あなたが監視するんでしょう？顔色が悪いとか、汗をかいてるとか、そういう細かいことに気付けっていうことよ。」
「それが、研究所の研究成果だというんですか。」
「何よ。何か反論したいの？」
「だって、そんな赤ん坊、変です。」
「変？便利じゃないの。」
「それは便利じゃなくて、わがままで自分勝手な人間の都合に合わせているだけです！赤ん坊は泣くんです、そんな当たり前のことを受け入れられない親の方をなんとかする研究をしてください！正常を異常にするのではなくて、異常な人間を正常にする研究をしてください！」
美鈴は、大声で笑い出した。
「あのね、ばかな人間は、正常を異常にする方には喜んで金を積むのよ。異常な人間が正常になったら、金儲けができなくなるからね。」
「研究の目的は、人類の発展のためだって聞いた覚えがあります！でも、泣かない赤ん坊を造るなんて、そんなの発展なんかじゃないですよ！」
パンッ　・・・　！
頬を叩かれ、二葉はよろめいて床に手をついた。
美鈴は唇を噛み、二葉を睨みつけた。
「あらゆる可能性を試してみるのが研究よ。何千何万の実験を繰り返して、その中で一体いくつの成果が得られると思うの？・・・気が遠くなりそうよ。しかも人間の寿命は限られている。その中でた

だ一つでも日の目を見る栄光なんて、ほんの一握りの人間にしか与えられない。父も兄も、表舞台に立っていた頃はノーベル賞候補なんて騒がれていたけれど、結局裏の世界に引きこもってしまった。何故かわかる？清く正しく安全な研究ばかりやっていては、発展に限界があるからよ！法や倫理を犯してまでも新しい分野に手を出せば、たちまち犯罪者として叩かれる！それでも世の中を変えようと頑張っている人もいるけれど、そんなの無駄なエネルギーよ。いつの時代も新しいことをやろうとする人間は批難される。でもそれがあって、初めて次の時代は発展するのよ。・・・私達は、世間に有無を言わせぬ完璧な研究結果を出せる日を目指しているの。そのためにはお金になる研究をしなければならないし、倫理や法に触れる研究もしなければならないのよ。」

美鈴は、ガラスの向こうにいる赤ん坊を見つめた。

「・・・別に泣かない赤ん坊を商品化しようなんて思っていないわ。何通りもの遺伝子操作、何千回の人工授精、その何億通りの組み合わせのうち唯一出産までこぎつけたのが、この赤ん坊だったというだけ。同じことができる二回できるかどうかも自信はないわ。ただ・・・貴重な存在ということに変わりはないのよ。」

美鈴にとってそれは、この世でただ一人愛した真崎潤一の遺伝子を継いでいる子どもだから。だが、そんなことは口が裂けても声には出さない。

二葉はゆっくりと立ち上がり、言った。

「わかりました。慎重に監視します・・・。でもそれは、研究所の貴重な試料だからではなくて、大好きだった奥様の・・・子どもだからです。」

「・・あんたの思惑なんかどうでもいいわ。しっかり仕事さえしてくれればね。」

部屋を出た美鈴は、大きなため息をついて、うなだれた。

優三の自殺未遂から、丸三年。

重体だった優三の体力の復帰までに1年以上。さらに2年近くの

歳月をかけて、やっと成功した出産。
さすがに、優三の体力は限界だった。
潤一との子を産むことを頑なに拒絶していた優三だったが、妊娠が確実になってからは子どもを守るために一生懸命になっていた。母性本能というものを、美鈴が間近で見た瞬間だった。時々、優三が本当は潤一を愛していたのではないかと、疑いたくなるほどに。
そんな疑問が解消しないままに、優三は息絶えてしまった。
生まれたばかりの子どもの顔も見ないまま意識を失い、そのままになってしまった。
優三の人生が一体何だったのか。
それは、美鈴にはわからないことだ。
ただ、今確かに息づいている真崎潤一と優三の子ども。この子がどうなっていくかによって、優三の人生の意味も変わるのだろう。
「美鈴。」
不意に名前を呼ばれて、顔をあげた。そんな風に呼ぶのは、兄しかありえない。
「二葉の様子はどうだった？」
「大丈夫よ。赤ん坊の監視も、ちゃんとやるって。」
「そうか。」
「あの赤ん坊の養子先、見つかった？」
「・・・養子に、出すか？」
「当たり前でしょう。多忙な私達が子どもなんか育てられない。育て方もわからない。二葉だって、同じ理由で養子に出したじゃない？お兄様の、本当の娘なのに。」
基は、白衣のポケットに手を入れたまま、美鈴を見つめた。
「美鈴は、それでいいのか？」
「え？」
「お前が、育てたくなるかと思って。」
「冗談でしょう？私が、この歳で子育てなんて！？第一、私、子どもなんか大嫌い！」

「だって、潤一君の子じゃないか。ただ一つの、忘れ形見だ。」
美鈴は、キッと基を睨みつけた。
「だから、何？忘れ形見だろうと、関係ないわ。」
「美鈴・・・。」
「あの子はオーナーの子だけど、優三の子でもあるのよ。そんな子を育てられるほど、私はお人好しではないし、おめでたくもないわ！」
そう言い残し、美鈴は走り去った。
基は苦い溜息を残し、自室に戻った。
潤一の死から4年。だが、美鈴の傷は少しも癒えてはいない。だから、あんなに敏感に反応するのだ。
美鈴の啜り泣きが聞こえてくるような気がして、基まで苦しくなる。
（やはり、あのことは一生言うべきではないのだろうな・・・。）
美鈴の誕生にまつわる秘密。初代所長である基の父の威信をかけた、初の人工児。
（これ以上の事実を知ってどうする？もっと苦しくなるだけだ。美鈴の知っている事実。それ以上は何もない・・・それを貫くしかないだろう。）
だが、時々誘惑にかられる。
すべて、告げてしまいたくなる。
こんな研究所に生まれたためか、秘密を守ることには慣れているし、秘密を抱えることは基本的に苦痛ではない。
だが、何十年も胸に秘めたままでいると、時折は誘惑にかられる。
全部吐き出してしまいたくなる。
それで楽になるとは思わない。
多分、口に出した次の瞬間から、死ぬまで後悔することになる。
だから、我慢する。
何度も。
何度でも。

第１３話その２

可愛らしい赤ん坊は、いくら見ていても飽きない。
勉強していても１５分と持たず、二葉はまたガラス越しに赤ん坊を見てしまう。
（さすが優三（奥様）の子。将来は絶対すごい美女になる。今まで見た赤ん坊と全然違うもの。）
だが、しばらくして赤ん坊からは二葉が見えていないのだということがわかった。
赤ん坊がじっとこちらを見ていると思って二葉が手を振ったり表情を変えたりしても、何にも反応しないからである。二人を隔てているこのガラスは、マジックガラスになっているのだろう。
『１２号。今から６時間眠ってください。』
ある時間になると、こういうお休みコールが流れる。
二葉が眠っている６時間は、別の研究員が監視をするのだろう。２４時間完全管理なのだから、交替せざるを得ない。
しかし、「１２号」という呼び方は何とかならないのか。
研究所の持ち物で、人工児の１２号だから「１２号」なのはわかる。だが、ロボットのシリアルナンバーみたいで不快だ。自分が道具で、人間ではないとわかっていても、やはり気持ちのいいものではない。
次の日、今回研究所に来てから初めて基が部屋を訪ねてきた。
二葉はシャープペンを持ったまま、だまって頭を下げた。
「ご苦労だね。赤ん坊は、どうだい？」
基の顔は穏やかで、二葉は安心した。
「今のところ、異常はありません。」
「そうか。」
基は、二葉と向かい合うようにしてベッドに腰掛けた。
「体調は、どうだい？この間のような眩暈とか、頭痛は？」

「急に立ち上がると眩暈はしますが、すぐ直ります。」
「そうか。・・・だいぶ実験台として無理をさせているから、身体に負担をかけすぎた。今後も同じような症状は起こりうる。薬を処方してみたから、試してみてくれ。食事につけておくからね。」
「はい。」
会話が途切れると、目のやり場に困って二葉は赤ん坊の方を見た。実感がなくても、「父」という存在と二人きりになって何を話せばいいかわからないし、どういう顔をすればいいのかわからない。居心地が悪くて、逃げ出したくなる。
「可愛いだろう？あの夫婦の子だからな。」
基の言葉に、二葉は頷いた。
「絶対、美人になりますよ。・・・あの子、私みたいにどこかへ預けられるんですか。」
「そのつもりだ。」
「私では、駄目でしょうか。」
「え？」
基は、思わず二葉の目を覗き込んだ。
「私も、あと1年で二十歳です。高校生をやるにも限界です。その後、この研究所に戻ってあの子を育ててはいけませんか。」
「それは無理だ。私はあの子をこの研究所から出して、普通の人間として育てたいと思っている。」
「では、私も。」
「二葉が、どうやって社会で子ども抱えて生きていくつもりだ？お前に何をして稼ぐことができる？履歴書には何て書くつもりだ？悪いが、私は二葉を社会で生きていかれるように育ててはいない。社会に出たときに違和感なく馴染めるよう、幼少期は研究所から出すが、その後は研究所の所有物として生きていく術しか与えられない。」
「・・・。」
「まあ、いつまで持つか確証はないんだ。あの赤ん坊も、君も。」

基は、歳をとって落ち窪んだ目で二葉をみつめた。
「研究試料だからね。何十年も持つ保障はどこにもない。」
「・・・じゃあ、優三（奥様）は長生きした方ですか。」
「まあ、そういうことになるね。」
「私は、別に長生きなんてしたくありません。セシリアさえ救えれば、それで終わりにしたい。」
基は、眉をひそめて二葉を見つめた。
「生きていたくない、ということか？」
二葉は、汚れのない赤ん坊を見たまま答えた。
「私は罪人ですよ。生きる資格なんかないんです。セシリアのことさえ無ければ、今すぐ実
験台として刻まれてもかまわないんです。」
「生きててよかったと思ったこともないのか？・・・一度も？」
二葉は、唇を震わせた。
「楽しいことも、嬉しいことも、ちゃんとありました。でも、そんなの許されない。」
「許されない？」
「たくさんの人を犠牲にした私に、楽しむ資格なんかないでしょう？」
「・・・そんな悲しいことを言うのか。」
「そうさせたのは、この研究所です！どうせこの赤ん坊だって、同じ道を辿るんです。そして毎日自分に言い聞かせる。『あきらめなさい、これが私の運命（みち）だから』って！」
基は瞳を伏せ、だまったまま部屋を出た。
遠い昔、今と同じセリフを聞いた覚えがある。
それを言ったのが優三だったのか、美鈴だったのか、それは定かではない。
だが、同じ瞳をしている。
それは、そうだ。
皆、同じ血をひいているのだから。

優三の父に当たる元々の遺伝子は、美鈴と基の父の物だったのだから。
（世界中から選りすぐったどの遺伝子よりも、自分の遺伝子を選ぶなんてエゴイストでナルシストだった父らしい。自分よりも優れた人間なんて、信じていなかったんだからな。）
だが、この事実を美鈴は知らない。
今更、優三が妹だったなんて美鈴は知りたくもないだろう。
（遺伝子操作しているんだ。・・・結局、他人と同じだ。）
基は、時々わからなくなる。
一体、自分は何がしたいのだろう。
やりたいと思った実験を、成功するまで繰り返す。限界が来たときには、正直、どうでもよくなっているということも、多くなってきた。
そんな疲れや気の緩みが、事故や失敗の引き金を引くことになる。
そしてそれは、いつも突然やってくる。
ほんの少しの隙をついて、やってくる。

第１３話その３

人里はなれた研究所に篭っていると、世間の動きが読めなくなる。そんな危惧から、遠野研究所は代々「報告者」を雇っていた。世間で一般人として生活しながら、常に警察や司法の動きを監視し、常に基に報告する。

現在の「報告者」は、真崎潤一自ら選択したプロ中のプロ。その男が、潤一の死後も忠実に役割を果たしてくれている。優三や美鈴、二葉の生活も、逐一、基の耳に届いていた。

報告者の存在は、基しか知らない。それは、初代所長の父から受け継いだルールだ。

報告者は夜中に基の下を訪れた。そして、隠し部屋に二人きりになるなり、告げた。

「美鈴さんの取引相手が、警察に引っ張られました。」

「・・・それは、取引前か？」

「取引後です。」

「美鈴は？」

「寸でのところで逃げました。ですが、相手が口を割ればおしまいです。」

基は眉根を固く寄せて、唇を噛み締めた。

それは、いつも怖れていた事態。

それだけに、基はいつも覚悟をして、準備をしてきた。それをとうとう、実行せねばならなくなったのだ。

基は報告者に言った。

「引き続き、監視を頼む。すぐに私も行く。」

だが、報告者はきっぱりとそれを拒絶した。

「なりません！絶対に、研究所から出ないで下さい。」

「じゃあ、誰が美鈴を救う？真崎家の後ろ盾をなくした今、私が行くしかないだろう？」

「一緒につかまりますよ！そしたら研究所はどうなります？」
「美鈴を放ってはおけない。・・・私の人脈がどれほど通用するかわからないが、やるだけやってみる。」
「しかし。」
「私だって、研究所を捨てるつもりは毛頭ない。いざとなれば、美鈴を捨てる覚悟はある。」
「所長・・・。」
「先に行ってくれ。くれぐれも、気をつけてな。」
「・・・はい。」
報告者が足早に闇夜に消え、その直後に基は研究員を招集した。
「緊急事態だ。私はこれから出掛ける。いつ帰れるかは、わからない。美鈴も同じだ。君たちには、今から私が言うことを遵守してもらう。」
研究員達の顔が、いつも以上に強張る。
「一つ、私達が帰るまでは決して新しい実験や手術は行わないこと。二つ、現在進行中の実験については、私が帰るまでは全権を君たちに委ねる。三つ、いかなる緊急時にも、私や美鈴に連絡を取らないこと。四つ、・・・・。」
基は次の言葉を言う前に、一度大きく息を吸った。
「四つ、私からの命が下った際には、この研究所を爆破すること。」
全員の息を呑む音が、静まり返った室内に響き渡った。
基は１０人の研究員全員の顔を見わたし、
「以上だ。後を頼む。」
そう言い残すと、踵を返した。
振り返る猶予は、ない。
研究所へ戻れないことを覚悟し、身辺整理が済み次第、美鈴を救うために出立しなければ。
身支度を整えていると、研究員の一人から内線電話がかかってきた。
『１２号は、どうなさいますか。』

基は、少しだけ口を噤んだ。
研究所の試料でありながら、自分の血をひく娘でもあるという、厄介な存在。
「今までと同様だ。何も、変わらない。」
『その・・・、爆破することになった場合はどうすればいいでしょうか。』
基は、グッと喉を締め付けられたような、そんな感覚に襲われた。
だが、答えは一つ。
「12号を含め、すべての試料を隠滅しろ。・・・すべてだ。」
口にしたことで、基は少しの未練を断ち切れたような気がした。
同じ血をひきながら、試料になりえない失敗作だった美鈴は、救う。二葉は才能や容姿の点では失敗作だが遺伝子操作そのものは成功したため、門外不出の貴重な試料として、研究所と共に消失しなければならない。
いつも、思う。
皮肉だ。

基や美鈴の身に何があったのか、二葉は何も知らなかった。
ただ、いつも通りに赤ん坊の監視をしながら勉強をする。
こんなところに閉じ込められていると、本当に再び高校に通う日が来るのかどうか疑問に思う。
と、そんな時だった。
赤ん坊の様子に、ほんの少しの異変を感じた。
四六時中見張っているのだからこそ、気付いた異常かもしれない。
顔色が少し違う。表情も、強張って見える。
何しろ「泣かない」赤ん坊なのだから、見た目の変化を信じるしかない。二葉は非常用のボタンを押した。
間もなく、白衣姿に白いマスクをした研究員の一人が飛んできた。
「どうしました？」
「赤ん坊の顔色がおかしいんです。表情も、ちょっと。」

研究員はカードキーで扉を開け、ガラス壁の向こう側に入っていった。
研究員は体温を測ったり、聴診器で心音を確認したりしていたが、やがて赤ん坊を抱えて出てきた。
「詳しい診察をするので、連れて行きます。１２号はこのまま待っていてください。」
「・・・そんなに悪いんですか？」
「わかりません。」
研究員が足早に部屋を出て行くと、自動的にロックがかけられてしまい、二葉は独り取り残された。
ただ、不安だけが胸をよぎる。
赤ん坊はどうなってしまうのか？
死んでしまうなんてことだけは、絶対に嫌だ。
大好きな優三の忘れ形見。所長だって、２４時間の監視付きで大切にしているのだから、どんな手段を使ってでも助けてくれるはずだ。
二葉は、そう信じて疑わない。
しかし、頼みの所長も美鈴も今はいない。
しかも、いつ帰ってくるかわからない。
研究員達は困惑していた。
真崎潤一を死に至らしめたウィルスにより、研究員が全滅した後に招集された研究員の数は、少ない。その上、真崎家からの援助が断ち切られたために資金が不足し、研究員の質も以前ほどには保てなかった。医師免許を持つ者もいるが、遺伝子操作された赤ん坊の治療はおろか、異常の原因をつきとめることもできない。
「所長に、連絡をとるしかないだろう。」
「いや、それは駄目だ。所長が言っただろう？いかなる緊急時にも連絡はとるな、と。」
「じゃあ、どうするんです？全権を委ねられたとはいえ、私達では手の施しようがない。」

「とにかく出来ることをしながら、所長が帰るのを待つしかないだろう。」
「出来ること？そんなの、ほとんど無いじゃない！？」
「他に手段があるか！？・・・大体、所長に連絡って、どう取るんだよ？携帯か？番号もアドレスも知らないのに。」
「・・・。」
皆、唇を噛み締めて俯いた。
どうすればいいのか。
「確かなことは一つ。このままでは、赤ん坊は死んでしまう。」
「でも、こんな状況だもの。所長だって文句は言えないはずよ。」
「そんなに甘いわけないだろう？全部俺たちの責任になる。」
「そんな！手を尽くしても、結果が見えているというのに！」
重苦しい空気が、研究員達の間を漂う。
大事な試料を死なせてしまった責任など、どう取れというのか？
所長が留守にして連絡が取れず、研究員達の手に負えない事態。
それによる失態とは、許されるものなのか？
所長である基の性格。
研究主任である美鈴の性格。
研究至上主義の二人。
無理だ。
絶対に許してくれるわけは、ない。
「・・・このままじゃ、俺たちのほうが研究材料として刻まれるのが落ちだな。」
「冗談じゃない！・・・出来ることと、出来ないことがあるんだ。」
「どうする？逃げるか？」
「まさか！それこそ、地の果てまで追われて殺されるぞ。研究所の秘密を知っている限り、この研究所で死ぬか、記憶をなくした廃人状態で放り出されるかの、どちらかしかない。」
「どうしたらいいんだ！？どうすれば！！」
そのとき、ずっと黙っていた一人の研究員が口を開いた。

「・・・どうせなら、駄目元でやってみるか？」
「何を？」
「この研究所で、研究員以外の者に責任を負ってもらうんだ。」
「研究員以外の者？」
「・・・１２号さ。」
「！！！」

第１３話その４（最終話）

二葉は、小雪の舞う森林の間を彷徨っていた。
方向など、全くわからない。
足元は、人の踏んだ気配さえない雑草だらけの土。
上を見れば、空を覆わんばかりの杉、杉、杉。
毛布にくるんだ赤ん坊をしっかりと抱えて、二葉の足はただただ、前へと歩みを進めた。
研究員達の会話に乗せられ、二葉は赤ん坊を病院へ連れて行こうと必死だった。
それぞれの検体から離れられないという研究員達に代わって、瀕死の赤ん坊を医者に診せに行くという役目を、二葉自ら買って出たのだ。
それが、研究員達の仕掛けた罠とも知らずに。
研究員達は二葉にお金を渡し、「通りに出ればタクシーをひろえるから。」と言って送り出した。だが、わざと人目につかないように建てられた樹海の中の研究所から、一人の少女が歩いて車道までたどり着けるわけがない。歩けば歩くほど、樹海の奥深くへ迷い込むだけだ。
ただでさえ朝晩は冷え込むというのに、小雪まで舞えば、結果は早く出る。
赤ん坊は間もなく死に、そして二葉も帰らぬ人になる。
研究員達の所長に対する言い分は、「赤ん坊の危機を感じ取った二葉が、研究員達が目を放した隙に赤ん坊を連れて研究所を勝手に抜け出した。」というものだ。
固いセキュリティーをどうやって潜り抜けたのか、という問いに対する答えは見つけられない。だが、それでも決行せねばならないほど、研究員達は切羽つまっていた。とにかく、自分達の息のかかる場所で、赤ん坊を死なせることだけは避けたかった。責任を転嫁

できるものに、すべて被せてしまいたかった。
そして二葉は、研究員達の思惑通りに樹海を彷徨っているのだ。
やがて日は暮れ、小さな懐中電灯で足元を照らして進むしかなくなった。
歩いても、歩いても、車の音さえ聞こえない。
（私は、道を間違えてしまったんだ。でも、引き返そうにも方向がわからない。もう、どっちへ行けばいいか、全然わからない・・！）
小さな氷の塊のような雪が、真っ黒な夜の中で白く光って見える。
火のように熱かった赤ん坊の身体から、いつの間にか体温を感じなくなっている。
二葉はふと、赤ん坊の顔を見た。
毛布から覗く顔を、懐中電灯で照らしてみる。
（・・・？）
眠っているのか、何なのか、よくわからない。
だが次の瞬間、電流が走ったかのような恐怖が二葉の全身を駆け巡った。
二葉の息が、止まる。
慌てて赤ん坊の腕を取った。
脈は？
わからない。
赤ん坊の鼻や口に手をあててみる。
頬を赤ん坊の口元に近づけてみる。

息を、していない。

二葉は声にならない悲鳴をもらした。
腕が、手が、ひとりでに震えだしている。
だが、二葉は一縷の望みを捨てなかった。赤ん坊を再びしっかりと胸に抱きしめる。
（ただ寒いから、だから息をしていないように見えるだけかもしれ

ない。温かくなれば、また呼吸をするかもしれない！）
二葉は、赤ん坊をしっかりと抱いて走り出した。
懐中電灯で木にぶつからないようにということだけ気をつけて、とにかく走り続けた。
駄目だ。
絶対に、死んじゃ駄目だ！
方向なんて、やっぱりわからない。
時間も、わからない。
これからどうすればいいのか、わからない。
答えが欲しい。
数学の問題集のように、解説付きの、明解で唯一無二の解答が欲しい！
風が強くなってきた。
靴下を身につけていないふくらはぎが、棒のように固まっている。
外気がこんなに冷たいのに、抱えている赤ん坊の体温は全く感じられない。
泣きたい気持ちをグッとおさえて、二葉は今一度前を睨みつけた。
小雪が、行く手で渦を巻いている。
その渦の中心に向かって、二葉は最後の力を振り絞り進み続けた。

どれくらい、時間が経っただろうか。
小さくて固い雪が舞う漆黒の空。夜中であることに、かわりはないと思う。
吸い込んだ空気が肺をつきさすような寒さの中、二葉は一筋の光を見た。
意思が朦朧としているため、幻ではないかと疑う。
だが、今度は光がまっすぐに二葉の顔を照らしてきた。
眩しさに目をひそめると、女の声がした。
「二葉！二葉でしょう？」
疲れた瞼を何とか見開く。

と、そこに見えたのはコート姿の美鈴だった。
美鈴は、呆然としている二葉の抱えている赤ん坊に手をのばした。だが、すぐにその指を縮め、拳を握った。
「すみません・・・、すみません・・・！」
二葉は、無意識のうちに美鈴に謝っていた。
美鈴は赤ん坊の毛布をはがし、その身体を再び二葉に抱かせた。
二葉は、赤ん坊の身体が冷たく、固いことに驚いた。
あんなに柔らかかったのに。
あんなに、温かかったのに。
こんなことが、あるのか。
美鈴は、静かに言った。
「二葉。よく覚えておきなさい。これが、死体というものよ。」
「死体・・？」
「そうよ。」
「駄目なんですか？手当てしても、もう、駄目なんですか？」
「無理よ。わかるでしょう？こんなに冷たくなっている。もう、どうしようもないわ。」
そういえば、生きているときは、もっと軽かった気がする。
今は、重くて、カチカチで、冷たくて、「生きているもの」の気配は微塵もない。
石のようだ。
無機質な、・・・「もの」だ。
その初めての感触に、二葉は恐ろしくて赤ん坊を美鈴に返そうとした。だが、美鈴がそれを許さなかった。
「しっかり受け止めなさい！これが死だということを！」
「私が、殺したんですね・・・。私が、病院へ連れて行けなかったから・・・。」
美鈴は、唇を噛み締めていた。
二葉のピアスの盗聴器から研究員達とのやりとりを聞いていた。
研究員達の企みはすぐに見破れたし、こういう結果になることも予

想していた。だから、二葉を責めることはできない。
しかしこの赤ん坊は、二葉が優三の忘れ形見としてこの上なく大事にしていた以上に、美鈴にとっては潤一の忘れ形見であり、最後の心の拠り所だった。
本当は、二葉を責めたい。
殴って気が治まるのなら、そうしたい。
だが、今回ばかりはそれができない。
元を正せば、臓器の取引現場を押さえられるようなヘマをした自分の失態が原因なのだ。
赤ん坊を手に、肩を大きく震わせて泣き崩れる二葉を眺めながら、美鈴も「泣きたい。」と思った。
だが、二葉に涙なんか見せられない。
二葉が道具で、美鈴が所有者だということを徹底させるためには、ここで同等の立場で涙することは許されない。美鈴の自尊心も、それを許さない。
美鈴は奥歯を噛み締め、宙を見上げて耐えた。
優三が繰り返し流産しながら、死と引き換えに産み落とした赤ん坊だった。やせ細った身体で、それでも全力を尽くした優三の最期の言葉。
―　私が研究所の道具だから、協力するわけじゃないのよ。道具の使命なんて、私にはどうでもいいことだもの。私はただ、この世に存在した意義が欲しいだけ。あんな男の妻になっただけの人生なんて御免だから　―
妊娠して出産するまで、優三の意思による協力がなければ、絶対に成立しない研究だった。胎児に気を遣って大事に育てたり、出産に耐える体力・気力は優三の意思に頼るしかない。
ただの道具には、望めないし、できないことだった。
（優三の最期の意地だったのね。『道具』の意思に頼らねば成立しない研究があるということを私達に知らしめて、そして私達の『道具』から抜け出した。意思を持った『人間』として、死んでいった・

・・・。）

思い切り顎を上げて仰いだ宙の一点から、雪が放射状に降り注ぐ。

瞳を閉じると、瞼の上に舞い降りた雪が解けて、頬を伝い落ちていった。

二葉もいつか、優三と同じように意志を持って動き出すだろう。

研究所の作り出したセシリアという呪縛を解き払って、事を起こすかもしれない。

だが、それは出来る限り先のことにしなければならない。まだ当分は研究所の道具として思い通りに動いてもらわねばならない。二葉は相当の投資をした研究所の大事な財産なのだから、それなりの働きはしてもらわないと採算に合わない。研究所の発展も滞ってしまう。

だから、美鈴は二葉との間に徹底した主従関係を貫こうと必死なのだ。

それは、美鈴にしかできない。

時折でも、二葉を娘として見てしまう兄では、甘さが出てしまう。二葉に道具であることを知らしめておくことこそは、自分の使命であると美鈴は確信している。

やがて美鈴は、二葉の肩を抱いて、立ち上がらせた。

「さあ、帰るわよ。」

うつむいたままの二葉から少し離れ、美鈴は歩き出した。

何があろうと、自分達が帰る場所は一つしかない。

そして、進むべき道も一つしかない。

兄がどのようにして今回の不始末を処理してくれたか、美鈴は知らない。

いつも、そうだった。

美鈴の表に立って泥を被ってくれたのは、兄だった。

だから、兄が研究を続ける限り、絶対についていく。

それは、運命ではない。

美鈴の選んだ、「道」なのだ。

そんなことを心に刻みつけながら、美鈴はただ一本の道を、二葉と共に歩き続けた。
今までと同じように。
ただ、ひたすらに。
この道が間違いでないと、信じて。
この闇夜はいつか明けると、信じて。

遠野遺伝子工学研究所。
住所を持たないこの秘密の建物で作り出された少女は、親友を冷たい眠りから覚ますために、再び校門をくぐることになる。
桜の季節。
金木犀の季節。
そして、寒椿の季節。
少女は、花びらが風に舞い散るのを待って任務を終える。
遠野二葉。
この名がネット上で密やかに囁かれるようになった頃・・・

冬の陽光に照らされて、校門前のレンガ畳に一つの影が落ちた。
その影には、紅蓮の小さな光が宿っていた。
研究所の人工児の証である紅蓮のピアス・・・
それは、次の生贄を狙う運命を背負った少女の影。

そしてまた、次の罪が始まる。

第１３話その４（最終話）（後書き）

この物語は、別掲載「紅蓮の影」（ジャンルは学園）をもって完結します。読みきり作品として掲載済みです。物語の結末を、ぜひ見届けてください。長編ながら、ここまでお付き合い頂き本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1119b/

紅蓮の道（あかのさだめ）

2010年10月8日15時59分発行